



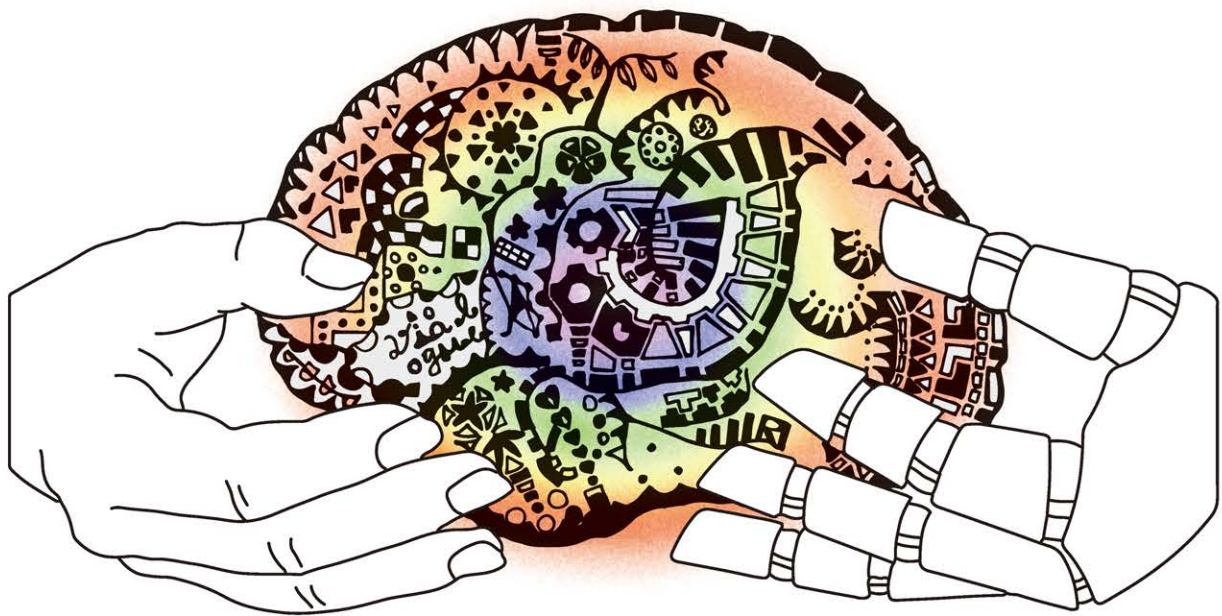
JCSS & JSCP 2018

日本認知科学会第35回大会

日本認知心理学会第16回大会

立命館大学認知科学研究センター共催

認知研究の対話と展開



両大会プログラム・抄録集



会場: 立命館大学 大阪いばらきキャンパス
A棟, B棟(立命館いばらきフューチャープラザ), C棟
(大阪府茨木市岩倉町2-150)

会期: 8月30日(木)~9月1日(土) 日本認知科学会第35回大会
9月 1日(土)~9月2日(日) 日本認知心理学会第16回大会

目次

ごあいさつ	1
大会委員一覧	2
会場へのアクセス	4
キャンパスマップ	5
フロアマップ	6
スケジュール	9
両大会参加者へのご案内	10
両大会共同企画	11
日本認知科学会第 35 回大会	17
参加者へのご案内	19
発表者へのご案内	20
8 月 30 日	21
8 月 31 日	50
9 月 1 日	60
査読者一覧	72
発表者・企画関係者索引	73
日本認知心理学会第 16 回大会	79
発表者へのご案内	80
8 月 31 日	82
9 月 1 日	84
9 月 2 日	98

ごあいさつ (Welcome message)

日本認知科学会第 35 回大会・日本認知心理学会第 16 回大会 共同開催にあたって

2018 年度の日本認知科学会第 35 回大会、および日本認知心理学会第 16 回大会は、立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催することになりました。両学会の大会が連携して開催されたのは 2006 年中京大学以来となります。両学会の有機的な連携を目指し、多彩なプログラムを用意しました。

大阪いばらきキャンパスは、立命館のいちばん新しいキャンパスとして 3 年前に新設されました。この地に、総合心理学部が 2 年前に開設され、今年度からは、新しい大学院、人間科学研究科もスタートしました。新しい学部、大学院の息吹き、エネルギーを感じて頂き、ご意見をうかがえれば望外の幸せです。大阪で皆様にお目にかかれることを楽しみにしています！

両大会共同開催 名誉大会委員長 佐藤隆夫

「認知研究の対話と展開」

この度、日本認知科学会と日本認知心理学会が共同して、立命館大学大阪いばらきキャンパスで大会を開催する運びとなりました。2006 年以來の 12 年ぶりのコラボレーションとなります。この間、幾度か合同で開催する話も出ましたが、時期や開催校の折り合いがつかず現在に至っていただけ聞いています。本年度は、いくつかの幸運が重なったおかげで実現が可能となり、「認知研究の対話と展開」というテーマのもと、両学会が大会を合同開催する運びとなりました。

認知科学という学問領域が生まれてから 60 年あまりが経過し、ナイサーの『認知心理学』が出版されてから 50 年あまりになります。この間、認知研究のアプローチは、関連する学問領域からさまざまなアイデアを取り込みながら拡張し、ゆっくりと、しかし大きく変貌してきました。その間に、認知研究は、当初の野心的な試行錯誤の集まりから、成熟して安定感のある学問領域に移行しました。そうした今だからこそ、本大会は、認知研究者自身が認知研究を再発見する機会にしたいと考えました。学際的な認知研究の原点に立ち返りつつ、これからの認知研究の夢を語り合える場になることを願っています。多くの方々、特に若手研究者の参加をお待ちしています。

日本認知心理学会第 16 回大会準備委員会 委員長 仲真紀子

日本認知科学会第 35 回大会 大会委員長 服部雅史

追伸：6 月 18 日の大阪府北部地震、および 7 月上旬の西日本豪雨で被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。

両大会関係委員一同

日本認知科学第 35 回大会 運営委員会

名誉大会委員長

佐藤 隆夫 (立命館大学)

大会委員長

服部 雅史 (立命館大学)

実行委員長

大石 衡聴 (立命館大学)

プログラム委員長

林 勇吾 (立命館大学)

実行委員

稲葉 光行 (立命館大学)

織田 涼 (東亜大学)

北岡 明佳 (立命館大学)

京屋 郁子 (立命館大学)

藏藤 健雄 (立命館大学)

嶋田 総太郎 (明治大学)

田浦 秀幸 (立命館大学)

谷口 忠大 (立命館大学)

都賀 美有紀 (立命館大学)

永井 聖剛 (立命館大学)

西田 勇樹 (立命館大学)

破田野 智己 (立命館大学)

破田野 (竹澤) 智美 (立命館大学)

服部 郁子 (立命館大学)

松室 美紀 (立命館大学)

村上 嵩至 (立命館大学)

プログラム委員

市川 淳 (京都工芸繊維大学)

岡本 雅史 (立命館大学)

小森 政嗣 (大阪電気通信大学)

正田 悠 (立命館大学)

鈴木 聡 (大阪経済法科大学)

田村 昌彦 (立命館大学)

寺井 仁 (近畿大学)

日高 昇平 (JAIST)

本田 秀仁 (安田女子大学)

村山 綾 (近畿大学)

森田 純哉 (静岡大学)

協力 (大会運営システム管理)

伴 峰生 (東京大学)

日本認知心理学会第16回大会 準備委員会

準備委員会名誉委員長

佐藤 隆夫 (立命館大学)

準備委員会委員長

仲 真紀子 (立命館大学)

準備委員会事務局長

永井 聖剛 (立命館大学)

準備委員会副事務局長

都賀 美有紀 (立命館大学)

プログラム委員会委員長

河原 純一郎 (北海道大学)

準備委員会委員

猪股 健太郎 (関西学院大学)	服部 雅史 (立命館大学)
大石 衡聴 (立命館大学)	肥後 克己 (立命館大学)
春日 秀朗 (福島県立医科大学)	藤井 芳孝 (立命館大学)
川野 健治 (立命館大学)	松下 戦具 (大阪樟蔭女子大学)
北岡 明佳 (立命館大学)	満田 隆 (立命館大学)
京屋 郁子 (立命館大学)	宮原 道子 (大阪観光大学)
斎藤 元幸 (関西学院大学)	村上 嵩至 (立命館大学)
妹尾 麻美 (立命館大学)	森 数馬 (情報通信研究機構)
富高 智成 (京都医療科学大学)	山崎 優子 (立命館大学)
破田野 智己 (立命館大学)	山本 晃輔 (大阪産業大学)
破田野 (竹澤) 智美 (立命館大学)	和田 有史 (立命館大学)

プログラム委員会委員

上田 祥行 (京都大学)	西崎 友規子 (京都工芸繊維大学)
小川 健二 (北海道大学)	山田 陽平 (愛知学泉大学)
金谷 英俊 (立命館大学)	

監査

星野 祐司 (立命館大学)
石松 一真 (滋慶医療科学大学院大学)

会場へのアクセス (Access guide)

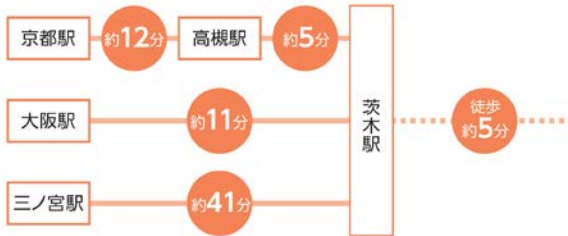
立命館大学 大阪いばらきキャンパス



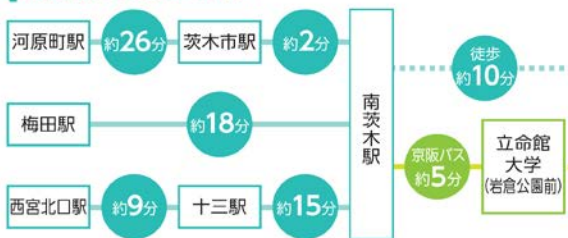
〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150
 (2-150, Iwakura-cho, Ibaraki, Osaka
 567-8570 Japan)

車でのご来場はご遠慮下さい。
 (Please refrain from coming by car.)

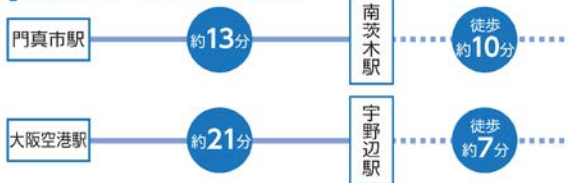
JRでお越しの方は



阪急電鉄でお越しの方は



大阪モノレールでお越しの方は



京阪バスでお越しの方は



大阪いばらきキャンパス

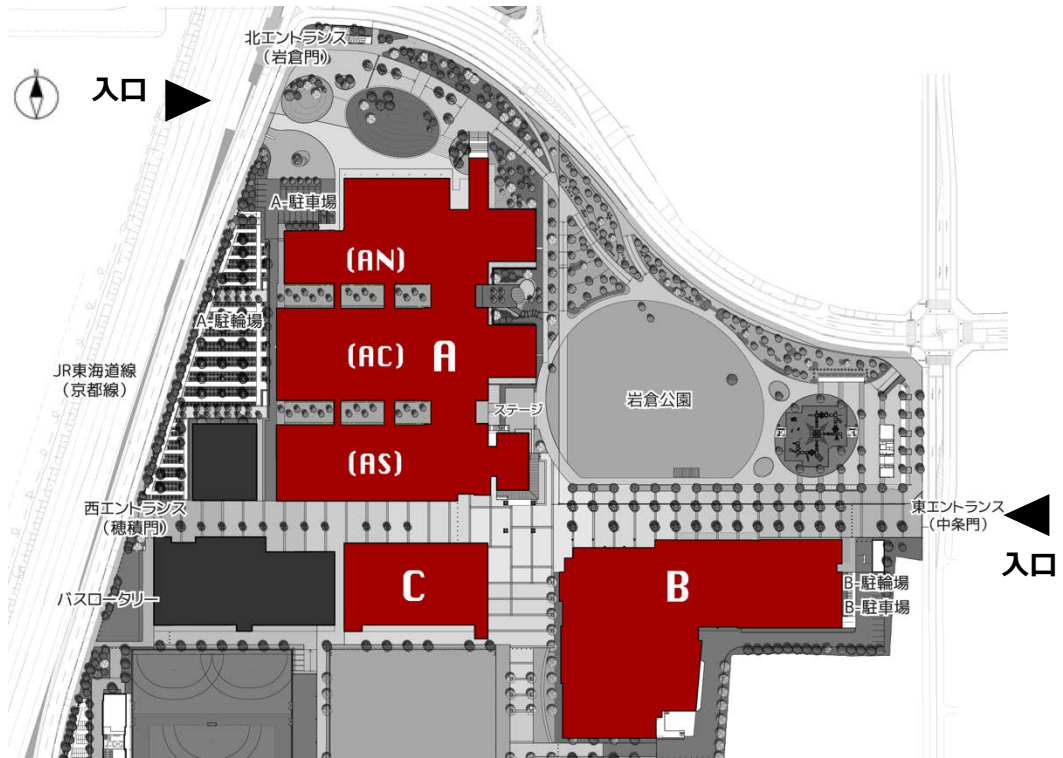
JR 茨木駅から：東口から出て、線路沿いの歩行者専用道路をお進み下さい。

(From JR Ibaraki Station: Please get out of the east exit and follow the pedestrian street along the railway track.)

阪急南茨木駅から：改札を出て左に行き、モノレールの駅に向かって進み、階段で駅をおり、道路の高架沿いに歩き、「奈良」交差点で右に曲がって真直ぐ進むと、東から入ることができます。

(From Hankyu Minami-Ibaraki Station: Leave the ticket gate, go to the left, proceed towards the monorail station, stay at the station on the stairs, walk along the road elevation, turn right at the "Nara" intersection and proceed straight, and you can get in from the east.)

キャンパスマップ (Campus map)



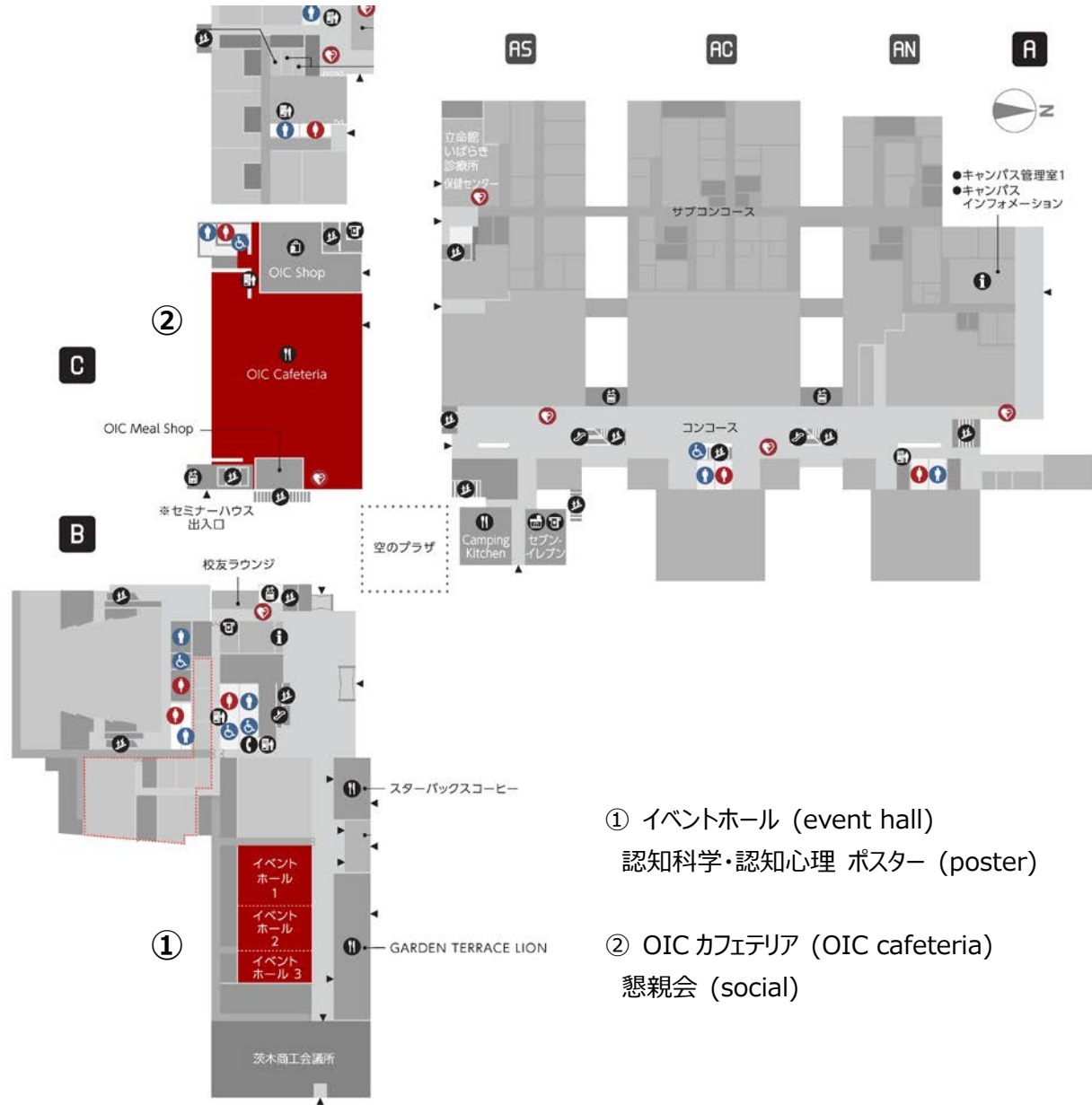
会場は、キャンパス内 A 棟, B 棟, C 棟となります。
(The venues are in Building A, B, and C on campus.)

受付 (registration)	B 棟 2F ホワイエ (foyer)	8/30-9/1	8:10-プログラム終了
	B 棟 2F R-AGORA	9/2	8:10-17:10
クローク (cloak room)	C 棟 2F C273	8/30-9/2	8:10-プログラム終了 15 分後
交流スペース・企業展示 (common room)	C 棟 2F C271, C272	8/30-9/2	8:10-プログラム終了 15 分後
懇親会 (social)	C 棟 1F OIC カフェテリア (OIC cafeteria)	9/1	18:00-19:30

キャンパスは、全面禁煙となっています。
(No smoking allowed on campus.)

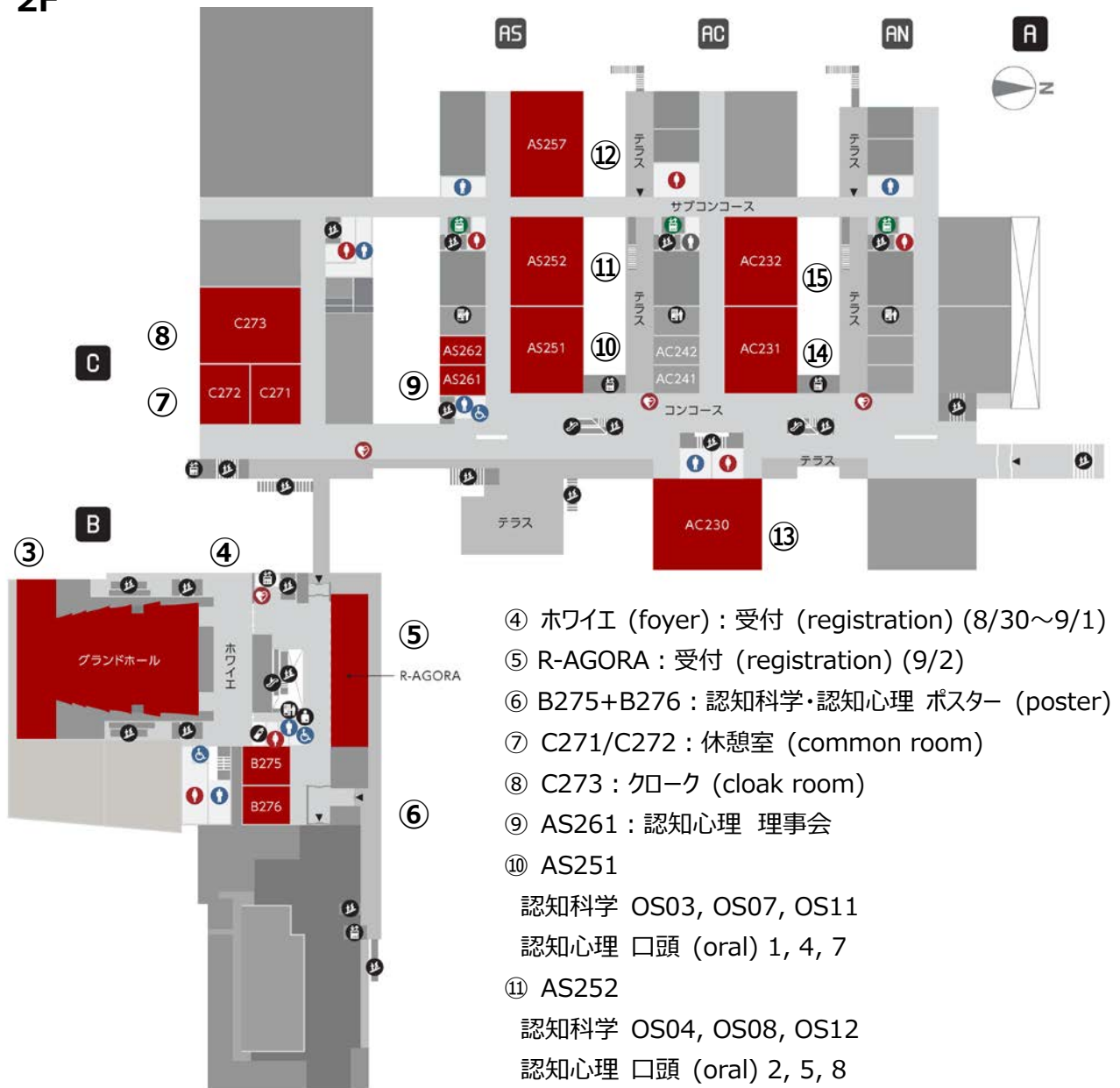
フロアマップ (Floor map)

1F



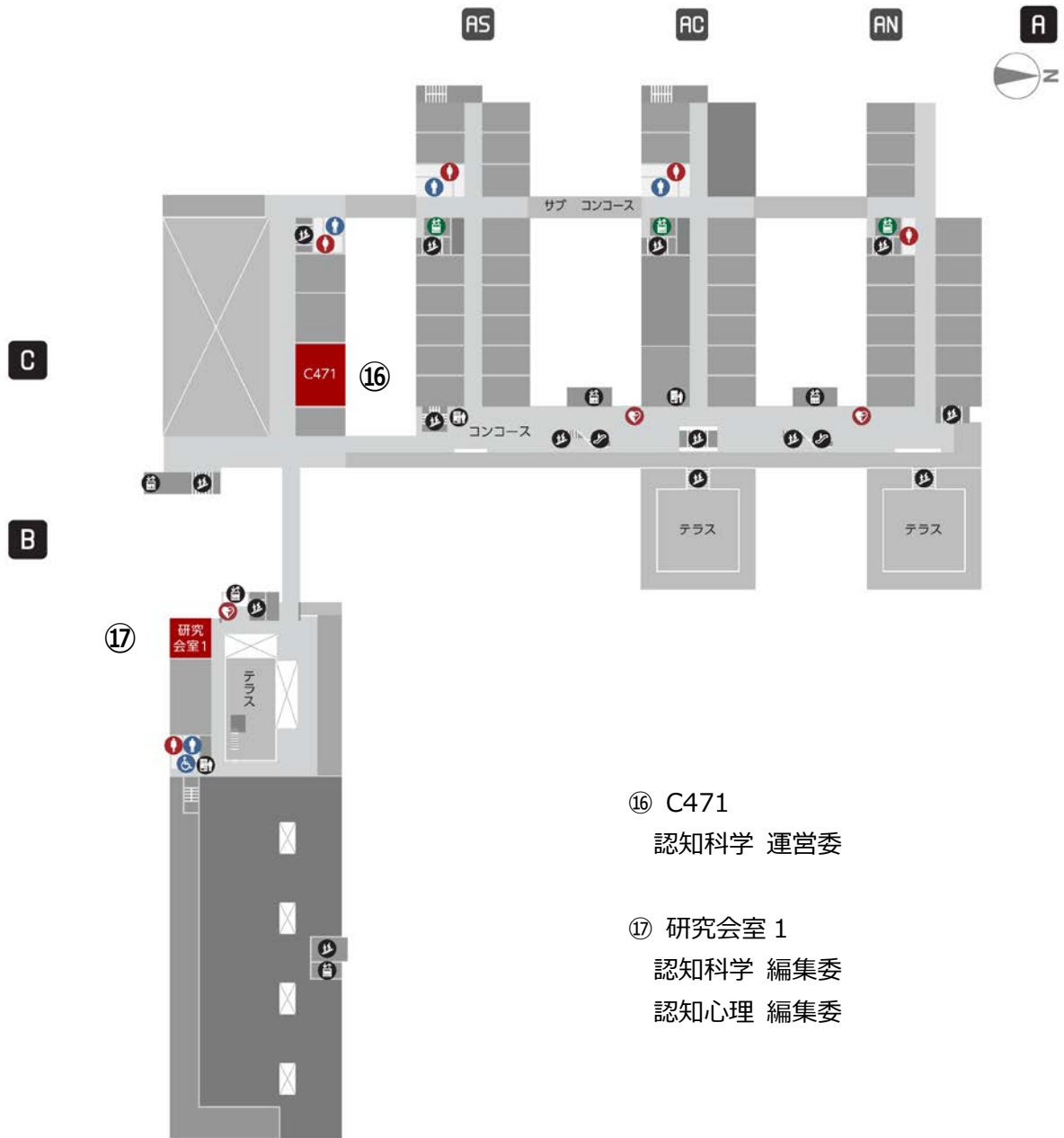
- ① イベントホール (event hall)
認知科学・認知心理 ポスター (poster)
- ② OIC カフェテリア (OIC cafeteria)
懇親会 (social)

2F



- ③グランドホール (grand hall)
共同企画 (joint program)
招待講演 J. R. Anderson
招待講演 Lynne Reder
シンポジウム漫才 かまいたち
パネルディスカッション (panel discussion)
- ④ホワイエ (foyer) : 受付 (registration) (8/30~9/1)
- ⑤ R-AGORA : 受付 (registration) (9/2)
- ⑥ B275+B276 : 認知科学・認知心理 ポスター (poster)
- ⑦ C271/C272 : 休憩室 (common room)
- ⑧ C273 : クローク (cloak room)
- ⑨ AS261 : 認知心理 理事会
- ⑩ AS251
認知科学 OS03, OS07, OS11
認知心理 口頭 (oral) 1, 4, 7
- ⑪ AS252
認知科学 OS04, OS08, OS12
認知心理 口頭 (oral) 2, 5, 8
- ⑫ AS257
認知心理 ベーシック&フロンティアセミナー (seminar)
認知心理 口頭 (oral) 3, 6, 9
- ⑬ AC230
認知科学 口頭 (oral) 2, 3
認知心理 総会
Psychonomic Society Collaborative Symposium
- ⑭ AC231
認知科学 OS01, OS05, OS09
認知心理 シンポジウム (symposium)
認知心理 ワークショップ (workshop)
- ⑮ AC232
認知科学 OS02, OS06, OS10

4F



①⑥ C471
認知科学 運営委

①⑦ 研究会室 1
認知科学 編集委
認知心理 編集委

JCSS & JSCP 2018

8月30日(木) 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

JCSS 2018	グランドホール						14:00 Anderson 講演	14:50 会長講演	15:00 安西講演	16:00			
	AC231	8:40 OS01: サマースクール		11:10						16:10 OS05: Nudge		18:40	
	AC232	OS02: 認知コントロール								OS06: ホモ・クオリタス			
	AS251	OS03: 「生きる」								OS07: 知覚と相互行為			
	AS252	OS04: 認知ミラーリング								OS08: 協調学習			
	イベントホール B275+B276				11:20		13:50						
	研究会室1					12:05 編集委	13:05						

8月31日(金) 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

JCSS 2018	グランドホール	8:40 口頭 s01	10:10 シンポ: 認知神経科学	10:20	11:50	12:50 総会 (野島賞)	13:50 フェロー 講演	14:50 Reder 講演	15:00	15:50			
	AC231									16:00 OS09: 食感オノマトペ		18:30	
	AC232									OS10: 記号接地問題			
	AS251									OS11: プロジェクション			
	AS252									OS12: エージェント科学			
	C471				11:50	12:50 運営委							
	AS257							12:50			17:00		

9月1日(土) 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

JCSS 2018 JSCP 2018	AC230	8:40 口頭 s02	10:10 口頭 s03	10:20	11:50							
	グランドホール							14:40 シンポ: 漫才	16:10	16:30	17:50	
	カフェテリア										18:00	19:30 懇親会
	イベントホール					12:00	14:30					
	AS261	8:40	10:10	10:20	11:50	12:45	理事会	13:45				
	AC231		8:40 シンポ: 記憶	10:10	10:20 シンポ: 脳							
	AS251		8:40 口頭 p01	10:10	10:20 口頭 p04							
	AS252		8:40 口頭 p02	10:10	10:20 口頭 p05							
	AS257		8:40 口頭 p03	10:10	10:20 口頭 p06							

9月2日(日) 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

JSCP 2018	AC230			10:20	11:20 総会			14:10	17:10			
	AC231	8:40	10:10					Psychonomic Society Collaborative Symposium				
	AS251		8:40 シンポ: 説明	10:10								
	AS252		8:40 口頭 p07	10:10								
	AS257		8:40 口頭 p08	10:10								
	AS257		8:40 口頭 p09	10:10								

■ 日本認知科学会第35回大会企画
 ■ 日本認知心理学会第16回大会企画
 ■ 両大会共同企画
 ■ 一般公開企画

両大会参加者へのご案内

(1) 両大会参加受付

場所：立命館大学 大阪いばらきキャンパス B棟 2階（グランドホール前）

時間：8月30日(木) 8:10-18:40（ホワイエ）

8月31日(金) 8:10-18:30（ホワイエ）

9月1日（土）8:10-17:50（ホワイエ）

9月2日（日）8:10-17:10（R-AGORA）

(2) クローク

場所：立命館大学 大阪いばらきキャンパス C棟 2階 C273

時間：8月30日(木) 8:10-18:55

8月31日(金) 8:10-18:45

9月1日（土）8:10-19:45

9月2日（日）8:10-17:25

(3) 交流スペース（兼企業展示）

場所：立命館大学 大阪いばらきキャンパス C棟 2階 C271, C272

時間：8月30日(木) 8:10-18:55

8月31日(金) 8:10-18:45

9月1日（土）8:10-19:45

9月2日（日）8:10-17:25

(4) 懇親会

9月1日(土) 18:00 ごろから C棟 1階 OIC Cafeteria にて、軽食と飲み物をご用意いたします（開場は 17:50 ごろ）。大会参加者は無料です。どうぞお気軽にご参加下さい。

(5) その他

- ・ キャンパス内は全面禁煙となっています。また、キャンパス周辺での喫煙もご遠慮ください。ご協力をお願いします。
- ・ グランドホール内では、ふた付きペットボトル（水・お茶）による水分補給以外の飲食はご遠慮ください。
- ・ 無線 LAN は、学内で eduroam が利用できます。また、希望者には、立命館大学統合情報システム RAINBOW の ID を発行しますので、会場内であればどこでも無料でご利用になれます。詳しくは、受付でお尋ねください。
- ・ 昼食は、C棟 1階 OIC Cafeteria（日曜休）の他、近隣のお店をご利用ください。受付でランチマップを配布します。

両大会共同企画 (Joint program)

日本認知科学会第 35 回大会・日本認知心理学会第 16 回大会 共同企画
立命館大学大学院人間科学研究科 開設記念イベント (後援：立命館大学総合心理学部)

招待講演： John R. Anderson
「認知モデリング研究の過去・現在・未来」
(Past, present, and future of cognitive modeling research)

日時：2018 年 8 月 30 日 (木) 14 時 00 分～14 時 50 分

場所：B 棟 (立命館いばらきフューチャープラザ) 2F グランドホール

企画：

林 勇吾 (立命館大学)・服部 雅史 (立命館大学)

司会：

林 勇吾 (立命館大学)

講演：

John R. Anderson (Carnegie Mellon University)

本講演では、まず認知心理学の研究によって得られた理論が計算機上で動作するコンピュータモデルとしてどのように実現可能なのかについての解説がなされる。その上で、同氏が提唱・開発し、世界の多くの研究者を魅了して利用されてきた ACT-R に関するこれまでの研究や現在の取り組み、今後の展開についてお話しいただく。さらに、同氏の研究が日常場面 (教育や医療など) の問題に対してどのように応用されてきたかも取り上げ、ACT-R を基盤として作成された学習支援システム、Cognitive Tutor に関するこれまでの研究成果も紹介していただく予定である。

日本認知科学会第 35 回大会・日本認知心理学会第 16 回大会 共同企画
立命館大学大学院人間科学研究科 開設記念イベント（後援：立命館大学総合心理学部）

招待講演： Lynne Reder
「頻度が記憶に及ぼす効果：資源制約理論」
(Frequency effects on memory: A resource-limited theory)

日時：2018 年 8 月 31 日（金） 15 時 00 分～15 時 50 分

場所：B 棟（立命館いばらきフューチャープラザ）2F グランドホール

企画：

仲 真紀子（立命館大学）・林 勇吾（立命館大学）・服部 雅史（立命館大学）

司会：

仲 真紀子（立命館大学）

講演：

Lynne Reder (Carnegie Mellon University)

情報処理を行う対象をよく知っていればいるほど、ワーキングメモリの容量は少なくて済む。このことを 3 つの実験により示した。実験 1 では、漢字の視覚探索課題を用い、親近性が連合学習のしやすさに影響することを明らかにした。実験 2 では、この効果がワーキングメモリの消費によるものであることを示した。実験 3 では、算数課題を使って親近性の影響を明らかにした。以上は、ワーキングメモリが刺激の親近性や刺激に関する経験の影響を受けること、また、新奇な材料を迅速に正確に学習するためには対象の弁別訓練が必須であることを示した最初の実験研究の成果である。

Three experiments provide evidence that working memory resources are consumed as an inverse function of the familiarity of the chunks (or elements) being processed: In Experiment 1, Chinese characters are differentially familiarized in a visual search task. Ease of learning novel conjunctions of characters associated to English words is strongly affected by the familiarity of the constituents. Evidence that this was due to WM consumption was supported by an interaction of N-back level of difficulty and familiarity of the characters. Experiment 2 replicated the familiarity effect on N-back performance using differential familiarization of “Fribbles”. Experiment 3 provided converging evidence that degree of familiarization of stimuli affects working memory by varying the difficulty of an algebra solving task that requires the use of these stimuli. The results are the first experimental demonstrations (as compared with quasi-experiments) that working memory resources are affected by stimulus familiarity/experience and that discrimination training is critical for fast and accurate learning of novel chunks.

日本認知科学会第 35 回大会・日本認知心理学会第 16 回大会 共同企画
立命館大学大学院人間科学研究科 開設記念イベント（後援：立命館大学総合心理学部）

シンポジウム

「ロボットはプロの漫才師の仕事を奪えるのか： 実演で示す身体性認知研究の展望」

日時：2018 年 9 月 1 日（土） 14 時 40 分～16 時 10 分

場所：B 棟（立命館いばらきフューチャープラザ）2F グランドホール

企画：

岡本 雅史（立命館大学）

司会：

岡本 雅史（立命館大学）・大石 衡聴（立命館大学）

公演：

かまいたち（株式会社クリエイティブ・エージェンシー）

パネリスト（順不同）：

岡本 雅史 [認知言語学] (立命館大学)

阪田 真己子 [身体メディア論] (同志社大学)

榎本 美香 [言語心理学] (東京工科大学)

灘本 明代 [知能情報学] (甲南大学)

近年、人工知能（AI）研究の進展とともに「AI によって奪われる仕事」についての議論が盛んとなっている。Frey & Osborne (2013) に端を発するこの議論は、コンピュータとロボットが将来的にどのような種類の人間の仕事を代替することが可能かという問題意識を通じて、そもそも人間の多様な営みの科学的本質を明らかにする途を開きつつある。特に、様々な人間活動のビッグデータをもとにコンピュータが人間の計算論的な認知能力を凌駕しつつある（ないしは囲碁やチェスのように既に凌駕している）現在、身体を持った主体同士のインタラクションにどこまでロボットが接近可能かを考察することは、認知科学および認知心理学にとっての身体性の意義を改めて再考するうえで有意義な機会となるであろう。

そこで、この度の日本認知科学会と日本認知心理学会の共同開催における招待講演企画として、一流のプロ漫才師を招聘し、実際に会場で実演してもらうとともに、同一のネタを事前に実装した 2 体のロボット同士の漫才実演と対比させる。そして漫才のネタが演者間のインタラクションにおいてどのように実現されているかを、2 名のパネリストによる言語的分析と身体メディア分析の両面から掘り下げ、最後にフロアを巻き込んだパネルディスカッションの形で、新たな身体性認知研究の展望を構想したいと考える。

日本認知科学会第 35 回大会・日本認知心理学会第 16 回大会 共同企画

パネルディスカッション
「認知研究のこれから：心理学への批判と期待」

日時：2018 年 9 月 1 日（土） 16 時 30 分～17 時 50 分

場所：B 棟（立命館いばらきフューチャープラザ）2F グランドホール

企画：

服部 雅史（立命館大学）・川合 伸幸（名古屋大学）

パネリスト（順不同）：

戸田山 和久 [哲学] （名古屋大学）

入來 篤史 [脳科学] （理化学研究所）

松原 仁 [人工知能] （はこだて未来大学）

竹村 和久 [心理学] （早稲田大学）

モデレータ：

川合 伸幸（名古屋大学）

認知科学誕生の瞬間とされる MIT でのシンポジウムから 60 余年、ナイサーの『認知心理学』が出版されてから 50 余年が経過し、認知科学と認知心理学は、当初の野心的な試行錯誤の集まりから、成熟して安定感のある学問領域に移行した。しかし、成熟とともに、研究アプローチ上のさまざまな論点や問題も明らかになってきており、一種の閉塞状況の予感もないとは言えない。そこで、この度の日本認知科学会と日本認知心理学会の共同開催を機に、認知研究のさまざまな問題について考えたい。特に、認知科学の中でとりわけ重要な位置を占めてきた心理学に焦点を当て、バックグラウンドを異にするベテラン研究者に議論をリードして頂いて、認知研究の原点に立ち返りながら、今後の研究の方向性について私たち一人一人が考えを深める機会としたい。

Psychonomic Society 企画（共催：日本認知心理学会）

Psychonomic Society Collaborative Symposium
**Advances in Information Aggregation
and Collective Intelligence**
(情報集約・集合知研究の展開)

Date: 14:10–17:10, Sun, September 2

Venue: Room AC230, Building A

Organizers: David Budescu & Mark Steyvers

Speakers:

David Budescu (Fordham University)
Tatsuya Kameda (University of Tokyo)
Henrik Olsson (Santa Fe Institute)
Stefan Herzog (Max Planck Institute, Berlin)
Mirta Galesic (Santa Fe Institute)
Mark Steyvers (University of California at Irvine)

Abstract:

The last decade has seen a proliferation of theoretical and empirical work in various areas psychology on “Wisdom of Crowds” and “Collective Intelligence”. Much of this first wave work consists of simple and straightforward illustrations that simple aggregation rules that invoke the “Wisdom of Crowds” and effective teaming efforts can improve various measures that reflect the quality of the collective decisions. The proposed symposium includes a collection of papers that represent more sophisticated efforts to understand and model the cognitive, structural and social factors that drive the aggregation and teaming effects. The six papers cover a wide range of application domains including medicine and intelligence, as well as a wide variety of methodological approaches including laboratory experiments large-scale field studies and simulations. Together they represent the state of the art in this exciting multi-disciplinary research area.

懇親会 (Social)

日時: 2018年9月1日(土) 18時00分~19時30分(開場:17時50分頃)

場所: C棟1F OIC カフェテリア

Date: 18:00-19:30, Sat, September 1

Venue: OIC Cafeteria, Building C 1F

懇親会は参加無料です。どうぞお気軽にご参加ください。飲み物や軽食を片手にご歓談ください。

(The social is free of charge. Feel free to join us. Have a talk with drinks and snacks.)

日本認知科学会第35回大会

2018年8月30日（木）・31日（金）・9月1日（土）

立命館大学 大阪いばらきキャンパス

目次

会場案内	18
参加者へのご案内	19
発表者へのご案内	20
8月30日	
オーガナイズドセッション (OS01-04)	21
ポスターセッション (sP1)	26
招待講演：J. R. Anderson	44
会長講演：三輪和久	44
特別講演：安西祐一郎	44
オーガナイズドセッション (OS05-08)	45
8月31日	
口頭発表1：インタラクション (sO1)	50
シンポジウム1：「身体性・社会性認知神経科学の展望」	51
総会（野島久雄賞報告セッション）	51
フェロー講演	52
招待講演：L. Reder	53
オーガナイズドセッション (OS09-12)	53
9月1日	
口頭発表2：問題解決 (sO2)	60
口頭発表3：記憶・言語・動物 (sO3)	61
ポスターセッション2 (sP2)	62
シンポジウム2：「ロボットはプロの漫才師の仕事を奪えるのか」	70
パネルディスカッション：「認知研究のこれから：心理学への批判と期待」	71
査読者一覧	72
発表者・企画関係者索引	73

JCSS 2018

会場案内

	会場	8月30日(木)	8月31日(金)	9月1日(土)
大会受付	B棟2階ホワイエ	8:10-18:40	8:10-18:30	8:10-17:50
大会本部	B棟4階研究会室2	8:10-18:40	8:10-18:30	8:10-17:50
クローク	C棟2階 C273	8:10-18:55	8:10-18:45	8:10-19:45
交流スペース	C棟2階 C271・C272			
招待講演 John Anderson		14:00-14:50		
会長講演		15:00-15:30		
特別講演		15:30-16:00		
口頭発表1			8:40-10:10	
シンポジウム 認知神経科学	B棟2階グランドホール		10:20-11:50	
総会			12:50-13:50	
野島賞 報告セッション			13:30-13:50	
フェロー講演			13:50-14:50	
招待講演 Lynn Reder			15:00-15:50	
シンポジウム 漫才				14:40-16:10
パネルディスカッション				16:30-17:50
口頭発表2				8:40-10:10
口頭発表3		A棟2階 AC230		10:20-11:50
ポスターセッション1		B棟1階イベントホール、 B棟2階 B275+B276	11:20-13:50	
ポスターセッション2	B棟1階イベントホール			12:00-14:30
OS01 サマースクール	A棟2階 AC231	8:40-11:10		
OS02 認知コントロール	A棟2階 AC232	8:40-11:10		
OS03 「生きる」	A棟2階 AS251	8:40-11:10		
OS04 認知ミラーリング	A棟2階 AS252	8:40-11:10		
OS05 Nudge	A棟2階 AC231	16:10-18:40		
OS06 ホモ・クオリタス	A棟2階 AC232	16:10-18:40		
OS07 知覚と相互行為	A棟2階 AS251	16:10-18:40		
OS08 協調学習	A棟2階 AS252	16:10-18:40		
OS09 食感オノマトペ	A棟2階 AC231		16:00-18:30	
OS10 記号接地問題	A棟2階 AC232		16:00-18:30	
OS11 プロジェクション	A棟2階 AS251		16:00-18:30	
OS12 エージェント科学	A棟2階 AS252		16:00-18:30	
編集委員会	B棟4階研究会室1	12:05-13:05		
運営委員会	C棟4階 C471		11:50-12:50	
企業展示	C棟2階 C271・C272		12:30-13:30	
懇親会	C棟1階 OIC Cafeteria			18:00-19:30

参加者へのご案内

(1) 大会参加受付・クローク・研究交流スペース（兼企業展示）

10 ページをご参照ください。

(2) 総会

日本認知科学会の会員総会を 8 月 31 日(金) 12:50 より、B 棟 2 階グランドホールにて開催いたします。
会員の方はご参加ください。

(3) 委員会

編集委員会は、8 月 30 日(木) 12:05 より B 棟 4 階 研究会室 1 にて、
運営委員会は、8 月 31 日(金) 11:50 より C 棟 4 階 C471 にて開催されます。

(4) 懇親会

9 月 1 日(土) 18:00 ごろから C 棟 1 階 OIC Cafeteria にて、軽食と飲み物をご用意いたします（開場は 17:50 ごろ）。大会参加者は無料です。どうぞお気軽にご参加下さい。

(5) 大会発表賞推薦のお願い

日本認知科学会の会員は大会発表賞の推薦ができます。受付にある用紙で投票をお願いします。

(6) その他

- ・無線 LAN：10 ページをご参照ください。
- ・昼食：10 ページをご参照ください。

発表者へのご案内

(1) 口頭発表

- ・ 発表 13 分，質疑応答 5 分です。
- ・ HDMI 出力端子のある PC を各自でご用意ください。変換アダプター等は各自でご用意ください。
- ・ 音声出力をご希望の場合は，大会開始 1 週間前までに実行委員会にご相談ください。
- ・ 発表者は，セッション開始の 5 分前までに，PC の接続確認と座長による出席確認をすませてください。

(2) ポスター発表

- ・ ポスターボードのサイズは，幅 900 mm，高さ 1760 mm です。
- ・ ポスター会場での受付は不要です。掲示に必要なピン等は，ポスターボードに備え付けてあります。
- ・ ポスターは，セッション開始 1 時間前（8 月 30 日は 10:20，9 月 1 日は 11:00）から掲示できます。当日のセッション開始時刻までに掲示してください。
- ・ 在席責任時間は，以下の通りです。
 - ・ ポスター-1 (8/30)： 奇数番号 11:20～12:05 偶数番号 13:05～13:50
 - ・ ポスター-2 (9/1)： 奇数番号 12:00～12:45 偶数番号 13:45～14:30
- ・ セッションの開始から終了までポスターを掲示し，在籍責任時間中，ポスターの前で発表することによって，正式発表として認められます。
- ・ セッション終了後 90 分以内に，各自で責任を持ってポスターを撤収し，お持ち帰りください。

(3) オーガナイズドセッション

- ・ 必要に応じて，HDMI 出力端子のある PC をご用意ください。変換アダプター等は各自でご用意ください。
- ・ 音声出力をご希望の場合は，大会開始 1 週間前までに実行委員会にご相談ください。
- ・ 特別な機器や設備が必要な場合は，各自でご用意ください。
- ・ 発表者は，セッション開始の 5 分前までに，オーガナイザーによる出席確認をすませてください。

プログラム・抄録

オーガナイズドセッション 1 (OS01)

サマースクール連携企画：良い理論を見極め、適切な仮説を生成すること

8月30日(木) 8:40-11:10 会場：A棟 2F AC231

オーガナイザー：岡田浩之(玉川大学)，鈴木宏昭(青山学院大学)，川合伸幸(名古屋大学)

OS01-1 グループワークの発表

本OSに先立ち、合宿形式のサマースクールでグループワークを行っている。それぞれのグループにシニア研究者がチューターとしてつき、「良い理論を見極め、適切な仮説を生成すること」に関して議論した成果をワークショップにおいて、グループごとに発表する。

OS01-2 理論，説明，仮説とは

川合伸幸(名古屋大学情報学研究科)，鈴木宏昭(青山学院大学教育人間科学部)，岡田浩之(玉川大学)

ワークショップでの発表を受け、メンターとしてサマースクールに参加した研究者が「良い理論を見極め、適切な仮説を生成すること」についてディスカッションする。

OS01-3 認知研究における理論・仮説・データとは～時代を画す認知科学方法論を創り出そう～

安西祐一郎(日本学術振興会)

認知に関わる幾多の研究の中で、「時代を画した研究」はどんな特徴を持っているのだろうか？それ以前に、認知研究におけるデータ、仮説、理論とは何だろうか？また、心理学や医学を源とするさまざまな実験方法論は常に妥当なのだろうか？特に、多くの研究者が関心を持っている(ように見える)「心のプロセス」に関わる研究について、データ、仮説、理論とはいったい何を指しているのだろうか？

オーガナイズドセッション 2 (OS02)

認知コントロールの促進的側面と阻害的側面

8月30日(木) 8:40-11:10 会場：A棟 2F AC232

オーガナイザー：西田勇樹(立命館大学/日本学術振興会)，織田涼(東亜大学)

OS02-1 注意の制御とワーキングメモリ：注意の誘導と抑制の側面からの検討

川島朋也(神戸大学)

視覚的な注意はワーキングメモリに保持した情報によって誘導される。近年、このような注意誘導が認知コントロールによって促進・抑制されることが報告されている。本発表では、理論的背景を概説し、近年の実証研究を概観するこ

とで、注意の誘導と抑制における認知コントロールのはたらきを議論する。ここでの議論を通して、記憶と注意の処理機構における認知コントロールについての検討を試みる。

OS02-2 **うまくいっているときにタイプ2は働くのか – 正のフィードバック下でのタイプ2の起動と潜在的モニター–過程の関係–**

二宮由樹(名古屋大学), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科), 寺井仁(近畿大学産業理工学部)

We need to control automatic cognitive processes like intuition when required normative judgment and behavior. In previous studies, conscious control over automatic judgment is said to occur by monitoring that automatic judgment fails. However, in these explanations, although we can explain the mechanism of control when the intuition is wrong, we cannot explain the mechanism of control when intuition is correct. Therefore, in this research, we conduct experiments on how type 2 processes are activated when intuition judgment is correct .

OS02-3 **グラスの中身は半分 "空"か"一杯"か？ フレーム選択における参照点の影響と顕在的選択理由の分析**

本田秀仁(安田女子大学心理学部ビジネス心理学科), 白砂大(東京大学総合文化研究科), 松香敏彦(千葉大学文学部), 植田一博(東京大学総合文化研究科)

本研究では、論理的に同一だが異なる2つのフレーム (e.g., グラスの中の水は「半分一杯」、または「半分空」) から1つのフレームを選択する際に参照点を与える影響について3つの行動実験から検証を行った。結果として、参照点は頑健にフレーム選択に影響を与える一方で、その影響を実験参加者が気がつかないケースが存在していた。以上から、話者は顕在的に気がつかない要因の影響を受けてフレーム選択を行なっている可能性が示された。

OS02-4 **洞察問題における課題と認知的負荷の相互作用**

小田切史士(青山学院大学社会情報学研究科), 山田優志(青山学院大学教育人間科学部), 鈴木宏昭(青山学院大学教育人間科学部)

洞察問題と Working Memory の関係を検討した事例には一貫した結果が見られないことを踏まえ、使用する洞察課題と WM にかかる負荷の性質をそれぞれ、言語的なものと視空間的なものの二種類を用意し、両者の相互作用による影響を検討した。結果は課題と負荷が WM の同じ構成要素の容量を用いる場合では解決が最も悪く、異なる容量を用いる時には解決が最も良くなり、両者の組み合わせで結果に違いが生じてくることが示唆された。

OS02-5 **問題解決のパラドックス：プライミングの妨害性とノイズの有益性**

服部雅史(立命館大学総合心理学部), 織田涼(東亜大学人間科学部), 西田勇樹(立命館大学文学研究科/日本学術振興会)

問題解決における無意識的過程に焦点を当て、潜在ヒントが問題解決を（促進ではなく）妨害するという現象について仮説を立て、4つの実験を通して、洞察問題解決の2つのパラドックスについて考察した。その結果、知識を持っていても問題解決に使用できないこと（第1のパラドックス）には、認知コントロールによる抑制が関係し、無意図的・自動的に解決に至ること（第2のパラドックス）には、認知コントロールの低下による脱抑制が関係していることが示唆された。

オーガナイズドセッション 3 (OS03)

「生きる」と向きあう科学：方法論からの解放

8月30日(木) 8:40-11:10 会場：A棟 2F AS251

オーガナイザー：伝康晴(千葉大学)，諏訪正樹(慶應義塾大学)

OS03-1 「生きる」ことに向き合う研究方法論の模索

諏訪正樹(慶應義塾大学環境情報学部)

「生きる」ことにしかと向き合うための研究方法論が、認知科学では今求められていると感じる。従来の科学的方法論は、主観や個人固有性を十全に扱えない。本論文では、まず認知科学の歴史を振り返ることから、新たなパラダイムを得るために今何が致命的に欠けているのかを露わにする。そして、一人称研究という新しい方法論を紹介する。それは、対象世界と二人称的な関わりを結ぶことを通じて、人が「生きる」ことに向き合う方法であることを説く。

OS03-2 物的世界との相生に至る身体運動知覚の掛け替えに関する一考察

榎本美香(東京工科大学)

本研究の目的は、自身の身を世界に晒すことにより、世界との調和に至る身体の認知モデルを構築することである。我々は初めて行う方法で世界に向き合わねばならぬ時、生まれたての子鹿のように覚束ないが、次第に大地に対する力のかけ方とバランスを見出していく。本研究では、著者自身が水泳とサーフィンを学習する場面を一人称視点で分析し、世界の物理的法則の中へ自身の身体を滑り込ませるに至る知覚形成過程をモデル化する。

OS03-3 購買活動における「価値」概念の記述のされ方 – 会話分析と行動経済学による一考察 –

黒嶋智美(玉川大学)，萱場豊(東京大学)，小俣貴宣(ソニー株式会社 R&D プラットフォーム)

本研究では、会話分析と行動経済学という全く異なる既存の方法論と理論的枠組を用いて、同一の社会的相互行為における現象を検討することで、一見して、購買活動や展示販売活動といった経済的活動の具体的な場面と記述されうるやりとりが、どのような社会的行為によって組織されているのかを明らかにすることを試みる。その際に、行動経済学からの理論的枠組を記述された現象の裏付けとして援用する。

OS03-4 「意識の働き」を組み込んだ感覚運動制御の計算モデル

阪口豊(電気通信大学)

本稿では、身体技能の遂行・習得メカニズムを明らかにする方法論として、随意運動制御の計算モデルに意識の働きを組み込むことについて議論する。ヒトの運動制御の本質的な難しさが身体の多自由度性にあることを指摘するとともに、意識に上る認知の働きと無意識の下で働く運動計画・運動制御の働きがこの問題を解決するうえでどのように機能するかを考察したうえで、意識の働きを計算モデルに組み込むうえでの課題について論じる。

OS03-5 ヴァナキュラーな文化に埋め込まれた知恵と近代科学技術の相克

藤井晴行(東京工業大学環境・社会理工学院)，篠崎健一(日本大学 生産工学部)

風土や文化に根ざす生きるための知と科学技術が相克しつつも共存する背景にあるものごとを、空間図式に注目し、地域にある臨床の知の共創と継承のための4つ課題を通して浮き彫りにした。1) 普遍性に駆逐された固有性に再び

意味を持たせ、2)固有の文化と普遍的な要求を共存させる術を探し、3)普遍的な技術を加えて固有の知を更新し、4)固有の知と普遍的な知の折り合い方を探ることである。これらはいくつかの研究方法を並行して繰り返して気づいた仮定である。

OS03-6 私の行動に出会うために：二人称的現実と意のままにならない物質から始まる認知科学

高梨克也(京都大学情報学研究科)

行為主体の行為にとって不確実性は不可避の事実である。この不確実性は少なくとも二つの面での外部性によるものである。一方で、行為主体の意味が他者による理解と応答という二人称的な視点を經由することによって構築される。他方で、行動は全面的に予測可能ではない物質的環境の中で行われる。本稿では、行為主体がこれらの外部性を通じて「自分自身の行為に出会う」という経験を出発点とした認知科学の可能性を模索することを目的とする。

オーガナイズドセッション 4 (OS04)

認知ミラーリングと社会的認知：気づかれにくい障害の理解と支援

8月30日(木) 8:40-11:10 会場：A棟 2F AS252

オーガナイザー：伴睦久(東京大学)，熊谷晋一郎(東京大学)

OS04-1 認知ミラーリング：その背景にある障害の捉え方・設計原理・効果

長井志江(情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター)

本稿では、新たな発達障害者支援技術として「認知ミラーリング」を紹介する。計算論的手法を用いて、発達障害者の認知機能を鏡のように映し出し観測可能にすることで、感覚・運動レベルの非定型性が社会性の問題に与える影響を解明し、障害の自己理解や周囲による困難さの共有を促進することができる。本稿では、認知ミラーリングの設計原理とそれによる効果、そして本課題に取り組む学際融合プロジェクトを紹介する。

OS04-2 感覚過敏の神経生理過程が明かす自閉スペクトラム症者の感覚経験

井手正和(国立障害者リハビリテーションセンター 研究所)

自閉スペクトラム症(ASD)者の多くは、外界の多種多様な刺激に過剰に反応する感覚過敏をもつ。著者らは、ASD者が高い課題成績を示す感覚情報処理に着目し、感覚過敏の神経生理機序を検討してきた。他者からの共感が得にくい感覚の特性について、定量的データを用いて説明することで、理解が深まる様を目の当たりにしてきた。本稿では、当事者との対話から明らかになってきた、感覚特性と共存するその内的世界を論じる。

OS04-3 自己を語る言葉とリカバリー：当事者研究の視点から

綾屋紗月(東京大学先端科学技術研究センター)

当事者視点で回復を再定義する「リカバリーアプローチ」と社会の偏見や差別に介入する「アンチスティグマアプローチ」は、1990年代以降の精神保健改革を特徴付ける概念だが、日本の当事者研究も同じ文脈で注目されている。本

講演では既存の自閉スペクトラム症概念がいかにセルフスティグマを助長しうるか、そして固有の身体性とエピソードの共同解釈がいかに当事者の生きやすさに繋がるか、当事者研究の観点から考えていく。

OS04-4 新規なコミュニケーションシステムの形成に及ぼす自閉傾向の影響

小嶋暁(静岡大学総合科学技術研究科), 紅林優友(静岡大学情報学部), 森田純哉(静岡大学情報学部)

本研究は、コミュニケーションがどのような要因によって成立するかを分析した。特に、コミュニケーションに影響する個人特性として、自閉症スペクトラムに焦点を当てる。単純な人工言語を生成するコミュニケーションゲームを実験環境とし、自閉症スペクトラム指数 (AQ : Autism Spectrum Quotient) とゲームから得られたデータとの対応づけを行う。結果として、自閉症スペクトラム傾向は、コミュニケーションゲームにおいて、有効に働いた。

OS04-5 心身マルチタスクトレーニングが高齢者の認知能力に与える影響の検証

渥美裕貴(名古屋大学情報学研究科), 横矢真悠(パナソニック株式会社), 山田和範(パナソニック株式会社), 岡田直人(名古屋大学情報学研究科), 汪雪婷(名古屋大学 情報学研究科), 森田純哉(静岡大学情報学部), 上出寛子(名古屋大学未来社会創造機構), 榎堀優(名古屋大学情報学研究科), 間瀬健二(名古屋大学情報学研究科)

当研究では、認知機能と身体機能、とりわけ歩行に関わる課題を同時に課す心身マルチタスクトレーニングが高齢者の認知機能に与える影響を検証した。歩行支援ロボットを用いた歩行と信号検出課題を用いた心身マルチタスク介入実験を行い、介入課題である信号検出課題と類似した認知能力課題 (TOVA 課題) について、対照群である ST 群に比して MT 群で向上効果が高いことを検証し、心身マルチタスクが認知能力の向上に有効である可能性を示した。

ポスターセッション 1 (sP1)

8月30日(木) 11:20-13:50

会場：B棟 2F イベントホール (1-60) / B棟 2F B275+B276 (61-87)

sP1-1 会話の中にある埋もれた文脈の発見 -文脈の発見プロセスの提案-

大塚建太(芝浦工業大学), 中村潤(芝浦工業大学)

本論文では、会話の中にある埋もれた文脈を発見するため、Keygraphを用いた会話分析をしている。しかし、埋もれた文脈を発見するプロセスは暗黙知化されており、明文化されていない。そのため、暗黙知化された埋もれた文脈を発見するプロセスを明文化することを目指すため、いくつかの埋もれた文脈を発見した。その過程で明文化された発見プロセスを述べる。

sP1-2 合唱練習における指揮者と演奏者間の意図の共有と演奏熟達プロセス

山本真秀(神戸大学), 野中哲士(神戸大学人間発達環境学研究所)

Generally, when conductors tell chorus how to sing well, they frequently use gestures and metaphor. In order to clarify the system how conductors and the member of the chorus communicate together in practices, I analyzed the way a conductor used to communicate with chorus, and chorus's interpretations about a conductor's advices. As a result, I found that a conductor used three ways, words, examples by songs, and gestures, in telling chorus how to sing. Moreover, I found not always all chorus receive same meaning from conductor's advices.

sP1-3 認知科学と認知心理学の関係性を考えさせる教育実践

田中孝治(北陸先端科学技術大学院大学知識科学系), 日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

学際的態度や能力の育成には、異なる学問領域の関係性を考える経験が必要であり、学際的研究分野の学問の教育がその一役を担うと考えている。本研究では、認知科学と認知心理学の関係性を考える授業科目を設計・開発する。本稿では、講義初日と最終日における、両学問の理解と両学問の関係性に対する考えに関する記述を分析し、その結果を基に学習者の認知科学と認知心理学の関係性に対する理解状態の一端を示す。

sP1-4 学際分野への理解度の測定法に向けて：認知科学・認知心理学講義における取り組み

日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学), 田中孝治(北陸先端科学技術大学院大学知識科学系)

認知科学や認知心理学のように学際的分野の講義では、特定領域の概念の習得のみならず、それらが包含する複数の分野間の関係を理解する事が求められる。本研究では、複数分野の関係性理解を定量化する試みとして、「認知科学概論」講義前後に受講者の回答した分野の心理的距離に着目し、多次元尺度構成法による学問分野の空間配置の変化を分析した。その結果、認知科学、認知心理学に関連する他分野の心理的距離に変化があり、それらの変化と最終評価の相関も見られた。

sP1-5 漢字表記語処理において周辺情報は常に活性化されるのか (1)

水野りか(中部大学), 松井孝雄(中部大学)

刺激語が人間か否かを判断させる意味分類課題で人間語でのみ同音異義語効果が生じないという知見 (松井・水野, 2017) を受け, 刺激語に判断に必要な十分な情報が含まれている場合は仲間の情報のような周辺情報が活性化されないと考えた。そこで新たに両刺激語の第 1 文字の形態的隣接語数の多寡の意味分類時間への影響を調べ, 人間語でのみ形態的隣接語数効果が生じないことを確認し, 上の考え方の支持的証拠を得た。

sP1-6 認知言語学の批判的検討：生態学的言語観への転換

井上拓也(京都大学人間環境学研究科)

認知言語学では近年, 第三期の認知科学として人間・環境の相互行為の中で意味を捉えるべきであるという主張がなされている [17]。本稿では, 言語が情報を伝達するという伝達モデルや, 意味の表象主義的モデルを前提とする従来の言語観を棄却し, 生態学的実在としてのアフォーダンス理論の意味観を導入することの必要性を論じる。さらに, Norman のデザインやシグニファイア概念の観点から, 言語がシグニファイアとして機能していることを指摘する。

sP1-7 介護福祉士養成教育における医療的ケア演習「口腔内吸引」の修得過程

武田啓子(日本福祉大学)

This study aimed to examine the learning process of the medical care skill of “oral suctioning.” The acquisition of the medical care skill was examined through five rounds of evaluation exercises. Results showed that students conducted self-evaluation and applied their pre-existing knowledge to practical situations when learning basic medical skills. Additionally, they become less anxious over the five rounds of evaluation. These results suggest that students’ learning process for medical skills is the same as that for care skills in exercises.

sP1-8 言語意味処理に関する脳 fMRI データの単変量サーチライト解析

大山将来(東京工業大学生命理工学院生命理工学系ライフエンジニアリングコース修士課程), 辻田 亜門(東京工業大学生命理工学院生命理工学系), 粟津俊二(実践女子大学人間社会学部), 赤間啓之(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)

embodiment 理論によれば, 脳の運動野は言語の意味理解に本質的に関与する。これを踏まえ, 本研究では人間の動作、特に手の動作を表す文を読む時と、運動を含まない心的な文を読む時の脳の賦活を比較し、運動野と言語野との協調性について考察する。変量効果分析を行ったところ、左角回と左中側頭回の周辺に有意な差が確認できた。この結果は embodiment 理論に対立する amodal 理論を支持している。

sP1-9 マインドフルネス瞑想が展望記憶に与える影響について

于成(大阪府立大学), 牧岡省吾(大阪府立大学)

本研究では, マインドフルネス瞑想が展望記憶と実行機能にどのような効果を与えるのかについて検討した。展望記憶については, 背景課題遂行時の展望記憶の成績を, 実行機能は, シフト, 更新, 抑制に関する課題の成績を測定した。四日間の瞑想を実験参加者に課し, 瞑想前後で成績に向上が見られるかどうかを調べた。検討したところ, いずれにつ

いても有意な成績の向上はみられなかった。瞑想の実施が不十分であった可能性があるため、手続きを改善して再検討する必要がある

sP1-10 フレーム意味論にもとづく名詞の分析: Killing フレームを例に

神原一帆(京都大学)

本研究はフレーム意味論を用いた名詞分析の枠組みを提案することを目的とする。本稿では Killing フレームにおける動物名詞の分析を通して、従来動詞の意味が重視されてきたフレーム意味論が名詞の意味も扱える可能性を持つことを示す。分析の結果から、(i)フレーム要素の実現傾向が動詞の意味だけに還元できないこと、(ii)名詞の多様な意味は喚起されるフレームによって同定される、という2点を主張する。

sP1-11 言語解析を応用した映画におけるショット時間長の文脈構造解析

大河原一輝(産業技術総合研究所人間情報研究部門/筑波大学), 大山潤爾(産業技術総合研究所人間情報研究部門)

ヒトは時間変化する情報を、物理的な時間とは異なる単位で知覚している。映画におけるショット長の遷移パターンをヒトの時間知覚の観点から見ることにより、視聴者の映画の印象や評価に影響する文脈構造を分析できる可能性がある。本研究では時間知覚特性に基づいてショット長を符号化し、その遷移パターンの傾向を分析した。その結果、遷移パターンと映画評価値の間には相関があり、ショット長の遷移パターンが映像の印象を構成する要因の一つである可能性が示唆された。

sP1-12 (欠番)

sP1-13 Working memory training does not enhance older adults' cognitive function

Sala Giovanni(Osaka University Graduate School of Human Sciences), Yasuyuki Gondo(Osaka University Graduate School of Human Sciences)

To date, the attempt to boost cognitive skills in the general population has failed. However, it is still possible that some cognitive training regimens exert a positive influence on specific populations, such as older adults. In this meta-analysis, we investigated the effects of working memory training on older adults' cognitive skills. Three meta-analyses were run. While large effects were found for the trained tasks, only moderate and near-zero effects were obtained in the near-transfer and far-transfer meta-analyses, respectively. While confirming the difficulty in obtaining transfer effects with cognitive training, these results cast serious doubts about the practical utility of near-transfer effects for older adults' everyday life too.

sP1-14 世界の表象としてのストーリーの主観的構成—計算論的な観点からの考察

秋元泰介(九州工業大学情報工学研究院知能情報工学研究系)

自律的な人工知能を実現するためには、外界と関わり合う中で、世界を物語的に組織化し、それに基づいて他者とコミュニケーションをしたり、筋道のある行動をしたりする仕組みが必要になると考えられる。このような考えに基づく認

知アーキテクチャに関する検討の一環として、エージェントが内面に作る世界の表象としてのストーリーが、どのような構造を持つと考えたらよいかという問題について考察する。

sP1-15 縦格子を通してドット平面を両眼視したときに発生する立体錯視現象の研究

大塩智規(福島工業高等専門学校専攻科産業技術システム工学専攻), 大槻正伸(福島工業高等専門学校 電気電子システム工学科), 小泉康一(福島工業高等専門学校 電気電子システム工学科)

縦格子 (Gr) とドット平面 (PL) による立体錯視現象において, Gr-PL 間距離 (h) によって, 帯状立体の知覚の程度に違いが生じる。本研究では, h と帯状立体知覚の強さとの関係を従来より精密に測定した。また計算モデルによるシミュレーション結果と実験で得た測定結果との比較をした。従来から実験とシミュレーション結果には誤差があることが知られていたが, 今回は 一人の被験者について, この誤差を小さくする補正関数を見つけることができた。

sP1-16 危険予知トレーニング状況下における脳賦活部位の検討 (訓練経験の有無による比較)

米持圭太(群馬県立県民健康科学大学診療放射線学部), 松井志保人(公立藤岡総合病院), 柏倉健一(群馬県立県民健康科学大学診療放射線学部)

本研究は, 危険予知トレーニング (K=危険, Y=予知, T=トレーニング: KYT) のプロセスを明らかにすることを目的とした。実験は, fMRI 法を使用し, 被験者は事前訓練 (KYT) の有無により 2 群に分けた。両群について, 1) KYT と対照画像との比較, 2) 危険予知と解決策の比較の 2 つの方法で分析した。この結果, 両者では異なるプロセスを行っていること, 事前訓練の有無が KYT プロセスに影響を及ぼす可能性があることが推測された。

sP1-17 ひとめぼれ傾向と広告コピーが婚活サービスに対する好感度に及ぼす影響

長岡千賀(追手門学院大学)

本研究の目的は, 婚活サイトの広告コピーの特徴, ならびに個人の特性が, 婚活サービスに対する好感度に及ぼす影響について検討することであった。まず予備調査では, 既存の 39 件の婚活サイトのコピーを分析した。この結果に基づいて 4 つの典型的なコピーを作成した。138 名の実験参加者は各コピーに対する好感度を評価するとともに, 各人のひとめぼれ傾向も測定された。結果から, 行動促進型や内面重視型のコピーは好感をもたれやすいことが示された。

sP1-18 手書き文字のどこにパーソナリティの違いを感じるのか

井関龍太(大正大学)

人は手書き文字に基づいてパーソナリティの印象を評価できる。この評価は実際のパーソナリティとは必ずしも一致しないが, 多くの人々が共通して一貫した印象を抱くとすれば, その根拠となる文字の特徴があるはずである。本研究では, 手書き文字に基づくパーソナリティ評定と画像化した文字の分析に基づいて, パーソナリティを推測させる文字の具体的な特徴を探索的に検討した。ビッグファイブのうち, 外向性と調和性の印象に影響すると思われるいくつかの特徴が示唆された。

sP1-19 fMRI を用いた日本語母語話者による英文の意味処理における脳の機能的結合性解析

辻田亜門(東京工業大学生命理工学院生命理工学系), 大山将来(東京工業大学生命理工学院生命理工学系ライフエンジニアリングコース修士課程), 粟津俊二(実践女子大学人間社会学部), 赤間啓之(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)

本研究では、機能的連結性を用い、日本人が母語の文を理解するのと比較し、同じ意味の英文を理解する際に特徴的な脳反応を、言語処理ネットワークに着目し抽出した。また、TOEIC の点数に基づく英語能力の差による脳反応の違いを調べた。結果として、DMN と顕著性ネットワークが英語の意味処理に関係することが示唆され、両側に跨る第二言語特有のネットワークが存在することも導かれた。

SP1-20 観察段階の因果帰納を記述するモデルの決定へ向けて

宝田悠(東京電機大学理工学部), 高橋達二(東京電機大学理工学部)

人間は少数データから 2 事象間の因果関係を帰納的に判断する能力を有しており、その解明は人の因果判断を機械上に実現する上で重要な意味をもつ。

人間の認知傾向に由来し人間の判断と高い相関を持つモデルとして、DFH モデルと pARIs モデルが存在する。Yokokawa らは計算可能性などから pARIs がより有効だと考え実験を行ったが、両モデルに大きな差異はなかった。本研究では Yokokawa らの実験を改善し再実験を行い、観察を行う。

SP1-21 美術非専攻の大学生の自らの「ものの見方」への気づきと美術への親近感の向上を促す教育的介入

古藤陽(東京大学学際情報学府), 清水大地(東京大学教育学研究科), 岡田猛(東京大学教育学研究科情報学環)

本研究では、美術の非専門家に対して「日常生活における自己の視点についての発見」および「美術に対する親近感の向上」を促す教育手法を提案し、実験により効果検証を行った。提案手法として、found object と呼ばれる美術のジャンルの創作プロセスの体験を課題に組み込んだ。実験の結果、参加者に「日常生活における自己に視点についての気づき」が頻繁に引き起こされ、また「美術に対する難解・疎遠なイメージ」が部分的に軽減している傾向が示唆された。

SP1-22 ランダムに配置された粒子群画像の周期的提示による運動認知 III

大槻正伸(福島工業高等専門学校 電気電子システム工学科), 小泉康一(福島工業高等専門学校 電気電子システム工学科), 大塩智規(福島工業高等専門学校専攻科産業技術システム工学専攻)

粒子の流れの認識メカニズムを明らかにするため、我々は「毎回ランダムな点群が一定周期で表示されると一定方向に流れる粒子群と認知される」という錯視現象に着目している。今回は正方形枠内に、実際に速度 v で移動する点群 (A 群) とランダムに配置した点群 (B 群) をある割合 (α と $1 - \alpha$) で混在させ、一定周期で提示すると、ある条件で A 群と B 群の区別がつかなくなる。この条件を調べた結果 α が小さく、 v が大きくなるほど区別がつかなくなることが確認された。

SP1-23 研修・留学等がもたらす行動変容・認識変容に関する効果測定指標の認知科学的検討

森下美和(神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部), 有賀三夏(東北芸術工科大学基盤教育研究センター), 原田康也(早稲田大学法学学術院), 阪井和男(明治大学法学部), 富田英司(愛媛大学教育学部)

大学生活において、国内または海外での研修やインターンシップ、ボランティア活動、留学など、日常的・定常的な学校生活から離れた活動経験は、他者・コミュニケーション・世界に接する態度に変化をもたらす、外国語や専門分野に対する学習意欲を飛躍的に高め、世界観・世界認識の変容を通じて学習ならびに日常生活における行動変容をもたらす。本発表では、セメスター留学の事前・事後に実施した 2 種類の調査について報告する。

sP1-24 色の好みは自発的行動に対する運動主体感に影響するか？

村上久(東京大学), 井澤玲(神奈川大学), 西山雄大(長岡技術科学大学), 秋吉政徳(神奈川大学)

自身の運動の結果が肯定的であった場合、その運動主体感はより高まることが知られる。近年こうした主体感変調が低次の感覚処理からも生じることが報告されているが、その殆どは聴覚を感覚入力とする。我々は、色を用いた視覚刺激を感覚入力とし、自発的行動に対して異なる感情価を持つ色の提示が主体感に及ぼす影響を検証した。結果、先行研究とは異なり中間的な感情価を持つ色の提示が最も主体感を高めるといった傾向が得られ、これを視覚と聴覚の処理速度から考察した。

sP1-25 広告に関する Creative Genome を用いた CM コンセプト俳句の生成

伊藤拓哉(岩手県立大学), 佐々木淳(AOI TYO Holdings 株式会社), 小方孝(岩手県立大学)

俳句は断片的な要素の集合であり、読者は個々の要素を様々な情報と結びつけることにより解釈を生み出す。この解釈過程を参考に、筆者は俳句からの物語生成を考案している。本稿では、俳句の中の単語から単語ネットワークを構築し、このネットワークの語を用いて生成の核となる物語を生成する手順を示す。さらに CM に関する情報を体系的にまとめた Creative Genome の要素を用いることで、俳句の印象を反映した CM 生成への展開を目指す。

sP1-26 ベクトル空間モデルによる人の四項類推の最適近似

加藤龍彦(北陸先端科学技術大学院大学), 日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

四項類推を行う能力は人の推論の特質とされるが、近年自然言語処理分野では四項類推課題がモデルの意味の獲得精度の指標として用いられている。本研究では Skip-gram モデルに着目して分析、その四項類推が一部単語クラスについて最適化されていないことを示す。その上で既存の四項類推演算を拡張した演算を提案し、この演算によりモデルの類推能力を人により近似することが可能であることを示す。

sP1-27 自然の循環と融合の論理のモデルを考える

福永征夫(アブダクション研究会)

21世紀のわれわれは人間の過去の営みが招いた地球規模の難題群の発生に直面している。これらに主体的かつ能動的に対処するためには、環境の淘汰圧に対する自由度の高い、環境の変化に中立的な、経験と学習の認知、思考と行動、評価・感情を自己完結的に実現しなければならない。それは、「自然の循環と融合の論理」に適合するように、営みの全方位において、高深度・広域・高次の経験と学習の認知、思考と行動、評価・感情を自己完結的に実現することだろう。

sP1-28 顔と声を用いる感情知覚と音韻知覚のプロセスは共通か独立か

山本寿子(東京女子大学), 河原美彩子(東京女子大学), 田中章浩(東京女子大学)

感情知覚と音韻知覚はいずれも顔(視覚情報)と声(聴覚情報)の情報を統合することによって成り立つ。その双方において日本人は聴覚情報を重視することがこれまでに明らかにされている。そこでこれらの視聴覚統合プロセスが共通である可能性を検討するため、感情と音韻について(1)日本・オランダの成人を対象とした知覚実験(2)日本の5歳から12歳の子どもを対象とした知覚の発達パターンの比較(3)視聴覚統合プロセスの相互干渉の3つの側面から検討を行った。

SP1-29 意味の過剰な読み込みに関する実験的検討-アニメシーを例にして-

今泉拓(東京大学学際情報学府), 高橋康介(中京大学心理学部准教授), 植田一博(東京大学総合文化研究科)

生物でない物体にヒトらしさを感じることはアニメシー知覚として知られている。本研究では、形状の点でヒトに類似した対象よりもそうではない対象に対してアニメシーがより強く知覚される可能性について、ヒトのイラスト、しめじ、マッチ棒を比較し探索的に検討した。結果、形状ではヒトのイラストが1番ヒトらしいと評価されたものの、社会的な関係性を想起されるような動きが伴った際には、しめじにたいして1番強く感情が認知されることが示された。

SP1-30 名詞と動詞の組み合わせに基づく「語彙組み合わせ問題」の自動作問

張寓杰(ベネッセ教育総合研究所), 加藤健太郎(ベネッセ教育総合研究所), 寺井あすか(公立ほこだて未来大学システム情報科学部), 中川正宣(大妻女子大学人間生活文化研究所)

本研究では大規模言語コーパスから計算された単語間共起頻度のデータベースを用いて、名詞と動詞の「語彙組み合わせ問題」を難易度別に自動的に生成できるシステムを開発した。今回は、このシステムを用いて「名詞（主語）が動詞（述語）」と「名詞（目的語）を動詞」二種類の組み合わせに対して、同じ手順で自動的に問題を生成した。さらに、自動生成した問題を用いた実施テストの結果、想定された難易度がテスト参加者の正答率と十分一致していることが実証された。

SP1-31 空間的配置が美術作品の印象評価に及ぼす影響

三浦慎司(名古屋大学情報学研究科), 川合伸幸(名古屋大学情報学研究科)

本研究では、VRで作成した空間の中で、天井画と壁に飾られる絵画を天井あるいは壁に配置して絵画の鑑賞をさせた際に、どのように作品に対する主観的な評価が変わるのかについて探索的に検討した。その結果、作品ごとの分析をしたところ、一部では空間的配置と絵画の種類が一致する際に好ましさや感情価、美しさ、覚醒度、強さの評価が変化することが示された。考察として、通常とは異なる体位で鑑賞することを想定した、絵画を鑑賞する際の身体の役割について議論を行う。

SP1-32 会話における「そうしたら」と「そうすると」の使用傾向

川端良子(千葉大学/国立国語研究所)

「そうしたら」と「そうすると」の会話における使用傾向を『日本語日常会話コーパス』を用いて分析した結果、前件の事実関係によって形式の使用傾向に偏りがあることが明らかになった。

SP1-33 音響音声学を取り入れた、小学校外国語活動における音声教育の取り組み —Praat を活用した /æ/ 音の調音指導と評価について—

岡本真砂夫(姫路市立八幡小学校)

小学校英語音声指導において音声分析ソフトウェア Praat, 並びにフォルマント値を調音位置図にプロットする教材をエクセルで作成し、児童の調音音声を教師、児童自身が評価できるようにした。発音研究の対象音は /æ/ 音である。本研究を通じて、小学校高学年児童の音声分析に適切な LPC パラメータ値を明らかにすることができた。また児童が自らの英語母音の調音位置を意識することができ、英語の母音発音を変容させた児童が確認できた。

SP1-34 kinesthetic illusion の誘発において鏡面上の手のイメージが単独で果たす役割

石原由貴(名古屋市立大学芸術工学研究科), 小鷹研理(名古屋市立大学芸術工学研究科)

Mirror Visual Feedback において発生する手の位置・筋運動感覚の錯覚は Kinesthetic Mirror Illusion (KMI) と呼ばれている。本研究では手のイメージの想起性が KMI に与える影響を調査するため、手や持ち手の有無などの条件を用いて、KMI の比較実験を行なった。結果、手のイメージの想起性が高いほど KMI の誘起が起りやすいこと、手を明示せずとも、KMI を誘起することが可能であることが分かった。

sP1-35 調理行動におけるマイクロスリップ ～プランされない微小な動的行為と放置タスク～

沼口裕太(慶應義塾大学 SFC 研究所), 諏訪正樹(慶應義塾大学環境情報学部)

本研究では筆者が自宅での調理におけるマイクロスリップ(以下、MS)を分析した。調理行動は行為のまとまりが階層構造をなしており、行為の接続点における MS の出現割合の違いを階層ごとに分析した。また放置タスクの始点と終点に着目し、MS の出現のしやすさの違いを分析した。本研究の結果は、「MS があらかじめプランされている状況ではなく、臨機応変さが強く要請されるような状況で起りやすい」ということを示唆している。

sP1-36 地震避難における意思決定の同調行動による再現

鶴島彰(セコム株式会社)

東日本大震災の際、仙台のホテルの会議室で撮影された動画において、避難者による、逃走と退避という避難行動の選択が、出口からの距離によって分かれる現象が観察された。我々は、避難行動における同調行動を表現した避難意思決定モデルにより、この動画で見られたような現象の再現を試みた。シミュレーションにおいて、エージェントは逃走と退避をランダムに選択しているにも関わらず、動画のように、逃走と退避が出口からの距離で分かれる現象が創発した。

sP1-37 ものづくりにおいて製作環境が変遷するプロセス：事例による検討

小池星多(東京都市大学メディア情報学部), 篠川知夏((株) まちづくり立川), 青山征彦(成城大学社会イノベーション学部)

ロボット製作と革製品製作という、異なる2つのものづくりの事例を採り上げて、製作のプロセスのなかで、製作環境が変化する場面を検討した。その結果、現在の製作環境の限界に直面することで、それまでは注目されていなかった製作環境が見直された事例が観察された。製作環境の変化は、製作をめぐるネットワークを再編成することであり、こうした再編によって製作が継続されていることを示した。

sP1-38 イノベーションにおけるプロトタイピングの効果—対話とプロジェクション(投射)による考察—

廣田章光(近畿大学経営学部商学科)

近年、問題が明確でない状況におけるイノベーションの発生が示されている(石井 1993, 2009, 2014, Lester and Piore 2004。その分野の研究の一つである Von Hippel and Von Krogh(2016)において組合せの構造が示された。本研究はユーザー・イノベーションによる「ナルセペダル」の開発事例をもとに、プロトタイプ、「対話のトライアングル」、「人間中心のポジション」の関係を示す。

sP1-39 絵本に投影された自己像と共感性

光田基郎(大阪教育福祉専門学校)

光田(関西心'09-10, 東北心'11-15)に引き続き、電算に録音・録画して幼児教育志望の学生に読み聞かせた絵本の登場人物に投影された聞き手のシャイネス、自己開示と社会的スキル取得への意欲と登場人物に対する共

感的態度を指摘し、保育志望の大学生と上記の報告で述べた女子短大生、専門学校生との差を強調し、電算画面での絵本読み聞かせの理解と感じ方のモデル化・効率化の指針を模索した。

SP1-40 継続的な実践を支える文脈：趣味のアクセサリ制作を例に

青山征彦(成城大学社会イノベーション学部)

趣味でアクセサリを制作している女性へのインタビューをもとに、制作という実践が、どのようなリソースに支えられて可能になっているかを検討した。その結果、友人に頼まれたり、参加予定のイベントにあわせたアクセサリを制作したりするなど、趣味そのものではない、他の活動の文脈が、継続的な制作を支えていることが示唆された。

SP1-41 意味の社会性を意識した動詞の分類とその理論的含意

黒田航(杏林大学)

BCCWJ から動詞を抽出し、物理事象、心理事象、社会事象…のような 6 属性を付与した。物理事象は少数派で、社会事象が多数派である事がわかった。Formal Concept Analysis で相互行為性が動詞体系の基礎になっている可能性が示唆された。語彙意味論が社会的意味を認定どう記述に取り込むために、幾つかの提案をする。

SP1-42 母語と第 2 言語会話における発話ターンと相互注視の関係

馬田一郎(株式会社 KDDI 総合研究所), 伊集院幸輝(同志社大学), 加藤恒夫(同志社大学), 山本誠一(同志社大学)

次話者と現話者間の相互注視により会話の制御が行われているとの仮説の下に、現話者・次話者・残りの聞き手の注視行動を母語会話と第 2 言語会話において分析した。相関分析の結果、母語の自由対話と課題対話、および第 2 言語の課題対話においては、話者交代が起こる発話の前でのみ、現話者から次話者への注視と次話者から現話者への注視に相関がみられた。このことから、これらの会話においては、相互注視が発話順序の割り振りに重要な役割を果たしていることが示唆された。

SP1-43 自己生成した説明の受容の予測因子に関する実験的検討

下條朝也(名古屋大学), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科), 寺井仁(近畿大学産業理工学部)

科学哲学において、説明評価の基準が確率論的か価値論的かという論争がある。先行研究では、他者から与えられた説明を評価する際は、価値論的に判断していることが示唆されている。本研究では、自ら生成した説明を評価する際に、どちらの基準を用いて判断するのか、並びに洞察問題か否かによって用いる基準が変化するのかを検討した。その結果、自ら生成した説明に対しては、洞察問題か否かを問わず、確率論的基準を用いて評価していることが示された。

SP1-44 日本語全称量化詞の疑似量化解釈 – ガーデンパス現象による実証的検討

井上雅勝(武庫川女子大学), 藏藤健雄(立命館大学), 松井理直(大阪保健医療大学)

本研究では、「すべての2回生が新入生を世話した先生を呼び止めた」のような構造的曖昧文の名詞句の量化詞を操作し、関係節主要部のガーデンパス(GP)効果量を比較した。その結果、GP効果量が疑似量化(量化詞の作用域を計算しない解釈)の割合(藏藤他, 2017)と関連することが示された。疑似量化では即時に文の解釈が決定されるが、標準的量化では決定が一時遅延される、という観点から論議される。

sP1-45 スラックラインの熟達過程に関する事例研究

児玉謙太郎(神奈川大学), 山際英男(東京都立東部療育センター)

本研究は全身協調バランス・スポーツ“スラックライン”の熟達過程を調べることを目的とする。特に、基本技能とされる片脚立ちを行っている最中の両手の協調性に着目し事例データで検討した。初心者2名の1か月(週1回×4週間)のトレーニングの前後の両手の協調性を相互再帰定量化分析(再帰率)で定量評価した結果、いずれの参加者も両手の協調性が高くなっていったことが明らかとなった。今後さらに全身の姿勢や認知との関係など詳細に検証していく計画である。

sP1-46 自分の食事時の静止画を正立で見ると食事への注意が高まる -事象関連電位(P300)による検討-

中田龍三郎(名古屋大学情報学研究科), 川合伸幸(名古屋大学情報学研究科)

自己の食事時の静止画を見ると食事をおいしく感じる。この効果は正立の静止画で強くなるのか、自己静止画を見ることが食事へのより強い注意をもたらすのか検討した。刺激を正立で呈示するとおいしさの評定値は高くなった。また試食と無関係な音刺激に対する注意を反映するERP(P300)振幅値は正立条件よりも倒立条件と無人条件で増大していた。正立条件では食行動に向けられる注意配分量が相対的に増加したと推測される。

sP1-47 A Case Study with Implications of the Mobile Cognitive Pupillometry Research Toolkit

神窪利絵(東京大学生産技術研究所), Yuri Klebanov(東京大学生産技術研究所), 米谷竜(東京大学生産技術研究所), 佐藤洋一(東京大学生産技術研究所)

Pupillometry involves measuring changes in the diameter of the eye's pupil. Such pupillary responses have been well studied by scientists to link with a great variety of cognitive processes. However, the responses are typically investigated in the lab settings since they are easily influenced by light sources. To pave the way to expand pupillometry research methods, our paper will showcase design implications of a mobile cognitive pupillometry toolkit that can be integrated beyond the state-of-the-art experimental conditions. We discuss benefits, as well as challenges, of conducting cognitive pupillometry experiments in the less-controlled settings.

sP1-48 瞬目時系列情報を用いた学習者の理解の推定

野村亮太(東京大学教育学研究科), 森田賢治(東京大学教育学研究科), 丸野俊一(九州大学)

学習者は自分自身の理解状態をうまく説明できないことが多い。本研究では学習者の理解を推定する非言語的の手がかりとして自発性瞬目の群発に注目した。観察された個人の瞬目間隔(IBE)から瞬目群発を定義する手法を新たに提案した。提案手法に基づいた瞬目群発は、連続した複数のIBEの情報を用いた場合に数III履修者と

非履修者を弁別可能であった。非履修者に多く見られた瞬目群発は、学生が「理解が難しい」と感じたことの指標になることが示唆された。

SP1-49 ASDに見られる認知・行動パターンと物語生成

青木慎一郎(岩手県立大学), 小方孝(岩手県立大学), 小野淳平(菅原学園 専門学校デジタルアーツ仙台)

自閉スペクトラム症(ASD)の認知・行動パターンに関わる物語生成理論による理解を示した。困難は「何を語るか」よりも「如何に語るか」だった。彼らは「部分」や「非連続性」について敏感であるため、強い「驚き」と感じ物語が進まなくなってしまう。「全体と部分」は「中枢性統合」の、「連続性と非連続性」は実行機能の働きとも言える。また、人の心を文脈の中で理解する「心の理論」にも通ずる。この理解から、物語生成理論に基づく支援ツールについても展望した。

SP1-50 アイトラッキングを利用した、次世代の要件定義書レビュー評価手法

齊藤功樹(日本ユニシス株式会社), 土肥拓生(株式会社レベルファイブ)

本稿では、要件定義書レビュー時の視線情報を用いてレビューを1ページ単位で評価する2つの手法を提案する。1つ目はレビュー時のレビュー品質評価であり、意図的に欠陥を含ませた要件定義書のレビューを19名に実施し、視線情報を用いて重み付けSVMにて欠陥を検出できない人を約81%の精度で分類するモデルを構築した。2つ目はレビュー文書の読みづらさ評価であり、視線情報より読み返し回数を算出し、読みづらさと読み返しの間に正の強い相関がみられた。

SP1-51 現代アートにおける人物写真の「人間らしさ」の度合いの分析

中里周子(東京藝術大学美術学部), 矢野史朗(東京農工大学工学研究院), 宇野良子(東京農工大学工学研究院)

本研究は人物写真における擬物化から、現代アートにおける人間観を明らかにすることを目指して、アンケート調査を行なった。結果として、人間の身体の扱い方が、物を扱っている時のようであり、鑑賞者が比較的不快感を感じる擬物化と、人間の身体が素材となり機能が増えるような加工が行われ、鑑賞者が快と感じる擬物化が主に観察された。

SP1-52 オンライン文章要約の機序解明に向けて：段落分けの検討

布山美慕(北陸先端科学技術大学院大学), 日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

文章理解の機序解明に向け、著者らは、読者が読みつつ文章情報を意味のまとまりごと圧縮し保持する“オンライン要約”に注目した。本研究では、オンライン要約の基礎過程の一つである意味のまとまり範囲推定(意味的段落分け)時に、読者が利用する情報を調べた。実験の結果、意味的段落分けは当該段落内部の情報のみで一貫性をもって可能だと示唆された。この結果は、意味的段落分けが、段落の意図の記述の必要十分性の認識に依拠するとする本研究の仮説に整合的である。

SP1-53 高速行為文の理解による反応時間の遅延

栗津俊二(実践女子大学人間社会学部)

言語の身体性に関する多くの研究では、行為文の理解時に知覚運動シミュレーションが活性化し、実行為が影響されることが示されている。本研究では、記述された行為の速度が、知覚運動シミュレーションに影響するか調べた。日本語行為文の有意性をボタン押しで回答させ、低速—高速行為文間で反応時間を比較した。その結果、低速文理解時の方が高速文理解時よりも、反応時間が速かった。この不一致をもたらす仕組みについて、考察した。

sP1-54 英語の使役移動構文と動詞不変化詞構文の獲得について

本多明子(至学館大学)

本論文の目的は、英語の使役移動構文と動詞不変化詞構文の獲得過程について、認知言語学・用法基盤モデルの観点から示すことである。これらの構文は、認知言語学において関連構文であるとみなされており、自然言語やCHILDESを調べてみても、こどもの発話において広く観察され、且つ、其々の構文の使い分けが見られる。本論文では、この二つの構文の獲得過程について、文法構文として確立するまでに三つの段階があることを提示する。

sP1-55 いつなら飲んでも良い？：雑談場面における「飲むこと」の相互行為的調整

阿部廣二(早稲田大学人間科学学術院), 牧野遼作(早稲田大学人間科学学術院), 山本敦(早稲田大学人間科学研究科), 門田圭佑(早稲田大学人間科学研究科), 古山宣洋(早稲田大学人間科学学術院)

会話場面の分析を通して会話中に飲み物を飲む行為の調節が達成される過程を検討した結果、1)発話が宛てられていない受け手になることで飲むことを開始できること、またそうした受け手も、発話の宛てられた受け手になる可能性が高い場所では飲むことを開始しないこと、2)話し手も飲み始めることがあり、それは発話の先延ばしとして理解できることが明らかになった。この点を、会話中に飲み物を飲むことの参与者間の相互調整と、会話と飲み物の関係の観点から考察した。

sP1-56 地域高齢者のスマホの利用学習の支援の検討 ―学生が主催する講習会への参加がスマホ利用イメージに及ぼす影響について―

須藤智(静岡大学), 大木朱美(株)KDDI 総合研究所), 新井田統(株)KDDI 総合研究所)

本研究では、高齢者のスマホのニーズ調査と利用学習を促進する講習会を開発し効果測定した。65歳以上のスマホ利用率は19.1%であり、所有を躊躇するのは「使いこなせるかわからない」感じていることが明らかになった。開催した講習会は、若年者と共に日常レベルのスマホ利用を体験できる会であった。講習会に参加することで、主観レベルで操作できるようになった、不安感が低減するなどの効果があることが明らかになった。

sP1-57 歌舞伎と文化的ナラトロジーへの物語生成アプローチの構想

小方孝(岩手県立大学)

本稿では、歌舞伎を媒介として、多元的物語論とは何か、物語への文化的アプローチとは何か、芸能としての物語とは何か、について論じた。最後に、統合物語生成システムと芸能情報システムとの連携としての全体としての物語生成システムの構成を示した。今後は、ここで挙げた諸概念とのより密接な関連において、歌舞伎の調査・研究を進め、統合物語生成システムと芸能情報システムが連動した物語生成システムの設計・開発を進展させる。

sP1-58 うわさを信じる7歳児、信じない5歳児：パートナー選択課題におけるうわさの効果の検討

篠原亜佐美(名古屋大学), 鹿子木康弘(追手門学院大学), 奥村優子(NTTコミュニケーション科学基礎研究所), 小林哲生(NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

本研究では、5歳児・7歳児がポジティブ／ネガティブなうわさを基に第三者評価をおこなうかどうかについて、子どもの他者を利する行動・信頼する行動を指標として検討した。結果、7歳児はネガティブ／ポジティブなうわさのどちらとも利用して他者とのかわり方を決定していたが、5歳児はネガティブなうわさのみを利用していた。これらの結果から、発達初期にはネガティブなうわさに敏感であることが示唆された。

sP1-59 かわいいものに対する反応とその効用—かわいいと触りたい?—

岡田真奈(神戸大学人間発達環境学研究所), 阪田真己子(同志社大学文化情報学部)

人は、ベビースキーマと呼ばれる、幼い動物が持つ身体的特徴を持つものをかわいいと感じ、また、かわいいものを見ることによって、ポジティブ感情が喚起するなど、様々な効用が生じることが明らかになっている。しかしながら、人はかわいいものに対し、どのような振る舞いをみせるのかということについては、未だ明らかになっていない。そこで、本研究では、行動抽出を行い、人がかわいいものに対して、どのような振る舞いをみせるのかということについて検証した。

sP1-60 共同作業における運動主体感の脳波計測

白石壮大(明治大学理工学研究科), 嶋田総太郎(明治大学理工学部)

集団で運動したときに「この運動は我々が起こしている」と感じる感覚を共同運動主体感という。本研究では、共同作業中の2者の脳波を同時計測し、運動主体感と2者の脳波同期の関係から共同運動主体感の生起に関わる脳領域を調査した。実験の結果、互いに協調し合うほど、共同運動主体感は高まり、β波帯域において頭頂葉の同期が高まった。このことから、共同運動主体感の生起には頭頂葉のβ波帯域の活動が関わると考えられる。

sP1-61 SNSでの情報探索行動に関する予備的検討: 情報要求ツイートの分類

齋藤ひとみ(愛知教育大学), 林穂波(愛知教育大学)

本研究では、Twitter上で情報を求めるつぶやきを収集し、どのような質問がされているのかを分析した。Twitter APIを用いて質問系のハッシュタグを含むツイートを収集し、機械学習の手法を使って情報要求ツイートを自動抽出した。抽出された918件のツイートについて、タイプやトピックの分類、リプライの有無を調査した。分析の結果、Twitterで多く投稿される情報要求のタイプや回答率の高い情報要求のタイプなどが明らかになった。

sP1-62 選択のオーバーロード現象が商品購買意図に及ぼす影響

佐藤貞之(北九州市立大学マネジメント研究科), 今井優介(北九州市立大学マネジメント研究科), 工藤傑(北九州市立大学マネジメント研究科), 長戸操(北九州市立大学マネジメント研究科), 松田憲(北九州市立大学マネジメント研究科), 有賀敦紀(広島大学総合科学研究科)

行動経済学者は、多くの選択肢が消費者の選択行動を阻害し、満足度を低下させる「選択過多効果」をもたらす可能性を示唆した。本研究では、北九州市在住の大学生において選択過多効果の再現と購買意図との関係を地元有名企業の商品を用いて調査した。選択過多効果は生じなかったが、購買決定場所からの距離に関係なく、購買経験に応じて選択肢数が少ない場合の購入率が高くなることがわかった。これはIyengerのジャムの実験結果に酷似している。

sP1-63 モーラ子音の素性構造について

松井理直(大阪保健医療大学)

近年の音韻論では、日本語の撥音・促音が逆行同化を起こすのは、要素が過小指定され、CCスロット構造により後続要素が自律分節的拡張が行われるためであると考えている。しかし、この説明では撥音が「鼻母音」に変異することを説明できない。また、「空のCスロット」という表示では特殊な促音の変異を誤って予測してしまう。本稿では、音節のコーダ位置という性質と撥音・促音に固有の情報を考えることで、撥音・促音の変異を正しく導出できることを述べる。

sP1-64 錯視が障害物跨ぎ越し動作に与える影響に関する行動科学的検討

桜井良太(東京都健康長寿医療センター研究所), 児玉謙太郎(神奈川大学)

The present study aimed to determine whether foot clearance is increased by visual illusion during a step-over task. Four participants were asked to judge the height of three obstacles in different conditions [control (i.e., white plane obstacle), horizontal, and vertical illusion conditions] placed 4 meters away from them and then to approach the obstruct to step over it. They perceived the obstacle to be higher in the vertical illusion condition compared to the other conditions. Similarly, they stepped over 83mm to 195mm higher the obstacles under the vertical illusion condition compared to the other conditions. Our results suggest that application of visual illusion can promote the adoption of a safer stepping-over strategy.

sP1-65 スケジューリングされた教育ビッグデータを活用したアダプティブラーニング

寺澤孝文(岡山大学教育学研究科), 津田真吾(岡山大学), 益岡都萌(岡山大学), 佐久間康之(福島大学), 鈴木渉(宮城教育大学), 上田紋佳(福山平成大学), 西山めぐみ(国際環境大学), 田中優貴(岡山大学), 牛司策(岡山大学), 羊忻怡(岡山大学)

学習者の学習の進捗レベルに対応させて学習コンテンツを提供するアダプティブな e-learning の実現は, 効率的に知識を習得する上で重要な課題といえる。本発表は, 英単語等の学習内容の一つ一つについて, 反復してなされる学習とテストのタイミングを年単位で制御する技術を実装した e-learning により収集される膨大な縦断的学習データから, 問題の一つ一つの到達度を高精度で推定することを可能にした成果を発表する。

sP1-66 情動的共感が他者感情推定時の生理反応に与える影響

前川亮(追手門学院大学心理学部), 乾敏郎(追手門学院大学心理学部)

他者感情推定時に, 他者の身体状態を模倣し, 自分の中に相手と同じ感情が生じることで感情推定を行うモデルが提案されている。本研究では共感性の個人差に着目し, 共感性が模倣的な身体状態におよぼす影響を検討した。感情推定課題を行い, 課題中の表情筋活動・心拍・発汗を記録した。さらに共感性尺度得点と身体状態の変化を比較した。結果, 共感性の低い群においてのみ, 感情推定値と身体状態の間に相関がみられた。

sP1-67 情報生態学的人格発達論の試み：認識論へ向けて

高橋秀明(放送大学)

本論では、情報化社会における人間の発達を捉える枠組みとして、情報生態学的人格論を提案した。

sP1-68 説明文の冒頭が説明対象の認識に及ぼす影響

加藤祥(国立国語研究所), 浅原正幸(国立国語研究所)

文章の冒頭の重要性が言われる。しかし, いわゆる冒頭にあたる部分がないような短い説明文でも同様か。本稿は, ある対象物に関する説明文を用い, 読み手がテキストに記された対象物を認識するとき, 冒頭文が後続の説明文に影響を及ぼすのか調査した。結果, 読み手が冒頭によってカテゴリのプロトタイプのようなものを想起した場合, すなわち強い印象を受けた場合, 情報が追加されても読み手の認識は覆らない傾向がみられた。

sP1-69 構造依存性を持った記号システムの形成過程を観察するための実験課題の設計について

金野武司(金沢工業大学工学部電気電子工学科), 齊藤優弥(金沢工業大学 工学部 電子情報通信工学科)

人間の言語には、表現と意味の間を結ぶ関係に構造依存性と呼ばれる階層構造がある。本論では、記号的コミュニケーションにおいて、その構造依存性が生じる過程をメカニズム的に解明するための実験室実験を検討し、参加者が取り組む課題の構成要件を整理して、具体的にゲーム課題を考案・設計する。また、設計したゲーム課題に基づき、人間が扱う意味を多様化・複雑化させる際の原動力を議論する。

sP1-70 作品解説文が美術館での鑑賞に与える影響－フィールド実験に基づく探索的検討

田中吉史(金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学科)

美術初心者の美術鑑賞における解説文の効果を、実際の美術展でのフィールド実験によって検討した。作者による解説文を読む条件、作者による解説文に基づきより能動的に鑑賞するように促すよう指示する問いかけ文条件、解説文なしで鑑賞する条件を設け、15ペアの美術初心者がある現代美術展を鑑賞した。問いかけ文条件では解説文なし条件よりも長時間かけて美術展を鑑賞した。鑑賞中の会話内容の分析により、解説文の内容と作品の特徴との相互作用について検討する。

sP1-71 創造性評価における直感と熟考

寺井仁(近畿大学産業理工学部), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科), 仲村都奈(近畿大学)

本研究では、個人の内的な基準に従って創造性評価を行う場合において、創造性評価に対する直感および熟考の影響を検討した。その結果、創造性評価の一貫性における、直感的判断への選好と評価方法の間の相互作用が明らかとなった。具体的には、(1) 熟考的な評価を求められた場合、直感傾向の高低による影響は認められず、(2) 直感的な評価を求められた場合に、直感傾向の低い評価者の創造性評価の一貫性が低下することが明らかとなった。

sP1-72 情報端末機器を使った移動情報の取得が空間関係把握に与える影響

舟岡滋悟(成城大学), 新垣紀子(成城大学社会イノベーション研究科), 戸田薫子(成城大学)

本研究は、年代間で都市の位置関係の把握に違いがあるのか明らかにすることを目的とした。

本研究では二つの分析を行った、(1)実際の地図上の位置と参加者が示した位置を比較する分析(絶対的な位置関係)、(2)参加者が示した各地点間の距離を比較する分析(相対的な位置関係)。

その結果、学生の位置関係の把握は中高年より絶対的、相対的のどちらも低かった。

sP1-73 協調的問題解決における役割と思考スタイルの一致／不一致による課題達成の差異

佐藤信之介(千葉工業大学), 山崎治(千葉工業大学)

本研究では、協調的問題解決を促進する要因として役割に着目した。特に、参加者が課題の役割を好むかどうかで問題解決のパフォーマンスに影響を及ぼすかを調査した。本研究では、役割の好みを把握するために個人特性として思考スタイルの立案型と評価型を用いた。

実験では、役割を好む型を持つ参加者で構成されたグループを一致条件、役割を好む型を持たない参加者で構成されたグループを不一致条件として課題を行わせ、その結果からパフォーマンスの比較を行った。

sP1-74 様々な日本語条件文の論理的性質

吉沢栄貴(東京電機大学理工学部), 高橋達二(東京電機大学理工学部)

「p ならば q」という形式をとる条件文を人間が解釈する際、論理学上の通例的な定義と人間の直感的解釈に相違があることが知られている。

先行研究では Gauffroy らの研究があり、日本語条件文では Namiki らの研究が存在するが後者の研究には様々な問題点があった。先の問題点を改善した上で、先行研究を複合した日本語条件文実験を行い、条件文の解釈の分析と

Gauffroy らの結果との比較を行なった。

sP1-75 Inhibitory Control in Japanese Learners of Spanish

星野徳子(津田塾大学), Montserrat Sanz(神戸市外国語大学)

Past research suggests that when learners speak in a second language (L2), their first language (L1) is co-activated and needs to be inhibited. The present study examined the mechanism of non-target language inhibition when Japanese learners of Spanish spoke in their L1 Japanese and L2 English as well as in their third language (L3) Spanish. It was predicted that the degree of non-target language inhibition would be modulated by relative language proficiency.

sP1-76 基礎情報処理クラスにおけるアクティブ・ラーニングの可能性

森下浩平(大阪経済法科大学)

本調査では、アクティブ・ラーニングについて調査を行った赤堀（2017）をもとに、基礎情報処理クラスの受講を希望する学生を対象としたアンケート調査を行った。学内外で報告することに同意した 229 名分（うち 7 名は留学生）について、赤堀（2017）の結果と比較した。全体として、アクティブ・ラーニングへの期待が高かったことから、今後は授業に取り入れて学生からのフィードバックを得る予定である。

sP1-77 高齢者－若年成人間の会話におけるターン交代時トラブル：コールセンター対話における会話分析から

原田悦子(筑波大学人間系), 池永将和(筑波大学人間総合科学研究科)

コールセンターにおける対話の実音声データを対象とし、高齢者と若年成人の対話におけるターンテイキングの分析を行った。高齢者（顧客）は若年成人（オペレータ）よりも頻繁に、会話へ強制的な割り込みを行っていた。割り込みは、相手の発話内容が予測できたとした時点、あるいは発話反復をしているときに行われており、会話における「話すと聞くとの二重課題性」が加齢に伴う課題達成低下をもたらしている可能性が示唆された。

sP1-78 コミュニティの境界はいかにして構成・横断されるのか：超小型衛星開発プロジェクトのエスノグラフィーを通じた活動理論的考察

渡辺謙仁(北海道大学), 田邊鉄(北海道大学)

本研究の目的は、コミュニティや活動の境界はいかにして構成され、また横断されるのかを、超小型衛星開発プロジェクトのエスノグラフィーを通して活動理論の枠組みから考察することである。本研究の結果、活動拠点という物理的空間に入るための鍵などの分かり易い存在だけでなく、身体の移動や、集会的活動が向かう対象の特質もまた、活動とその境界のあり方を媒介していたことが分かった。

sP1-79 ラバーハンドイリュージョンに対する単純触刺激のプライミング効果

上田拓弥(関西学院大学理工学研究科人間システム工学専攻), 工藤卓(関西学院大学理工学部人間システム工学科)

ラバーハンドイリュージョン (RHI) は機械の遠隔操作への応用などで近年注目されている。本研究では RHI による身体的感覚の延長を試みた。内観報告書と脳波、筋電計測からその強度を評価し、RHI 誘導の積算効果により、長い延長ラバーハンドにおいても RHI が発現することを明らかにした。さらに RHI 誘導前に自身の手のみに触刺激を与えた場合、通常の RHI と比して RHI の発現が優位に増加する、RHI における事前刺激によるプライミング効果を発見した。

sP1-80 相互行為における「ペンの持ち方」の検討

牧野遼作(早稲田大学人間科学学術院), 門田圭佑(早稲田大学人間科学研究科)

人々がペンをを用いる相互行為場面を対象とし、書き始めるタイミングと、ペンの持ち方についての探索的な定量的検討の結果を報告する。対象としたデータは、2名の参与者による、書字行為を含む順番決定課題会話であった。分析の結果、相互行為内で書字行為を開始する3秒前から、書き手も書き手とならない参与者も書くためのペンの持ち方に変える頻度が多いことが示された。さらに他者が書くための持ち方をしたとき、自身はペンの持ち方を抑制する可能性が示唆された。

sP1-81 手書き氏名における自己関連情報処理の検討

澤田玲子(特定非営利活動法人神経発達症研究推進機構), 十一元三(京都大学医学研究科), 正高信男(京都大学霊長類研究所)

ヒトはさまざまな対象に自己を認識する。本研究は、氏名と筆記者の2領域の自己情報をもつ手書き氏名を観察中の事象関連電位を計測し、対象によって異なる自己表象があるのかを調べた。その結果、筆記者における自己-他者情報処理の違いは後頭頂領域のP250に、氏名における自己-他者情報処理の違いは正中部のLPCに反映した。このように、氏名と筆記者の自己情報処理は異なる成分に反映し、対象によって異なる自己表象があることが示唆された。

sP1-82 記号コミュニケーションにおいて途中変更する意図の伝達の成否に過去の記憶が与える影響

河上章太郎(金沢工業大学工学研究科電気電子工学専攻), 金野武司(金沢工業大学工学部電気電子工学科)

人の記号的なコミュニケーションでは、字義通りの意味だけではなく言外の意味が伝えられる。このため、同じ表現でも言外で異なる意味が伝えられることが頻繁に起こる。しかし人は、過去の意味(記憶)に縛られずにその変化に柔軟に対応できる。我々は記号のやりとりを伴う同調課題に取り組む計算モデルを構築し、その計算機シミュレーションを通じて、言外の意味が変更された場合に、過去の意味の記憶がその伝達の成否に与える影響を調査・議論する。

sP1-83 エージェントに対する知性に関する印象形成: 知識量に着目した実験的検討

星田雅弘(立命館大学文学研究科), 林勇吾(立命館大学総合心理学部), 田村昌彦(立命館大学文学部)

対人認知場面では、(1)相手に関する既有知識と(2)相手の振舞いの2つの手がかり情報を利用しながら印象が形成される。本研究では、エージェントに対しても同様の印象形成が行われるのかを実験的に検討した。互いにある対象を単語で伝え合う場面を設定し、エージェントの知識量が知性の印象にどのように影響するのかを調べた。その結果、相手の知識量は知覚される知性に影響しなかった。

sP1-84 ヒューマノイドロボットに対する感情認知と社会行動

河原美彩子(東京女子大学), 澤田佳子(東京女子大学), 田中章浩(東京女子大学)

本研究では、ロボットから多感的に表出された感情を人間がどのように認知するのか、また、それによって人間の利他行動は生起するのか検討した。その結果、目の色のような人間には表現できない人工の手がかりより、ジェスチャーのような人間も使う自然的手がかりを重視してロボットの感情を判断することがわかった。またロボットに対する利他行動の生起には、ロボットがどのような感情を示したかではなく、人間がそれをどのように感じたかが関係する可能性が示された。

sP1-85 相対発話速度が印象に及ぼす影響

本木隼人(東京電機大学), 日根恭子(東京電機大学情報認知科学研究室)

これまでに、話し手の発話速度によって聞き手が感じる話し手の性格印象が変わることが報告されている。しかし会話時において、聞き手と話し手の発話速度の違いである相対発話速度により、性格印象の違いが生じるかは不明な点が多い。そこで本研究では、会話時における相対発話速度が印象に及ぼす影響を検討した。その結果、「明るい↔暗い」、「慎重な↔軽率な」の形容詞対に対して、話し手の発話速度にかかわらず、相対発話速度が影響していることが示唆された。

sP1-86 日本語文の語彙的ネットワークの安定性

犬童健良(関東学園大学)

本論文では古典的な知識表現の一つであるフレームを用いて、日本語文の理解を解釈した。語彙ネットワークは、語フレームの結合によって文フレームを組み立てるサプライチェーンと同型とみなされる。また助詞「は」と「が」の交換による文の意味の微妙な変化を、ネットワークの安定性の問題として定式化する。これにより、従来インフォーマルに論じられてきた総記や対比、情報の新旧、非言語的コンテキストの影響などを、厳密に認知モデル化することが可能になった。

sP1-87 Biscuit Conditionals – 擬似条件文について

山森良枝(同志社大学)

一般的に条件文には、条件節 p が条件、結果節 q がその帰結を表すという意味で、p と q の間に依存関係があることを示す。ところが、p と q の間に依存関係が成立しない例がある。前者を Standard conditional(SC)、後者を Biscuit Conditionals (BC) と呼ぶ。本論では、(I) BC の読みはどうして生じるのか、また、(II) 同じ条件形式に BC と SC の読みが生じるのはなぜか、について考察する。

sP1-88 高齢者—若年成人間のコミュニケーション： コールセンター場面における高齢者対応事例

池永将和(筑波大学人間総合科学研究科), 原田悦子(筑波大学人間系)

コールセンターにおける対話の実音声データを対象とし、高齢者と若年成人の対話の特徴や、それらが若年成人にとっての高齢者とのコミュニケーションへの困難さ、負担感となっているのか否かについて、探索的検討を行った。高齢者によってうまく説明されなかった問題状況を、若年成人が補完しながら会話を構築し、協同問題解決を進めていくための負荷が示唆され、同時に高齢者が示す社会的な力への対応要求といった異なる負担の存在も示された。

招待講演 : John R. Anderson (Inv1)

8月30日(木) 14:00-14:50 会場 : B棟 2F グランドホール

リレー招待講演 1 : 「認知モデリング研究の過去・現在・未来」

講演者 : John R. Anderson (Carnegie Mellon University)

企画 : 林勇吾 (立命館大学) ・服部雅史 (立命館大学)

司会 : 林勇吾 (立命館大学)

本講演では、まず認知心理学の研究によって得られた理論が計算機上で動作するコンピュータモデルとしてどのように実現可能なのかについての解説がなされる。その上で、同氏が提唱・開発し、世界の多くの研究者を魅了して利用されてきた ACT-R に関するこれまでの研究や現在の取り組み、今後の展開についてお話しいただく。さらに、同氏の研究が日常場面（教育や医療など）の問題に対してどのように応用されてきたかも取り上げ、ACT-R を基盤として作成された学習支援システム、Cognitive Tutor に関するこれまでの研究成果も紹介していただく予定である。

会長講演 (Pres1)

8月30日(木) 15:00-15:40 会場 : B棟 2F グランドホール

リレー招待講演 2 : 「認知モデリング研究の過去・現在・未来」

講演者 : 三輪和久 (名古屋大学・日本認知科学会会長)

John Anderson 先生の講演を踏まえて、次の二つの話題について解説する。(1) 認知モデルを作ることによる学習 : 認知モデルを作ることは、自分や他者の知識を外在化することに他ならない。この知識の外化活動は、自他の認知プロセスをメタに観察するメタ認知的活動でもある。認知モデルを作ることによる学習のための学習環境基盤、およびその学習効果を述べる。(2) データ駆動モデルアプローチと認知モデルアプローチの統合 : 自動車を運転する ACT-R モデルを紹介し、それをを用いた自動車運転支援技術への展開を述べる。ドライバの行動データに基づく「データ駆動モデルアプローチ」と、認知アーキテクチャを用いた「認知的モデルアプローチ」の統合の試みを紹介する。

特別講演 : 安西祐一郎 (Spec1)

8月30日(木) 15:40-16:00 会場 : B棟 2F グランドホール

リレー招待講演 3 : 「認知モデリング研究の過去・現在・未来」

講演者 : 安西祐一郎 (日本認知科学会元会長・フェロー)

John Anderson 先生と三輪和久先生の講演を受けて、認知研究におけるモデルの意義や、モデルと理論の関係などについて講演していただく。

オーガナイズドセッション 5 (OS05)

Nudge: Design and choice architecture in J・D・M

8月30日(木) 16:10-18:40 会場: A棟 2F AC231

オーガナイザー: 中村國則(成城大学), 本田秀仁(東京大学)

OS05-1 ナッジされる私たち

山根承子(近畿大学)

セイラーとサンステーンが2008年に提唱した「ナッジ(nudge)」は、人々がよりよい選択をするように誘導するような仕組みを考えることを目指している。ナッジは選択の自由を禁じたり、経済的なインセンティブを大きく変えたりするものであってはならない。人間の意思決定のクセを利用して「誘導」することが望ましいとされている。本講演では様々なナッジの事例を紹介しながら、主にナッジの持続性について議論したい。

OS05-2 家庭での水使用量の見える化をデザインする

大瀧友里奈(一橋大学)

日本の水道において、スマートメータの将来的な導入が検討され始めており、それに伴い各家庭に対して使用量の見える化サービスを行うことが想定されている。しかし、どのように見える化するのか、また見える化により使用量がどのように変化する可能性があるのか、という検討は全く行われていない。そこで、本稿では、社会的規範を用いて水使用量を見える化するフィールド実験を6か月にわたって行った結果を紹介する。

OS05-3 "充分"とを感じるのか"足りない"とを感じるのかは報酬の渡し方次第: 非言語的フレーミング効果による評価の変化

大貫祐太郎(東京大学総合文化研究科), 本田秀仁(安田女子大学心理学部ビジネス心理学科), 植田一博(東京大学総合文化研究科)

属性フレーミング効果を扱った従来の研究では、評価対象への言語的な表現方法を操作することで、対象への評価を変化させていた。本研究では、非言語的な方法で報酬に対する捉え方(利得, 損失)を変化させることで、報酬に対する評価が変化するかどうかを検証した。その結果、報酬の受け取り方を変化させることで、報酬に対する満足度が変化する非言語フレーミング効果が生じることを明らかにした。

OS05-4 前傾姿勢は意思決定に影響を与えるか?~前傾椅子を用いた実験的検討~

白砂大(東京大学総合文化研究科), 本田秀仁(安田女子大学心理学部ビジネス心理学科), 植田一博(東京大学総合文化研究科)

身体性認知の研究において、身体状態と心理的状态との関連は長年、議論されている。本研究では、体勢という身体状態に注目し、前傾の体勢が意思決定に与える影響について、座面が前方に傾いた「前傾椅子」、および傾きのない「通常椅子」を使用し、行動実験により検証した。結果として、座面の重心が前方にかかっていた参加者は、より積極的・寛容的な意思決定を示す傾向にあった。本研究の知見は、望ましい意思決定に向けた環境設計につながる可能性が期待される。

OS05-5 多すぎる 300, 少なすぎる 299 - 日本プロ野球データにみる概数効果 -

中村國則(成城大学社会イノベーション研究科), 今川翔太(成城大学社会イノベーション学部)

切りのいい値を基準として行動が変容するという概数効果(round number effect: Pope et al, 2011)を検討するため、2005年から2017年までの日本プロ野球の打率成績を分析し、打率が2割9分9厘の打者の数と3割0分0厘の打者の数を比較した。その結果、前者に比べ後者の比率が不自然に高いことを見出した。

オーガナイズドセッション 6 (OS06)

意味理解とオブジェクト認知：ホモ・クオリタスとしての人間理解へ向けて

8月30日(木) 16:10-18:40 会場：A棟 2F AC232

オーガナイザー：日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)、高橋康介(中京大学)

OS06-1 意味理解とオブジェクト認知：ホモクオリタスとしての人間理解に向けて

日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)、高橋康介(中京大学心理学部准教授)

我々は自動車を運転をするとき、ハンドルを持つ手を意識することなく、“自分を拡張した自動車”全体の操縦に専念できる。これはハンドル操作の高い予測性により自動車全体と一体として感じられる最たる例である。広範な認知過程の鍵となる、こうした統合的な情報処理の単位(オブジェクト)をテーマに、本OSでは、オブジェクトの知覚、その障害である幻覚、または知覚を誘導する技術、そして情報処理について議論を行う。

OS06-2 病的知覚体験と他者の表象

西尾慶之(東京都立松沢病院)

レビー小体型認知症やパーキンソン病では、人の幻視、実体意識性(「近くに誰かがいる」という幻覚)、キネトプシア(動きの錯視)などの病的感覚体験が観察されます。私は「逸脱した空間知覚→幻の対象の存在感→他者にまつわる意味表象の賦活」という心理の流れに基づいてこれらの病的感覚体験を理解できるのではないかと考えています。この仮説の根拠となる現象学的、神経学的知見についてご紹介させていただきたいと思います。

OS06-3 意味の圏論的理解：不定自然変換理論の試み

西郷甲矢人(長浜バイオ大学)

意味は関係的である。ひとつの形象の意味ですら、他の無数の形象との関係を離れては存立し得ない。本講演においては、こうした構造を記述し理解するために格好の数学的枠組み＝「圏論」を用いた意味の理論として、布山美慕氏と演者が提唱した「不定自然変換理論」の試みについて述べる。重要な応用である新規比喩の意味生成の問題を焦点としつつ、「意識」の圏論的理解との関連も論ずる。

OS06-4 バーチャルリアリティに見る都合の良い自分

鳴海拓志(東京大学)

女の子のキャラクタが近づいてくだけで吐息を感じる、見た目と香りが変わると味まで変わって感じてしまう、アフロのバタを使うだけで太鼓の叩き方が変わる。バーチャルリアリティ(VR)では、矛盾する感覚刺激は理解可能な体験として統合され、自分とは異なる体を使うだけで振る舞いや心理が変わってしまう。VRを通して垣間見えるこうした過剰なまでの意味の辻褄合わせの事例を紹介し、「意味」の認知の理解に迫りたい。

OS06-5 意味理解とオブジェクト認知

日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学), 高橋康介(中京大学心理学部准教授), 西尾慶之(東京都立松沢病院), 西郷甲矢人(長浜バイオ大学), 鳴海拓志(東京大学)

計算論的認知科学者(日高昇平)、知覚心理学者(高橋康介)、VR 研究者(鳴海拓志)、精神医学者(西尾慶之)、比喩の理論化に挑む数学者(西郷甲矢人)などの関連分野の異なる視点を持つ気鋭の論者を招待し、オブジェクトあるいは意味の単位をいかに理論的に扱うべきか、という点を主要なテーマとして議論を深める。これに先立って、この企画の趣旨説明、また各論者の研究概要の紹介、VR 技術の体験セッションなどを事例に議論を深める。

OS06-6 バーチャルリアリティを通じた「意味」の理解

高橋康介(中京大学心理学部准教授), 鳴海拓志(東京大学)

昨今、Virtual Reality (以下 VR) の隆盛が著しい。VR の本質は「意味」の現前といえるかもしれない。その世界を一人称的に体験する者にとってのみ、その世界およびその世界における意味が現れる。ではその「意味」は一体どこから、どこに、どのような時に現れるのだろうか？ 本企画では、VR を用いた体験を通して、「意味」の認知現象と意味の圏論的理解や病的感覚体験との接続を試みたい。

オーガナイズドセッション 7 (OS07)**知覚と相互行為**

8月30日(木) 16:10-18:40 会場: A棟 2F AS251

オーガナイザー: 坂井田瑠衣(国立情報学研究所), 牧野遼作(早稲田大学), 名塩征史(静岡大学)

OS07-1 相互行為における複様式知覚の組織

西阪仰(千葉大学)

相互行為において、相手が何を見ているかをそれぞれの相互行為参加者が見ることは、決定的に重要である。が、相互行為における知覚の組織そのものは、分析の対象となることはあまりなく、むしろ、前提とされてきた。本報告では、相互行為のなかで行なわれている「活動」に関連した形で、知覚がそのつどう組織されるのか、さらに、視覚と触覚の複様式的な知覚がどう組織されるか、などを、具体的な事例とともに検討する。

OS07-2 知覚と相互行為に関するデータセッション

坂井田瑠衣(国立情報学研究所), 牧野遼作(早稲田大学人間科学学術院), 名塩征史(静岡大学), 西阪仰(千葉大学), 細馬宏通(滋賀県立大学)

知覚をめぐるやりとりが重要な役割を果たす相互行為場面の映像データを用いて、会場全体でデータセッションを行う。データセッションとは、相互行為を収録した音声や映像を繰り返し観察して意見を述べ合い、当該データの分析の可能性や記述の妥当性を検討する議論形式である。知覚と相互行為にまつわる先駆的研究を進められてきた招待講演者、人間行動学がご専門で相互行為研究に造詣が深い指定討論者にも議論に参加いただく。

オーガナイズドセッション 8 (OS08)

協調学習の評価の刷新：指標を探す

8月30日(木) 16:10-18:40 会場：A棟 2F AS252

オーガナイザー：白水始(東京大学), 益川弘如(聖心女子大学)

OS08-1 協調学習の評価の刷新：指標を探す

白水始(東京大学), 益川弘如(聖心女子大学)

This article gives an introduction to our organized session “Renovation of assessment of collaborative learning: In search of appropriate measures.” The overall session aims at answering two questions: “Are there any generalizable measures of collaborative learning across situations?” and “Who should and could take responsibility for searching and defining those measures in particular situations?” In order to answer these questions, we focus on process data of student learning in specific lessons using a collaborative learning method, with its multi-vocal analyses. As an introduction, this article briefly lays out background of assessment of collaborative learning in cognitive science and learning sciences.

OS08-2 知識構成型ジグソー法の授業デザイン：中学校理科「運動の仕組」

堀公彦(東京大学)

本稿は「知識構成型ジグソー法」による中学校理科「運動の仕組」の2度の実践について報告する。2014年度は、課題を「ボールを打つ動きのストーリーを語ろう」とし、神経・骨格・筋肉の3資料を用いたが、理解の深まりが不十分な授業となった。そこで2016年度に「落ちてくる定規を指先でつかむ」運動を題材とした課題に単純化した結果、十分な理解の深まりを確認できた。これは、題材の単純化によって、より焦点化された対話が活発に行われたためと考えられる。

OS08-3 学びのモデルに基づく指標を複数重ねることから見える対話の質

益川弘如(聖心女子大学), 河崎美保(静岡大学)

本報告は学びのモデルに依拠した指標を複数組み合わせ授業改善に資する対話の質の評価を試みる。2授業は「チーム構築調整」の発話が少なく、科学的概念を理解するために身近な経験を参照し説明を構成する「知識と理解の社会的構成」が図られる等、協調による理解深化の起きやすい特徴をもつ。だからこそ課題の変更が経験の参照範囲を適切に制約し、対話が焦点化される様が見えてくる等、複数指標により対話の質の評価を検討する。

OS08-4 理解深化につながる対話を見とる指標の提案：対話中の疑問を軸として

齊藤萌木(東京大学), 飯窪真也(東京大学), 白水始(東京大学)

In search of effective assessments for professional development of teachers in a Japanese school-based lesson study, the authors attempted to identify measures to assess constructive interaction in classroom. We used numbers and types of question generated as measures and analyzed student's protocols. Our analyses helped teachers to have concrete image of collaborative learning and to verify their design hypothesis based on learning processes of students.

OS08-5 指標探索のための人間と機械の建設的相互作用

中山隆弘(東京大学), 白水始(東京大学)

協調学習の分析ツールは教員が検索した表現をハイライトする「ミラーシステム」と特定表現を自動分析する「ガイドシステム」に大別できる。教員のエンパワーにはその両方が必要だろう。ガイドを参考に教員が検索を行い、結果を後人のガイドにフィードバックする体制を作ることができれば、人間と機械の相互作用をより建設的にできるのではないか。その可能性を検討するため、まずは本 OS の人手による分類が機械化できないかを検証した。

口頭発表 1 : インタラクション (s01)

8月31日(金) 8:40-10:10 会場 : B棟 2F グランドホール

座長 : 正田悠 (立命館大学)

s01-1 公共的人工物の利用を支援する観察学習 : その効果と限界

田中伸之輔(筑波大学), 原田悦子(筑波大学人間系), 須藤智(静岡大学)

公共空間に設置された人工物を利用する際、他者の利用を観察できる観察学習がもたらす支援効果について検討した。参加者(高齢者・若年者)を観察学習の有無で群分けし、空港を模したスペースで、出入国管理システムである顔認証ゲートを3回利用するユーザビリティテスト実験を行なった。その結果、特に高齢者に強く観察学習の支援効果が現れ、若年者でも観察される試行反復による学習とは独立な効果が示された。機器利用を苦手とする人への観察学習の有効性が示された。

s01-2 医療におけるソーシャルイノベーションの萌芽過程

新垣紀子(成城大学社会イノベーション研究科), 都築幸恵(成城大学)

本研究は、ソーシャルイノベーションが社会に浸透するプロセスを検討するために、医療場면을対象として、専門家の活動を分析した。2名の開業医に対して、インタビューおよび参与観察を行い、活動の記録を調査した。その結果、社会問題解決のためのモデルは、当初から検討されているものではなく、試行錯誤の結果に生まれること、問題解決の過程では、異分野の考え方による視点の変換が重要な役割をしていることがわかった。

s01-3 情報システム開発における越境的実践

中村雅子(東京都市大学), 渡部宣弥(NRI データiテック株式会社), 竹中慧(パナソニックシステムソリューションズジャパン株式会社)

本研究では情報システム開発についてシステムエンジニアらに行ったインタビュー調査から得た事例の検討を行った。システム開発を、使う側(ユーザ、依頼企業)と、それを制作する側(デザイナー、IT企業)という2つのグループの間の境界を越えてシステムをデザインする越境的な活動と捉えることで、システム開発の現場においては規範的なプロセスとは別の越境のための「現場の工夫」が重要な意義を持つことを示した。

s01-4 リトミックにおける集団の振る舞いからみる社会性の発達

市川淳(京都工芸繊維大学), 藤井慶輔(理化学研究所革新知能統合研究センター), 長井隆行(電気通信大学), 大森隆司(玉川大学), 岡夏樹(京都工芸繊維大学)

本研究では、生きるうえでの基盤であり、他者に対して良好な関係を図る態度や行動である社会性を、保育園で観察される集団の振る舞いから定量的に評価することを試みた。子どもが音楽に合わせて自由に活動するリトミックを定期的に撮影し、取得した位置データを分析した。結果、6才ごろの活動はそれより前の月齢の活動に比べて他の子どもに向かって近づく頻度が高いことを確認した。本研究は、発達のサポートを検討する保育士に有益な情報を提供することが期待される。

s01-5 社会的インタラクションの予期が分配の決定の一貫性を高める

上島淳史(東京大学人文社会系研究科/日本学術振興会), 亀田達也(東京大学人文社会系研究科)

限られた資源の分配には、平等主義、功利主義、マキシミズムなどの諸価値が存在する。本研究では、人々が分配に関する価値を折衷的に支持するかあるいは原理的に支持するかが、社会的インタラクションの予期により調整される可能性を検討した。実験の結果、他者との議論を予期することが、特定の分配価値への一貫した支持を高める可能性が示された。

シンポジウム 1 (Sym1)

8月31日(金) 10:20-11:50 会場：B棟 2F グランドホール

身体性・社会性認知神経科学の展望

パネリスト：杉浦元亮（東北大学）・梅田聡（慶應義塾大学）・川崎真弘（筑波大学）

指定討論者：鈴木宏昭（青山学院大学）・開一夫（東京大学）

企画：嶋田総太郎（明治大学）・永井聖剛（立命館大学）

司会：嶋田総太郎（明治大学）

人間の認知能力が身体の物理的および脳内処理に多大に依存していることは、現在の認知科学、心理学、脳科学の分野では十分に浸透してきた。中でもミラーニューロンの発見により、社会性やコミュニケーションの根底に身体表現が介在することが示唆されると、身体性と社会性の認知科学はもはや不可分のものとして捉えられるようになってきた。さらには、人間において特に発達している「心の理論」の能力との関連についても深く掘り下げられるようになっている。本シンポジウムでは、このような身体性と社会性をつなぐ認知神経科学分野で活躍してきた第一線の研究者3名を招き、自己認識、感情と社会性、コミュニケーションなどに関する最新の研究成果を紹介いただくとともに、それらを踏まえた分野全体の今後の発展性と展望について述べて頂く。さらに、これに対して指定討論者からコメントを頂き、全体討論へと広げていく。ここから身体性・社会性認知科学の新たな展開が生まれる契機となることを期待したい。

総会 (M3)

8月31日(金) 12:50-13:50 会場：B棟 2F グランドホール

野島久雄賞 報告セッション

報告者：米田英嗣（青山学院大学）

企画：野島賞選考委員会

日本認知科学会では、2013年度より「野島久雄賞」を設置し、人と人、人とモノ、モノを介したネットワーキングにかかわる研究領域で、「面白い!」と思える卓越した認知科学的研究を行った若手・中堅研究者を顕彰しています。2018年度は1名の方が受賞されることになりました。野島賞は個人に与える賞であり、賞の性格上、なぜその人が受賞したのかがわかりにくい側面があります。そこで、今年度も受賞者に簡単に研究活動の報告をしていただきます。

フェロー講演 (L1)

8月31日(金) 13:50-14:50 会場：B棟 2F グランドホール

認知の科学から教育の実践への展開

講演者：市川伸一（東京大学）・鈴木宏昭（青山学院大学）

司会：三輪和久（名古屋大学）

今年度フェローを受賞された2名の先生方に講演を行なっていただく。お二方とも認知・教育の基礎研究から実践にまで深く関わってこられたことから、「認知の科学から教育の実践への展開」というセッション・テーマを設定した。

「認知科学から大学『改革』を考える

講演者：鈴木宏昭

私はこれまで、主に学習と知識の転移、類推（メタファー）、洞察などのメカニズムを通して、人の理解と学習についてアプローチしてきました。また近年は、ポランニーの影響の下でプロジェクション、プロセスベースの概念などへもアプローチしています。本講演では、これらの研究から得られた知見から、現在多くの大学でなされている「改革」とその姿勢を批判的に検討し、新たな大学像を作るための提案を行うとともに、認知科学の新たな課題にも迫ろうと思います。

「構造抽出から見た認知と教育：知覚，推論，学習をめぐる」

講演者：市川伸一

筆者が行ってきた、パターン知覚、直観的確率推論に関する基礎研究から、個別学習相談（認知カウンセリング）、授業設計論（教えて考えさせる授業）という教育実践研究をまず概観的に紹介する。一見、散漫で広範囲にわたるように見えるが、そこに通底していたのは、「構造抽出」というキーワードだったように思える。

それは、あえて意味や構造を捨象して反復習熟による記憶・学習を追究してきたかつての行動主義的研究から、認知科学が方向転換した流れとも軌を一にしていた。構造抽出が人間の認知、とくに理解を伴った学習の本質だとすると、教育場面でそれがいかに達成されているか（あるいはいないか）ということが、実践上の大きな問題となる。

個別学習相談や学校教育の場に身を置いてみると、学習者や教師にとって、構造抽出という目標は必ずしも自明ではないことがわかる。その視点から、認知科学が教育に何ができるのか、何をすべきかを考えていきたい。

招待講演 : Lynne Reder (Inv2)

8月31日(金) 15:00-15:50 会場 : B棟 2F グランドホール

頻度が記憶に及ぼす効果 : 資源制約理論

講演者 : Lynne Reder (Carnegie Mellon University)

企画 : 仲真紀子 (立命館大学)・林勇吾 (立命館大学)・服部雅史 (立命館大学)

司会 : 仲真紀子 (立命館大学)

情報処理を行う対象をよく知っていればいるほど、ワーキングメモリの容量は少なくて済む。このことを3つの実験により示した。実験1では、漢字の視覚探索課題を用い、親近性が連合学習のしやすさに影響することを明らかにした。実験2では、この効果がワーキングメモリの消費によるものであることを示した。実験3では、算数課題を使って親近性の影響を明らかにした。以上は、ワーキングメモリが刺激の親近性や刺激に関する経験の影響を受けること、また、新奇な材料を迅速に正確に学習するためには対象の弁別訓練が必須であることを示した最初の実験研究の成果である。

オーガナイズドセッション 9 (OS09)

食文化の固有性・共通性から考える翻訳可能性 : 食感のオノマトペ・ワークショップ
を中心に

8月31日(金) 16:00-18:30 会場 : A棟 2F AC231

オーガナイザー : 原田康也 (早稲田大学) , 森下美和 (神戸学院大学) , 平松裕子 (中央大学) ,
福留奈美 (早稲田大学) , 佐良木昌 (明治大学)

OS09-1 食感のオノマトペ・ワークショップ---食文化の固有性・共通性から考える翻訳可能性---

福留奈美(早稲田大学日本語教育研究科), 平松裕子(中央大学), 森下美和(神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部), 原田康也(早稲田大学法学学術院)

食感のオノマトペ・ワークショップでは、「食べて感じて表現する体験」を通して言語表現と食文化理解の接点を探ります。事前申し込みが必要です。定員 30 名・うち一般申し込み枠 20 名・オーガナイザー・公募発表枠 10 名で締切予定。参加希望の方は E-mail にて event@decode.waseda.ac.jp 宛「件名 : OS 食感ワークショップ問合せ」としてご連絡下さい。

OS09-2 日光の沿道における言語景観の調査研究から見える文化交流の可能性と課題

平松裕子(中央大学)

言語景観にはその地域の人々からの訪問者へのメッセージが現れる。世界遺産日光の社寺に向かう駅からの道筋にビーコンを設置しアプリを作成する過程で、コンテンツとして載せる情報の吟味のために地域からの要望や沿道の英語表示調査を実施した。それらに対する外国人の反応を通して、地元と観光客の接点としての言語、文化の伝達に関して、実際に日光に展開された英語表記の中から考察を行う。

OS09-3 日本人英語学習者は未知の英語の食感形容詞を理解できるか？

森下美和(神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部), 原田康也(早稲田大学法学学術院)

日本で英語を学んできた大学生は30分で400~500語ほどの作文をまとめる fluency を獲得し、CEFR で A2 から B1 レベル相当の習熟度となっても、文脈に応じて適切な名詞・動詞・形容詞・副詞を選択し、使用することができない。食感に関わる英語の形容詞に対する親密度は低くても、文脈の中で適切な形容詞を選ぶことができるかもしれない。ここでは簡単な調査の結果を紹介する。

OS09-4 観光地における中国語表記の課題

傅翔(宇都宮大学), 康茗淞(宇都宮大学), 張昭誼(宇都宮大学), 伊藤篤(宇都宮大学), 平松裕子(中央大学), 原田康也(早稲田大学法学学術院), 佐々木陽(宇都宮大学), 羽多野裕之(宇都宮大学)

To improve the satisfaction of the tourists, we have been developing tour guide application in Nikko since 2014. There are many tourists visiting Nikko, among them many travelers from Taiwan and Mainland China. For this reason, the need to explain the tourism resources of Nikko in Chinese is increasing more and more. However, there are several problems in the signs and menus. In this paper, we discuss the problems of Chinese notation in the tourist spot and explain that the correctness of translation for signs is important. Then we propose the points to consider for translation procedure using machine translation to increase the understandability of signs based on Functional Translation Theory.

OS09-5 家族の食事場面における子供の発話開始・保持の技法に関する事例分析

徳永弘子(東京電機大学)

本稿は食事時の家族の食卓場面において、子どもの振る舞いについて検討した事例を報告する。焼き肉をしながら食事をする家族の食卓は、友達同士の食事とは違い、よりインフォーマルな場であること、食べる/話す振る舞いに対してコミュニケーションを重視した社会的なルールが適用されない場において、子どもが自分の発話権を獲得し、保持するためには、視線や、ハンドジェスチャー、ファイヤーなどの技法を用いて達成していることが示された。

OS09-6 食べ物と食感を表すオノマトペ：食文化の感覚的共有における役割

福留奈美(早稲田大学日本語教育研究科)

食べ物のおいしさや好みを伝えようとする時、五感でとらえる食べ物の特性を日本語でどう表現するのか。匂いや風味では比喻表現が多いが、食感では「ふわとろ」「サクサク」等のオノマトペがよく使われる。口触りや歯ごたえ、咀嚼音等を言語化した食感オノマトペは、特定の食べ物と結びつき、体験を通して共有され、他者の感覚を理解する上で重要な役割を持つ。食べ物の話題における感覚表現、特にオノマトペの使用に焦点を当てる。

OS09-7 全体討論：個別言語間の翻訳ギャップは如何に克服されるべきか

佐良木昌(NPO 法人言語研究アソシエーション)

招待講演・食感のオノマトペ・ワークショップ・公募発表を踏まえて、個別言語間の翻訳ギャップは如何に克服されるべきかという観点からコメントと全体討論を行う。ここでは、翻訳に求められるべきこととして、科学的真理と主体的真実・論理的思考と修辭的思考・語るロゴスと訴えるパトスの三軸を基点として検討を加える。

オーガナイズドセッション 10 (OS10)

記号接地問題

8月31日(金) 16:00-18:30 会場: A棟 2F AC232

オーガナイザー: 今井むつみ(慶應義塾大学), 佐治伸郎(鎌倉女子大学)

OS10-1 幼児における色語彙システム構築から考える記号接地問題

今井むつみ(慶應義塾大学)

子どもは何に頼って最初の語を当該の意味領域に接地し、どのように語彙システムを構築していくのだろうか。本発表では子どもが最初の色語を色に接地させ、その後さらに語を色語彙に追加し語彙の再構造化を繰り返しながら、色語彙システムを構築していく過程を検討した縦断研究の結果を提示し、そこから記号接地問題を考察する。

OS10-2 記号接地問題における地とは何か: 視覚的物体の同一性の分析

日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

記号接地問題において、最大の問題の一つは、地(Ground)あるいは非地とは何かという問題である。本研究では、情報の伝達経路における変換に抛らず推論が可能な性質を、地の候補として提案する。異なる2時点の複数の点の同一性を論じることで、視覚的オブジェクトの一種が変換群の可換性により特徴づけられることを示す。これにより単に“感覚器を通じた情報を地”とするナイーブな議論を超えた地の定式化を論じる。

OS10-3 神経心理学的視点からみた記号接地問題

大槻美佳(北海道大学), 山ノ井高洋(北海学園大学)

各種感覚情報は、従来、段階を追って処理され、最終的に概念(意味野)に到達し、言語や行為などの反応が引き出されると推測されていた。しかし、昨今の知見では、感覚情報処理は、処理の初期段階から、既に、対象のカテゴリ化や意味野の賦活が開始されていることが推測されている。本発表では、脳損傷によって、言語機能の‘壊れ方’にどのようなパターンがあり得るのかを検討し、記号接地問題に関わる問題を考察する。

OS10-4 記号接地問題から記号創発問題への移行の必要性;ダイナミクスとしての記号と認知

谷口忠大(立命館大学)

認知システム内のアモーダルな記号表現を暗黙的に所与とした記号接地問題は設問自体が適切な解の存在しない問題であり、それを問いとして議論を開始すること自体に問題がある。本講演では記号創発システム、及び、記号創発問題について指摘し、認知と社会両方を包括する現実的な記号接地の方向について論じる。また、そのような問題に対する構成論的な議論の萌芽として、記号創発ロボティクスの取り組みに関して概説する。

OS10-5 意味の共有感覚と記号接地問題

佐治伸郎(鎌倉女子大学)

本発表では、記号接地問題が言語習得研究に何をもたらしたかを整理したうえで、その現代的な意義を再考する。特に記号習得・意味習得の観点から意味の共有感覚の問題を中心に議論する。記号形式が間主観的な意味に接地するためには、我々が記号以前に他者と意味の共有感覚を得る術をどのように持つかを捉えなければならない。この共有感覚を得る際に我々が用いる道具立てを整理しそれぞれが記号接地にどのように寄与するかを考える。

OS10-6 構造と意味を繋ぐ言語システムによる記号の接地・脱接地

橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学)

記号接地は、一人称性・文脈依存性の強い経験に直接結びつく proto 記号から、一人称性を持ちつつ抽象化され、構造と意味を繋ぐシステムとしての言語における構造構築の操作対象になることと考える。また言語システムは、類似性・随伴性に基づく拡張、構造を通した新しい概念構築により、直接経験から離れつつ独自の意味を創造する脱接地を可能にする。本発表ではこの接地・脱接地を進化と脳構造の観点から議論したい。

OS10-7 パネルディスカッション：記号接地問題

今井むつみ(慶應義塾大学), 日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学), 大槻美佳(北海道大学), 谷口忠大(立命館大学), 佐治伸郎(鎌倉女子大学), 橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学)

記号接地問題に対する立場は研究分野やアプローチの仕方により多様であるが、その多様な研究者が一堂に会し充分な議論を交わすことができる場は多くはない。パネルディスカッションではディスカッションはフロアを交えたラウンドテーブルのような形式にし、それぞれの研究者が考える「記号接地問題」とは何か、何が未解決の問題なのかを具体的なテーマを設定しそれぞれの考え方を重ねることで聴衆に有益な情報を提供したい。

オーガナイズドセッション 11 (OS11)**プロジェクション・サイエンスの深化と融合**

8月31日(金) 16:00-18:30 会場：A棟 2F AS251

オーガナイザー：川合伸幸(名古屋大学), 米田英嗣(青山学院大学)

OS11-1 プロジェクション・サイエンスと Psychosemantics

戸田山和久(名古屋大学情報学研究科)

認知科学はこれまで、外部からの入力があるどのように処理、貯蔵、利用されるかを主に研究してきたが、人は作り上げた表象をもう一度自らの外に投射＝プロジェクションする。しかし、このような過程はプロジェクション・サイエンスの専売ではない。心的表象がいかにして世界の中の何かを「意味する」ことができるのか、というのは哲学の大問題で、psychosemantics と呼ばれている。本講演では、この問題について論ずる。

OS11-2 主観的な重力方向の反転を促進させる因子の検討

小鷹研理(名古屋市立大学芸術工学研究科)

主観的な重力反転を促進する因子を同定することは、幽体離脱の認知機構の解明につながるだけでなく、Virtual Reality 空間において、アバターに身体のイメージを投射するうえでの設計論を検討するうえでも重要である。本研究では、HMD 環境を使った二つの被験者実験を行い、被験者の姿勢と、呈示されるアバターの身体の向きが、重力反転の生起しやすさに影響するという結果を得たので、これを報告する。

OS11-3 「蟹の錯覚」における主体感の変調

佐藤優太郎(情報科学芸術大学院大学), 石原由貴(名古屋市立大学芸術工学研究科), 小鷹研理(名古屋市立大学芸術工学研究科)

「蟹の錯覚」は、本研究室が考案した、両手交差によって身体の自己感へ影響を与える錯覚である。一般的な錯覚は、実際の身体をマスクすることで主体感や所有感に影響を与える。一方、自身の身体はむき出しのまま行う「蟹の錯覚」においても、主体感や所有感へ影響を示唆する反応が確認されたことから、「蟹の錯覚」は特殊な位置付けの錯覚であるといえる。本稿では、「蟹の錯覚」における視覚刺激に対する運動反応を主体感の変調の指標とし、実験の結果・考察を報告する。

OS11-4 運動模倣における自閉スペクトラム症患者の自己視点戦略

川崎真弘(筑波大学システム情報系知能機能工学域), 米田英嗣(青山学院大学教育人間科学部教育学科), 船曳康子(京都大学人間・環境学研究科)

本研究は自閉スペクトラム症 (ASD) 患者と定型発達者の運動模倣の方略の違いを特定することを目的とした。運動模倣時に反応時間と脳波を計測した。聞き取り調査の結果、運動模倣時に ASD 患者は心的回転、定型発達者は視点取得の方略を用いることが分かった。この方略の違いは反応時間と脳波の結果からも確認できた。以上の結果は、他者視点で模倣する定型発達者とは違い、ASD 患者が他者の行動を自己視点に合わせるプロジェクションを用いて模倣することを示唆する。

OS11-5 感情が含まれた他者視線の印象形成に社交不安傾向が与える影響

都地裕樹(明治大学理工学部/日本学術振興会), 嶋田総太郎(明治大学理工学部)

社交不安症者は他者の表情を脅威として処理を行う偏向が報告されており、他者視線は社交不安を引き起こすことが知られている。本研究では、感情の強度を変化させた幸せ、嫌悪の感情を含む他者視線の印象形成に社交不安傾向が与える影響について調査を行ったところ、低社交不安傾向者は嫌悪の感情が含まれる他者視線に対して、高社交不安傾向者はあいまいな幸せの感情や嫌悪の感情が含まれる他者視線に対してネガティブな印象を抱くことを明らかにした。

OS11-6 投射の共有と遷移—二次創作のプロジェクション科学—

久保 (川合) 南海子(愛知淑徳大学)

本研究では、いわゆるオタクの創作活動として広くみられる「二次創作」を題材に、異投射と虚投射としてそれらを解釈することで、プロジェクションについて考察する。二次創作の作者と読者の相互の交流は活発であり、双方向のプロセスを経ることで個人の異投射はより強化され、多くの人で共有される虚投射となる。これまで投射の共有や遷移についてあまり着目されてこなかったが、それらの視点から宗教や芸術活動などについても検討する。

OS11-7 プロジェクション・サイエンスの深化と融合

川合伸幸(名古屋大学情報学研究科), 米田英嗣(青山学院大学教育人間科学部教育学科), 戸田山和久(名古屋大学情報学研究科), 鈴木宏昭(青山学院大学教育人間科学部), 嶋田総太郎(明治大学理工学部), 久保 (川合) 南海子(愛知淑徳大学), 小鷹研理(名古屋市立大学芸術工学研究科)

・セッションを開催した。2017年は100人を超える参加者があり、プロジェクション・サイエンスに関心が集まりつつある。これまでの企画は、プロジェクション・サイエンスとは何か、なにを目指すものかを説明するものであったが、今回のオーガナイズド・セッションでは、哲学者による招待講演とパネルディスカッションを企画し、認知科学以外の領域との研究交流をはかり、哲学や社会学との融合を目指す。

オーガナイズドセッション 12 (OS12)

心を揺さぶる, 社会を動かすエージェント科学の最先端

8月31日(金) 16:00-18:30 会場: A棟 2F AS252

オーガナイザー: 高橋英之(大阪大学), 大澤博隆(筑波大学), 日永田智絵(電気通信大学),
渡辺美紀(大阪大学)

OS12-1 人とボットのハイブリッド・ネットワークによる協調行動の向上

白土寛和(イェール大学)

社会的ネットワークの中で、どのように個人が集団の協調行動を向上させることができるかを調べた。4000人ほどの実験参加者を、ボットとともに社会的ネットワークに埋め込み、オンライン上で協調行動のゲームをさせた。その上で、ボットのランダムな振る舞いの度合いとそのネットワーク内の位置を操作した。その結果、ボットがある程度のランダムに振る舞うことで、集団の協調行動が全体最適に至ることがわかった。

OS12-2 よりよいインタラクションのための脳計測に基づく認知状態の推定

森川幸治(パナソニック)

これまでユーザと機器の関係は、主にユーザの機器操作によって成立していたが、操作なしで機器側に意図や状態が伝われば、より幅広い関係が構築可能である。本講演では、脳波を始めとする生体信号解析によって、ユーザの認知状態、例えば操作意思、聞こえや見やすさ等の感覚、興味、などが推定できる可能性があることを示す。これらを通して、日常生活における生体信号計測の有用性、実現可能性について議論したい。

OS12-3 認知モデルをヴァーチャル世界に接地させるエージェント開発手法

森田純哉(静岡大学情報学部), 長島一真(静岡大学情報学部), 竹内勇剛(静岡大学創造科学技術大学院)

本研究では、ACT-Rと3Dゲームエンジンがサーバを介して結合する階層的アーキテクチャを構築し、環境探索を行うエージェントを構築した。結果、認知モデルのパラメータによる行動の差異、脳と身体の結合に関わるエラーなどの現象を出現させた。これらより、3D空間における人間を模倣するエージェントの構築において、認知モデリングの手法を適用することが有用であることが示唆された。

OS12-4 円図形を介した視覚的同調動作における主従関係の相関関数による分析

入江諒(金沢工業大学 工学研究科 電気電子工学専攻), 金野武司(金沢工業大学工学部 電気電子工学科)

人とエージェントの自然な身体的コミュニケーションの成立には、二者間の動きのダイナミクスが重要な鍵を握る。特にリーダー・フォロワーといった役割の交代=ターンテイキングが、相手に人らしさを感じさせる大きな要因になると考えられる。本研究では円図形を介した二者間の視覚的インタラクション実験と、ターンテイキングの特徴を取り出す指標の作成を通じて、相手を人であると判断する要因は、相手との同調傾向を前提としたターンテイキングにあることを明らかにする。

OS12-5 話しかけ場面における相手の受容度に応じた接近行動の分析

坂本孝丈(静岡大学創造科学技術大学院), 吉岡源太(静岡大学創造科学技術大学院), 竹内勇剛(静岡大学創造科学技術大学院)

本研究では, コミュニケーションの初期段階におけるインタラクションのモデルを提案し, 実際の人の接近行動についてシミュレーションを通して検討を行った. 具体的には, 人の話しかけ場面の行動を観察する実験のデータを分析し, 提案モデルによる接近行動の再現を試みた. 参加者は相手の正面方向を回避しながら接近する行動を示しており, これは接近行動に対して示される相手の反応において, 相手の内部状態が明示化されやすい状況をつくるためである可能性が示唆された.

OS12-6 身体部位のエージェント化による自己認識拡張と行動変容

齋藤利樹(筑波大学), 大澤博隆(筑波大学)

本研究では身体の一部を擬人化し, エージェント化することによってユーザの行動と認知がどのように影響を受けるか評価した. 手の甲に face scale に基づいた顔のイラストを投影することで擬人化を促進するデバイスを作成し, 手を擬人化し, 物体を移動させるタスクを行わせ, 目や口の投影条件 (エージェント化), 爆弾の投影条件 (感情変化) メーター条件 (情報変化) のそれぞれを比較し, ユーザーの動きと認知の変化を調べた.

OS12-7 サービスロボットに他者モデルは必要か?

日永田智絵(電気通信大学), 長井隆行(電気通信大学)

一般にサービスを提供する場合には, 顧客に対する「おもてなしの心」が重要であると言われる. 「おもてなしの心」は他者モデルに大きく関わっているため, サービスロボットにも他者モデルが求められると考えるのが, 最も単純で直観的であるが, そもそも他者モデル自体が十分に解明されておらず, それをどのように実現できるかが分からない. 本稿では, 筆者らの他者モデルに関連する研究を概観しつつ, サービスロボットと他者モデルの関係を整理したい.

OS12-8 パネルディスカッション

高橋英之(全員)

心を揺さぶり, 社会を動かすエージェントの設計論について, 心理学や神経科学, 認知科学などの基礎的な知見の現状と, それらの知見がどのように現実的な形で産業応用に結びつくのかについて, 参加者やフロアを交えて議論を行う.

口頭発表 2 : 問題解決 (sO2)

9月1日(土) 8:40-10:10 会場 : A棟 2F AC230

座長 : 林勇吾 (立命館大学)

sO2-1 異なる研究アプローチが従属変数の選択へ与える影響

松室美紀(立命館大学情報理工学部), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科)

本研究は, データ分析を行う際の, 従属変数の選択に焦点を当てている. 特に, 特定の仮説に基づき分析を行う仮説駆動アプローチと, 分析結果から仮説を構築するデータ駆動アプローチの影響を検討した. 実験の結果, 仮説駆動アプローチを用いると, データを加工し, 仮説の検証に適したデータを自ら作成するが, 類似した種類のデータを分析に用いることが示された. 一方, データ駆動アプローチを用いることは, 様々なデータの分析につながるが, データの加工は促進しない.

sO2-2 「内なる他者の意見」を取り入れるには?:個人内で集合知を生み出す手法の問題点と改善策

藤崎樹(東京大学総合文化研究科), 本田秀仁(安田女子大学心理学部ビジネス心理学科), 植田一博(東京大学総合文化研究科)

近年, 集合知を個人内で生み出す手法が提案されている. Fujisaki et al. (2017) は, 問題に対し, 自身の推定に加え, 世間一般の考えを想像し再度推定させるという手法を提案している. しかし, 最終的な推定の際, この世間一般の推定は殆ど無視されてしまう. そこで本研究では, 最終的な推定の際に, この推定もまた自身が生み出したものであることを強調する教示を与えた. 結果, 世間一般の推定が取り入れられるようになることが明らかになった.

sO2-3 変則的挙動に対する記憶ベース方略の ACT-R モデル検討

松林翔太(名古屋大学情報科学研究科), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科), 寺井仁(近畿大学産業理工学部)

システム障害やエージェントの想定外の動作などの変則的挙動を予測するために適用される記憶ベース方略について, 心理実験および ACT-R モデルシミュレーションを行った. 実験の結果, 記憶ベース方略では正則挙動を見せる事例を記憶しないことにより, 複雑さが高い課題において有効に用いられることが示唆された. 実験で得られたデータをもとに ACT-R モデルシミュレーションを実施し, 変則的挙動の予測において, 記憶ベース方略で行われる処理を明らかにする.

sO2-4 自由度の時間的分化としての熟達化 : 投球動作の分析

鳥居拓馬(北陸先端科学技術大学院大学), 日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

私たち人がある課題に何度も繰り返し取り組むうちに, その課題をより短時間でより正確に処理できるようになることは熟達化と呼ばれる. 著者らの先行研究を踏まえ, 身体動作を伴う課題では, 正確さを要する課題の要所で身体の高自由度を小さくするように, 動作全体の自由度を組織化するように運動制御の変容が生じるという熟達化に関する仮説を著者らは立てた. 本発表では著者らの仮説を検討すべく行った5日間の投球動作の分析結果を報告する.

口頭発表 3 : 記憶・言語・動物 (s03)

9月1日(土) 10:20-11:50 会場 : A棟 2F AC230

座長 : 森田純哉 (静岡大学)

s03-1 認知アーキテクチャを利用したことば遊びにおける音韻意識のモデル化

西川純平(静岡大学情報学部), 森田純哉(静岡大学情報学部)

言語能力に関わる脳機能障害への注目を背景に, 言語の習得支援に関する研究の需要が高まっている。本研究では, 認知アーキテクチャを用いてことば遊びを行う認知モデルを構築し, シミュレーションにより言語習得に必要な音韻意識のモデル化を試みた。さらに, 認知アーキテクチャのパラメータを調整することによって, しりとりを活用した音韻意識の訓練が実現可能であるか検討した。

s03-2 神経意味論における分散表象と意味中枢—fMRI メタ分析のために

赤間啓之(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)

人間の言語活動をめぐり, 脳機能イメージングの領域に機械学習を適用し, 言葉の意味処理の神経基盤を求める研究は, 脳の中に辞書を地図として描く段階にまで進んでいる。しかし, こうした研究は現在, 個人差の捉え方と意味処理中枢の位置をめぐり, 大きな限界に直面している。本研究では, Mitchell et al の Science 論文に始まる計算神経言語学的アプローチを新たな視点で再分析することで, この限界を扱いうる具体的なメタ分析の例を提示する。

s03-3 画像刺激による虚再認の生起—DRM パラダイムによる検討—

神浦駿吾(大阪府立大学人間社会システム科学研究科), 佐藤裕(徳島大学社会産業理工学研究部)

我々の記憶において実際に起こっていないことを誤って想起することを虚記憶と呼ぶ。本研究では, 虚記憶の生起を検証する DRM パラダイム下において視覚イメージ刺激に対して虚記憶が生じるのかどうかを検討した。実験の結果, 画像刺激に対する虚再認はほとんど生起せず, 文字刺激との比較において生起率がより低いことが確認され, 虚再認においても画像優位性が確認されることが示唆された。

s03-4 日英通訳体験による脳賦活様態の変化 : 6 年間の縦断研究

田浦秀幸(立命館大学)

言語間距離の遠い日本語と英語を対象言語とする通訳になったばかりの新米通訳者を 6 年間(22~28 歳)追跡し, 英語力・ナラティブ力と脳賦活度合いの関連性を調査した。その結果, 大学卒業時に既に高い英語力を持つ新米通訳者も 6 年間の内に語彙密度や流暢さは向上し, 脳賦活もより堪能な母語賦活を抑えることで第 2 言語にリソースを多く割り当てる経済的な賦活様態に変化してきていることが判明した。

s03-5 ニホンザルの闘争遊びにおける行動協調メカニズムの検討

壹岐朔巳(総合研究大学院大学先導科学研究科), 長谷川寿一(東京大学総合文化研究科)

「噛みつき」などの攻撃動作が使用される闘争遊びは, 喧嘩にエスカレートしてしまうことがある。闘争遊びを行う動物は, 互いに行動を協調させることによって喧嘩の発生を防いでいると考えられる。ニホンザルの闘争遊びを対象とした本研究の分析結果から, (A) 相互的な参与枠組みの確立, (B) 対称的な行動, (C) インタラクションへの継続

的な従事といったメカニズムに基づいて、「攻撃時間の調整-攻撃の受け入れ」という相補的協調が行われている可能性が示唆された。

ポスターセッション 2 (sP2)

9月1日(土) 12:00-14:30 会場: B棟 2F イベントホール

sP2-1 学習者のワーキングメモリ容量が無関連音声効果に及ぼす影響

高橋麻衣子(東京大学), 石川実佳(名古屋大学), 清河幸子(名古屋大学)

本研究では、背景音の提示が学習成績に干渉を及ぼす程度が学習者のワーキングメモリ容量によって異なるのかを検討した。器楽音と歌詞の有無を操作した背景音が、読解課題(実験1)、系列再生課題(実験2)、見本照合課題(実験3)に及ぼす影響を検討したところ、読解課題において、ワーキングメモリ容量の小さい学習者は背景音の提示によって成績が低下するが、他の課題においてはワーキングメモリ容量と背景音提示の干渉の程度に関連がないことが示された。

sP2-2 物語文における年齢と平均発話長の推移

稲葉みどり(愛知教育大学)

本研究では、日本語の発達過程を英語の発達過程と比較した。日本語を第一言語とする子どもと英語を第一言語とする子どもの物語文(Frog Story)を対象として、1) 発話数の年齢による推移、2) 形態素数の年齢による推移、3) 平均発話長から見た発達過程等を比較した。結果から、幾つかの類似点と相違点が明らかになった。また、平均発話長(MLU)は分析方法によって数値に大きな差が出ることが分かった。

sP2-3 におい手がかりによって想起される自伝的記憶の特徴

後藤靖宏(北星学園大学文学部 心理・応用コミュニケーション学科)

ブルースト現象の特徴を調べるために、生起率、自伝的記憶、におい手がかり、および想起状況に着目し、においによって想起された記憶を幅広く収集した。大学生の1週間分の記憶199ケースを分類したところ、35%強に当たる70ケースがブルースト現象に分類され、半数の人が1週間に1回以上体験していた。内容は11カテゴリに分類され、より快で重要性の高い、鮮明な思い出が多く手がかりとなったにおいは6カテゴリに分類され、快でかつ強いにおいであった。

sP2-4 自動化システムとの協同と人間との協同における課題委託に関する実験的検討

前東晃礼(株式会社 KDDI 総合研究所), 三輪和久(名古屋大学情報学研究科), 小島一晃(帝京大学ラーニングテクノロジー開発室)

本研究では、自動化システムとの協同と人間との協同における課題委託について実験的検討を行った。実験では、参加者は、パートナーと追従課題を行った。パートナーは自動化システム(システム条件)、または人間(ヒューマン条件)であると教示された。しかし実際には、全ての参加者は自動化システムと課題を行った。実験の結果、システム条件の参加者は、追従パフォーマンスの変化に鋭敏であり、課題委託の適切性が高かった。この結果は、先行研究に基づいて議論された。

sP2-5 ユーモアを生み出すための「間」－ボケとツッコミのタイミングに関する考察

宿利由希子(神戸大学), Gøran Vaage(神戸女学院大学), 林良子(神戸大学), 定延利之(京都大学)

本発表では、日本語の対話において相手から面白い話を聞いた場合、学習者はその直後に応答しがちであること、また、母語話者より早い発話タイミングでの応答を好みがちであることを実験で示す。この結果は、「間」を単に「先行発話を解釈し、応答発話を準備する時間」ととらえては理解できない。少なくとも「間」の一部は、たとえば「束の間の沈黙考」「たじろぎ」「態勢の立て直し」のような、不作為の行動と考える必要がある。

sP2-6 自然風景の中のヘビは素早く正確に検出されるのか？－フリッカー変化検出課題を用いたヘビ検出の検討

邱華琛(名古屋大学情報学研究科), 川合伸幸(名古屋大学情報学研究科)

Snake is a serious threat to humans for the past millions of years so that humans became extremely sensitive to snakes during the long evolution period. The present experiment shows that humans and non-human primates can detect snake pictures more quickly and accurately than those of other animals. Here we performed a flicker paradigm task to compare the accuracy and speed of detection between two types of the target stimuli, which consisted of snake pictures and lizard pictures. We find that the snake target stimuli can be detected more rapidly and accurately than lizard target stimuli. Our study shows that participants were more sensitive to snake pictures during the flicker paradigm task and supports the Snake Detection Theory.

sP2-7 コスチューム配色がもたらす立ち技格闘技選手のイメージ－観客は、赤グローブに黒トランクで格好良いのが好き？－

林美都子(北海道教育大学), 佐々木基(北海道教育大学函館キャンパス)

本研究では、立ち技格闘技の人気を復権するため、ポスター等で一般観客にアピールする状況を想定し、コスチュームの配色で伝わる選手の個性や印象を検討した。大学生 281 名に調査を行った。格闘家イメージ尺度は、実力を核に据えた「格闘技家らしさ」と「優美さ」、「愛嬌」で構成された。配色別分散分析の結果、赤グローブに黒トランクがもっとも格闘技家らしく、青グローブに白トランクで優美なイメージ、黄色トランクでは愛嬌がアピールされることが示された。

sP2-8 美術家の創作過程の検討：美術創作における「ずらし」に着目した分析

横地早和子(東京未来大学), 岡田猛(東京大学教育学研究科情報学環)

本研究では、若手と熟達した美術家の創作活動における「ずらし」に着目し、作品コンセプトや表現方法などを新たに生成する際の認知過程について検討することを目的とした。分析結果からは、若手美術家が表現方法を変えずにモチーフを変える対象のずらしを行うなど熟達者と同じずらしを用いる一方、表現のための方法も主題もすべて一気に変えてしまう傾向があるなど、若手が熟達者と異なる方法で作品を変化させていることが分かった。

sP2-9 A Human-inspired Pain Sensing System to Recognize Difference between Superficial and Deep Pain for Personal Care Robot Safety

Tanyaporn Pungrasmi(パナソニック株式会社プロダクト解析センター), 島岡優策(パナソニック株式会社プロダクト解析センター), 岡本球夫(パナソニック株式会社 プロダクト解析センター), 渡邊竜司(パナソニック株式会社プロダクト解析センター)

In this paper, we introduce the concept of a human-inspired pain sensing system, imitating the sensing location of mechanical nociceptors in human skin (superficial somatic pain) and skeletal muscle (deep somatic pain) for personal care robot safety application. We expect that the system will not only measure the pain for personal care robot safety evaluation, but also show the difference between these two kinds of pain due to various contact conditions. In this study, we developed the arm prototype which imitates human nociceptor mechanism, and verified our pain sensing concept by conducting experiment with various contact situations.

sP2-10 日常的表現における面白さと皮肉の関係の検討

中村太戯留(慶應義塾大学)

ユーモアは皮肉表現からも生じることが知られている。しかし、ユーモアを生じない皮肉表現もあり、ユーモアを生じる条件は不明である。本研究では、日常的表現を用いて、ユーモアと皮肉の関係を実証的に検討することを試みた。意味分析の結果、ユーモアを生じた群では「次回にやり直しができる程度の悪い出来事」が関与するのに対して、ユーモアを生じない群では「やり直しの出来ない深刻な悪い出来事」が関与するように見える。

sP2-11 非可聴音刺激による充実時程錯覚への影響

阿部慶賀(岐阜聖徳学園大学)

本研究では、聴覚刺激による充実時程錯覚が非可聴領域の音源を用いた場合にも生じるかを検討した。実験では、心拍と同程度のペースの断続的なビープ音と、その倍速のペースのビープ音を用意し、それぞれ可聴領域の音域と、非可聴領域の音域で提示し、主観的な経過時間の長さを報告させた。その結果、可聴領域のみ、充実時程錯覚が見られた。

sP2-12 ボケ役、ツッコミ役の発話タイミングからみる面白さに対する認識 —日本語母語話者、日本語学習者、中国語母語話者の比較から—

羅希(京都大学), 定延利之(京都大学)

話の面白さが、発話のタイミング次第で活かされも殺されもするという事は、経験的に知られている。だが、従来の研究は、話の内容の面白さの解明に集中しがちであった。この発表は、話の面白さを活かす発話タイミングに光を当て、対話音声合成ツールを利用することによって、これが画一的なものではなく、言語間で（つまり日本語と中国語で）、また話の「型」ごとに違っていることを示し、その奥深さの一端を示そうとするものである。

sP2-13 (欠番)

sP2-14 熟練者のピアレッスンにおける指導介入方法の研究 ―介入タイミングと介入資源への着目―

山本敦(早稲田大学人間科学研究科), 古山宣洋(早稲田大学人間科学学術院)

熟練者のピアレッスンでは、演奏を中断すべき介入と継続すべき介入とが、教師と生徒の両者によって適切に区別・調整されている。この調整方略を明らかにするために、音大生のレッスンをビデオ撮影し、介入-応答のパターンを分析した。その結果、介入タイミング（生徒の演奏音と介入発話・演奏の時間的競合の有無）と介入の内容（介入演奏と現在の演奏との関係、指示詞・呼びかけの使用）が資源として用いられている可能性が示唆された。

sP2-15 ロボットは道徳的な行為主体になり得るか、〈個性〉を持ち得るか

橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学), 金野武司(金沢工業大学工学部電気電子工学科), 長滝祥司(中京大学), 大平英樹(名古屋大学), 入江諒(金沢工業大学 工学研究科 電気電子工学専攻), 河上章太郎(金沢工業大学工学研究科電気電子工学専攻), 佐藤拓磨(金沢工業大学), 加藤樹里(金沢工業大学), 柏端達也(慶應義塾大学), 三浦俊彦(東京大学), 久保田進一(金沢大学), 柴田正良(金沢大学)

本稿ではまず、ロボットが人間と共生するためには、ロボットは道徳的な行為主体であり、そのためには、ロボットが代替不可能性を持つ必要があり、それはとりもなおさずロボットが〈個性〉を持つことである、ということ論じる。このテーゼに基づき、ロボットと人間が身体的に同調するようなインタラクション（身体的調整運動タスク）により、ロボットが道徳的主体であると人間が判断することに影響があるかどうかを調べる実験を構築する。

sP2-16 会話分析の相互作用とその役割に基づく対話生成に関する一考察

太田博三(放送大学 教養学部)

昨今、自然言語処理における対話システムや対話生成が注目されている。チャットボットのコールセンターへの普及により、正確な人間性な対話応答が求められている。一方、社会学のエスノメソロジーや談話分析・会話分析における定性的な相互行為は有益である。そこで、もう一度、国立国語研究所の提供する日本語学習者会話データベースを用いて、効果を検証し対話破綻の傾向や対話生成に適用することを目指した考察である。

sP2-17 パズル操作の測定・分析による思考の推定

山口琢(フリー), 小林龍生(スコレックス), 高橋慈子(株式会社ハーティネス), 大場みち子(公立はこだて未来大学)

パズルを適切に設計して、パズルを解く操作を測定・分析することで、プレイヤーの思考を推定する手法を提案する。パズルとは「人に考えさせるコンピューター・アプリケーション」である。例えば、ジグソー・テキストは、ランダムに並んだ文を、プレイヤーが適切と考える順序に並べ替えて完成させる、文章のジグソー・パズルである。時間的に近くで操作対象となるピース間には何かの関係があると考えられ、操作の時間的な共起分析が、パズル操作の分析に有効と考えられる。

sP2-18 アイスホッケー熟達過程における発話の変容過程の可視化

山田雅之(星槎大学), 児玉謙太郎(神奈川大学), 清水大地(東京大学教育学研究科), 大海悠太(東京工芸大学)

本研究はアイスホッケー熟達過程における発話の変容過程を可視化した。分析には議論可視化システムであるKBDeXを用いてネットワーク分析を実施した。8日分の発話データを分析した結果、次数中心性が大きく変化する

箇所ではスキルの獲得や練習メニューの変容が起きていた。本研究の結果から、コーチはスキルの獲得に応じて支援を変容させていることが示唆され、これらの変容を KBDeX によって閲覧可能であることが示唆された。

sP2-19 プロトコル分析を用いた芸術鑑賞の認知過程の検討 – 作品創作プロセスに対する鑑賞者の認識に焦点を当てて –

松本一樹(東京大学教育学研究科), 岡田猛(東京大学教育学研究科情報学環)

芸術鑑賞における認知過程は包括的なモデル化が試みられている。本研究では、その中でも創作プロセスの認識という近年注目され始めた要素について、それが美的印象やその他の認知要素とどのような関係性にあるか、介入(創作経験)を通じて間接的に、心理尺度と発話データを用いて検討した。その結果、創作経験は作品の種類にかかわらず美的印象を促進する効果を持ち、かつその過程の中で創作プロセスの認識が重要な役割を果たしている可能性が示された。

sP2-20 ブレイクダンスにおける新奇な表現の創作過程

清水大地(東京大学教育学研究科), 平島雅也(情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター), 岡田猛(東京大学教育学研究科情報学環)

上演芸術において演者はどのように優れた作品を生み出すのか。本研究では、ブレイクダンスの熟達者に対する1週間に渡るケーススタディを実施し、その新奇な技術の創作過程を捉えた。アイデアの発話データ・アイデアの新奇性の自己評価データ・身体運動データ等により創作過程を検証したところ、内的制約を大きく変化させることで新奇な技術を生成したこと、上記の変化にアイデアを具現化する過程が関わっていたことが示唆された。

sP2-21 ランニングコーチから指導を受けた球技選手の疾走に対する認知変容の研究

山田雅敏(常葉大学 健康プロデュース学部), 里大輔(SATO SPEED Inc.), 遠山紗矢香(静岡大学情報学部), 竹内勇剛(静岡大学創造科学技術大学院)

本研究では、ランニングコーチから指導を受けたドイツリーグに所属するサッカー選手の言語報告に注目し、疾走に対する認知変容の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果、(1)新しい疾走動作の指導を受けた際の気づき、(2)腕振りの動作による疾走スピードの体感、(3)腕振りの動作による足(下肢)の動作との連動、が共通した特徴として示された。以上、身体と言語の関係性が明らかになり、言語報告から熟達度合を予測できる可能性が示唆された。

sP2-22 「触る」ことの認知的動機と社会的動機: 視覚障害者の歩行訓練場面における事例から

西澤弘行(常磐大学), 佐藤貴宣(日本学術振興会/京都大学), 坂井田瑠衣(国立情報学研究所), 南保輔(成城大学)

Through discussion with a visually impaired person/co-author of this study and observation of his interactions with an orientation and mobility specialist from the perspective of ethnomethodology and conversation analysis, this paper demonstrates that the cognitive and social motivations for touching by the visually impaired are a possible basis for co-constructing knowledge of the surrounding environment with others.

sP2-23 性格特性を用いた顔の観察行動の予測モデル

ジョキョウテツ(千葉大学融合理工学府), 松香敏彦(千葉大学文学部)

顔の印象評定に関する先行研究では、顔への観察行動は観察者自身の性格特性に強く影響されていることが示されている。これらの結果から、観察行動を用いて観察者の性格特性を予測することが可能だと考えられる。この可能性を検討するため、先行研究と同様の顔画像への印象評定課題を用いた実験をおこなった。具体的には、アイトラッカーを用いて観察行動である眼球運動データ、および観察者の性格特性を収集し、階層的ベイズモデルを用いたデータ分析をおこなった。

sP2-24 井山裕太氏の研究

伊藤毅志(電気通信大学情報理工学研究科)

This research is an interview with Mr. Yuuta Igawa who is a top-player of Go and analyzing the content that he said about himself in the first person viewpoint. It was also confirmed that he is a player with high self-analysis ability and can talk his thought objectively. The verbal data shows the difference between Go and Shogi and the common point as a top player.

sP2-25 即興演劇における予期的気づきを探る –セリフと視線行動の関係に着目して

ヒュース由美(東京大学学際情報学府), 工藤和俊(東京大学情報学環学際情報学府)

即興演劇は、事前の相談や決められたセリフがなく、共演者がどんなアイデアを持ち、自分に対してどのようなアプローチを仕掛けてくるか全く分からない環境の中で、即興的に劇を創作する芸術である。本研究では、実際の即興演劇ライブを撮影したビデオ映像のデータをもとに、セリフと視線行動の関係を分析した結果、俳優たちは登場人物を演じながら、劇の重要なポイントで相手のサインを読み取る非言語コミュニケーションを行っていることが明らかになった。

sP2-26 未完成図における図の形式が文章理解に与える影響

福丸歩実(千葉工業大学), 山崎治(千葉工業大学)

本研究では、文章に未完成の図を添え、実験参加者がその図へ情報を書き加える方法に着目し、文章理解に与える効果を調べる心理実験を行った。さらに、未完成図が与える文章理解への効果が、図の形式(例えばグラフ/イラストなど)によって異なるか検証を行った。実験は、図の形式条件(軸/棒グラフ/イラスト)×未完成図の段階条件(完成図/内容ぬき/用語ぬき)の2要因3×3水準参加者間計画で実験を実施した。統制条件として、図なし条件を設けた。

sP2-27 大学入試に資する学びを目指した高等学校数学科の協調学習の実践と遅延評価方法の検討

大村勝久(静岡県立浜松北高等学校), 遠山紗矢香(静岡大学情報学部), 松澤芳昭(青山学院大学)

卒業後に4年制の大学に入学できる高校生を対象に、生徒が協調学習で学んだことが学習後どのような期間において保持されるのかを検討した。数学3の複素数の問題を知識構成型ジグソー法で学んだ高校2年生76名(Aクラス/Bクラス)に対して、協調学習直後(Aクラスは当日, Bクラスは4日後)に加えて、1ヵ月後および3ヵ月後の2度の遅延テストを実施した。その結果、最も正答者が多かったのはAクラスでは事後テスト, Bクラスでは遅延テスト2回目となった。

sP2-28 タイトルが内容への期待および理解へもたらすもの

石川悟(北星学園大学文学部)

説明資料に事前に与えられたタイトルが、説明内容に対し抱かせる期待及び、内容の理解や説明に対する満足度をどのように導くのか、探索的に検討を加えた。実験参加者に異なるタイトルを提示した後に説明を聞かせたところ、タイトルの違いにより異なる事前期待が生じた。また、事象の全般にわたった説明が聞ける、という期待は、事後評価や説明内容の理解の程度、あるいは説明に対する満足の程度を促進することが示唆された。

sP2-29 選択肢提示タイミングによる選択的注意の誘導が L2 音知覚に与える効果

川崎貴子(法政大学), 田中邦佳(法政大学), 竹内雅樹(理化学研究所脳神経科学研究センター言語発達研究チーム)

本研究では選択肢提示タイミングと聴取対象語の文中のポジションにより、1)選択的注意が誘導できるか、2)注意誘導により L2 音知覚の成績が向上するかどうかを日本語・中国語母語話者を対象とした音声知覚実験を行って調査した。その結果、音声提示の前に選択肢提示を行うことで知覚成績が向上すること、聴取対象の語の文中の位置が知覚に影響を与えることが分かった。また、選択的注意の誘導は、音声知覚のプリファレンス効果の抑制の効果もあることが示唆された。

sP2-30 コンテンポラリーダンス作品における振付創作プロセス—場との関係に着目して—

赤木満里奈(神戸大学人間発達環境学研究科), 野中哲士(神戸大学人間発達環境学研究科)

芸術における創作プロセスには、様々な研究がなされているが、近年のコンテンポラリーダンス作品における創作プロセスは多様化してきている。本研究では、コンテンポラリーダンスが作品を上演するにいたるまでの創作プロセスを明らかにするとともに、どのように周囲の場を利用しているかについて追うことを目的とする。実際のリハーサル動画を分析したところ、動きの素材をつなぎ合わせてシーンをつくる形と、前後の流れからシーンをつくる形があることが判明した。

sP2-31 効果的なワークショップ実現に向けた個人ワークにおける外化の影響の検討

中根愛(NTT), 渡邊浩志(NTT), 小林哲生(NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

ワークショップの個人ワークで内省を行う際に、外化をすること、外化をしないことが、参加者の思考や感情にどのような影響を与えるのかについて探索的に検討を行った。結果、外化する場合は論理性・一貫性が高い思考が可能になるが、自ら設定した枠組みに含まれない概念や、矛盾したアイディアは考慮の対象にならないことが示唆された。外化しない場合には、枠組みにとらわれない思考がされ、内省や共有の際に、自身の考えへの新たな気づきが多くされることが示唆された。

sP2-32 共変モデルに基づいた事後情報の提示方法が印象に与える影響

本庄正弥(東京電機大学), 日根恭子(東京電機大学情報認知科学研究室)

これまでに、他者の好ましい行動について、その原因がその他者本人にあると推測される内的帰属がされることで、印象が向上することが示唆されている。本研究では、悪印象を抱いた他者に対しても、好ましい行動の内的帰属を促進させ情報提示をすれば、印象が向上するか検討した。内的帰属を促進する情報提示方法として、共変モデルを用いた。その結果、社交性と積極性について、内的帰属を促進することで印象が向上することが明らかとなった。

sP2-33 なぜ人は組み立てた家具にタッチするのか?

鈴木紀子(元帝塚山大学), 正田悠(立命館大学), 阪田真己子(同志社大学文化情報学部), 伊藤紀子(同志社大学), 山本倫也(関西学院大学), 今城真由香(同志社大学)

人工物を一定期間使い続けることで、人はその人工物に対して愛着を感じたり、アニミズム的思考を持ち、結果として対人的な行動を取ることが知られている。本稿では、小型家具という擬人的な外観を持たない人工物に対し、1時間にも満たない組立作業終了時において表出された作業者の接触行動について、参加人数や行動指標・心理指標・社会的スキルを用いて分析した結果を報告する。

sP2-34 チャップリンの身体の巧みが誘発する笑いの神経科学的検証と考察

小川有希子(法政大学社会学部), 嶋田総太郎(明治大学理工学部)

本研究はチャップリンが監督・主演したコメディ映画を見る際に鑑賞者に生じるユーモアと笑いの認知に関わる神経メカニズムを調べることを目的とし、鑑賞中の脳活動を NIRS で計測した。実験の結果、独自に作成したチャップリンのおもしろさ測定尺度によって実験用映像をあらかじめ評定させ、主成分分析を施した結果の第1主成分～第3主成分と、ミラーニューロンシステムや心の理論に関わる領域の脳活動の間に有意な相関があることが示された。

sP2-35 Web デザインにおける情報発見のしやすさに関する研究 文字とアイコンに着目した検討

浅野潤(東京電機大学), 日根恭子(東京電機大学情報認知科学研究室)

ポータルサイトの表現方法には、「文字」「アイコン」と「組み合わせ」が存在し、「組み合わせ」が最良だと示唆されるが、目標情報が効率的に得られるかは十分に検討されていない。本研究では、心理実験を行い、目標情報を得るまでの選択時間と正答率を調べることで、どの表現方法が効率的に情報を得ることができるかを調べた。結果「組み合わせ」は選択時間に差は見られない一方、正答率は高かった。これにより「組み合わせ」は最も効率的な情報伝達手段であるといえる。

sP2-36 画像加工作業が作業者の気分に与える影響の調査

吉原優華里(東京電機大学情報認知科学研究室), 日根恭子(東京電機大学情報認知科学研究室)

近年、撮影された画像は画像加工アプリを使用して SNS に投稿することが流行している。これまでの研究により、写真を撮影すること自体に心理的効果があることが示唆されている。しかし、写真を加工する作業自体の効果は不明である。本研究の結果、写真撮影後にその写真を加工すると、作業者のポジティブ情動評価値が増加した一方、写真撮影のみの場合はポジティブ情動評価値が減少した。従って、写真の加工作業はポジティブな気分に影響すると考えられる。

sP2-37 車の性別、イスの年齢：物体の擬人化を生む要因の検討

新美亮輔(新潟大学人文学部)

物体の擬人的知覚とその要因を実験的に検討した。実験参加者が擬人的に評価した車とイスの年齢や性別は、物体の色の彩度や、その物体を使用しているような人の知識などに関連していた。さらに、物体のデザイン特性語・パーソナリティ特性語による評定を行ったところ、これらも擬人的知覚に関連していた。また、パーソナリティ特性は物体の主観的好ましさにも関連していた。擬人的知覚は、高次の視覚物体認識のさまざまな側面に関わっていることが示唆された。

sP2-38 課題に対する主観的評価と課題遂行時の時間評定との関係

田中大介(鳥取大学地域学部), 水姓由薫(鳥取大学地域学部)

課題遂行時における経過時間の主観的ゆがみを実験的に検討した。具体的には計算課題の難易度を操作して課題の認知負荷を変えるのと同時に、実験協力者が遂行した課題を面白いと感じたかどうかを参加者間要因の独立変数とした。結果、課題の難易度が高まる事で時間は速く流れるように感じられる事が明らかとなり、難しい課題の場合はそれを面白いと感じた人はより時間の流れを速く感じる事、一方で簡単な課題の場合は、それと反対に感じられている可能性が示唆された。

SP2-39 ストーリー生成のためのギャップ技法の発展的利用方法

小野淳平(菅原学園 専門学校デジタルアーツ仙台), 小方孝(岩手県立大学)

ストーリーを作る際に、読み手の予想を外れることにより、ストーリーの印象を強める方法がある。筆者らが提案するギャップ技法はストーリーにギャップを与え、ギャップにより読み手に驚きを与える。本稿では、二つのギャップ技法の使用方法を検討する。一つは統合物語生成システムのためのギャップ技法の使用方法である。もう一つはストーリーの要素を定義する世界設定に変化する方法である。二つの方法により筆者らは物語自動生成ゲームにおけるストーリー生成を拡張する。

SP2-40 メッセージの理解に及ぼす話し手の表情と声のトーンの影響：怒りも『伝え方が9割』か？

佐山公一(小樽商科大学商学部)

話し手が、話し手の怒りの理由を伝えるとき、話し手の怒りの表情や怒りを含む音声、メッセージの理解にどう影響するかを実験的に検討した。映像を見た後、映像で伝えられたメッセージの分かりやすさと話し手の怒りを評定した。メッセージが話し手を怒らせる理由の有無、話し手の表情の怒りの有無、話し手の声のトーンの影響の有無に分けて分析した。その結果、声のトーンが、メッセージに怒りがあるかどうかの判断に影響することが示唆された。

SP2-41 ロボットに顔のパーツがあることの効果

加藤由香利(成城大学社会イノベーション研究科), 新垣紀子(成城大学社会イノベーション研究科), 中村國則(成城大学社会イノベーション研究科), 西脇裕作(豊橋技術科学大学情報・知能工学系), 岡田美智男(豊橋技術科学大学情報・知能工学系)

本研究は、ロボットの外見が、ロボットとのインタラクションに及ぼす影響を明らかにすることを目的として行った。4種類の箱型ロボットの写真(ロボットに目と口がある場合、目だけがある場合、口だけがある場合、顔のパーツがない場合)について、会話機能や会話したいと思うかの評価を行った。その結果、目と口があるロボットは、親しみやすく、会話ができそうなロボットだと評価された。この結果より、コミュニケーションロボットの、目と口の必要性が示唆された。

シンポジウム 2 (Sym2)

9月1日(土) 14:40-16:10 会場：B棟 2F グランドホール

ロボットはプロの漫才師の仕事奪えるのか：実演で示す身体性認知研究の展望

パネリスト：岡本雅史(立命館大学)・阪田真己子(同志社大学)・榎本美香(東京工科大学)・灘本明代(甲南大学)

公演者：かまいたち(株式会社よしもとクリエイティブ・エージェンシー)

企画：岡本雅史(立命館大学)

司会：岡本雅史（立命館大学）・大石衡聴（立命館大学）

近年、人工知能（AI）研究の進展とともに「AIによって奪われる仕事」についての議論が盛んとなっている。Frey & Osborne (2013) に端を発するこの議論は、コンピュータとロボットが将来的にどういった種類の人間の仕事を代替することが可能かという問題意識を通じて、そもそもの人間の多様な営みの科学的本質を明らかにする途を開きつつある。特に、様々な人間活動のビッグデータをもとにコンピュータが人間の計算論的な認知能力を凌駕しつつある（ないしは囲碁やチェスのように既に凌駕している）現在、身体を持った主体同士のインタラクションにどこまでロボットが接近可能かを考察することは、認知科学および認知心理学にとっての身体性の意義を改めて再考するうえで有意義な機会となるであろう。

そこで、この度の日本認知科学会と日本認知心理学会の共同開催における招待講演企画として、一流のプロ漫才師を招聘し、実際に会場で実演してもらうとともに、同一のネタを事前に実装した2体のロボット同士の漫才実演と対比させる。そして漫才のネタが演者間のインタラクションにおいてどのように実現されているかを、2名のパネリストによる言語的分析と身体メディア分析の両面から掘り下げ、最後にフロアを巻き込んだパネルディスカッションの形で、新たな身体性認知研究の展望を構想したいと考える。

パネルディスカッション (Pnl1)

9月1日(土) 16:30-17:50 会場：B棟 2F グランドホール

認知研究のこれから：心理学への批判と期待

パネリスト：戸田山和久（名古屋大学）・入来篤史（理化学研究所）・松原仁（はこだて未来大学）・竹村和久（早稲田大学）

モデレータ：川合伸幸（名古屋大学）

企画：服部雅史（立命館大学）・川合伸幸（名古屋大学）

認知科学誕生の瞬間とされる MIT でのシンポジウムから 60 余年、ナイサーの『認知心理学』が出版されてから 50 余年が経過し、認知科学と認知心理学は、当初の野心的な試行錯誤の集まりから、成熟して安定感のある学問領域に移行した。しかし、成熟とともに、研究アプローチ上のさまざまな論点や問題も明らかになってきており、一種の閉塞状況の予感もないとは言えない。そこで、この度の日本認知科学会と日本認知心理学会の共同開催を機に、認知研究のさまざまな問題について考えたい。特に、認知科学の中でとりわけ重要な位置を占めてきた心理学に焦点を当て、バックグラウンドを異にするベテラン研究者に議論をリードして頂いて、認知研究の原点に立ち返りながら、今後の研究の方向性について私たち一人一人が考えを深める機会としたい。

懇親会 (Soc1)

9月1日(土) 18:00-19:30 会場：C棟 1F OIC カフェテリア

9月1日(土) 18時より、C棟 1F OIC カフェテリアにて、日本認知心理学会第16回大会と合同で懇親会を開催します。軽食と飲み物をご用意します。ぜひご参加ください。

査読者一覧 (敬称略)

本大会の発表論文の査読にあたって以下の方々にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

青山征彦	清河幸子	高橋英之	原田なをみ
浅川伸一	楠見孝	竹内勇剛	原田康也
阿部慶賀	久保賢太	田中章浩	針生悦子
有元典文	黒沢学	田中孝治	日高昇平
粟津俊二	黒田航	田中幹大	平賀譲
石井敬子	小島一晃	田中吉史	平原憲道
石川悟	小島治幸	谷内通	福田健
石崎俊	小橋康章	田部井賢一	藤井晴行
市川淳	小林由紀	田村昌彦	藤木大介
伊藤毅志	小堀聡	都築誉史	布山美慕
伊藤朋子	小松孝徳	寺井あすか	方思源 (Siyuan FANG)
井藤寛志	金野武司	寺井仁	星野徳子
伊東昌子	阪田真己子	寺尾敦	本田秀仁
伊丸岡俊秀	定延利之	寺田和憲	牧岡省吾
ウィツェル楠緒子	佐藤由紀	伝康晴	真隅暁
植阪友理	佐藤裕	富田英司	松井理直
内海彰	篠原和子	外谷弦太	松香敏彦
榎本美香	柴田寛	鳥居拓馬	松田剛
大石衡聴	Shimase, Misa Grace	中小路久美代	水野りか
大西仁	嶋田総太郎	中田龍三郎	宮崎美智子
大森隆司	島田英昭	中村國則	村越真
岡田猛	清水大地	中本敬子	望月俊男
岡田浩之	下嶋篤	中山晃	森下美和
岡田美智男	正田悠	永井淳一	森田純哉
岡部大介	白水始	永井聖剛	森田均
小川昭利	新垣紀子	永井由佳里	安田和弘
小倉加奈代	神長伸幸	南部美砂子	安永大地
小野哲雄	杉尾武志	荷方邦夫	山崎治
片桐恭弘	鈴木聡	西中美和	山本倫也
加藤浩	鈴木栄幸	西本一志	湯浅将英
金井明人	鈴木宏昭	野口尚孝	横澤一彦
金山範明	須藤智	野村竜也	吉川厚
川合伸幸	諏訪正樹	橋本敬	吉高淳夫
河原哲雄	高木光太郎	服部雅史	
神崎奈奈	高梨克也	林勇吾	
喜多伸一	高橋達二	原田悦子	

発表者・企画関係者索引

【A-Z】

John R. Anderson Inv1
 Sala Giovanni sP1-13
 Yasuyuki Gondo sP1-13
 Yuri Klebanov sP1-47
 Tanyaporn Pungrasmi sP2-9
 Lynne Reder Inv2
 Montserrat Sanz sP1-75
 Gøran Vaage sP2-5

【あ】

青木慎一郎 sP1-49
 青山征彦 sP1-37 sP1-40
 赤木満里奈 sP2-30
 赤間啓之 sO3-2 sP1-19 sP1-8
 秋元泰介 sP1-14
 秋吉政徳 sP1-24
 浅野潤 sP2-35
 浅原正幸 sP1-68
 渥美裕貴 OS04-5
 阿部慶賀 sP2-11
 阿部廣二 sP1-55
 綾屋紗月 OS04-3
 有賀敦紀 sP1-62
 有賀三夏 sP1-23
 粟津俊二 sP1-19 sP1-53 sP1-8
 安西祐一郎 Spec1 OS01-3

【い】

飯窪真也 OS08-4
 壹岐朔巳 sO3-5
 池永将和 sP1-77 sP1-88
 井澤玲 sP1-24
 石川悟 sP2-28
 石川実佳 sP2-1
 石原由貴 OS11-3 sP1-34

伊集院幸輝 sP1-42
 井関龍太 sP1-18
 市川伸一 L1
 市川淳 sO1-4
 井手正和 OS04-2
 伊藤篤 OS09-4
 伊藤拓哉 sP1-25
 伊藤毅志 sP2-24
 伊藤紀子 sP2-33
 稲葉みどり sP2-2
 乾敏郎 sP1-66
 井上拓也 sP1-6
 井上雅勝 sP1-44
 今泉拓 sP1-29
 今井むつみ OS10 OS10-1 OS10-7
 今井優介 sP1-62
 今川翔太 OS05-5
 今城真由香 sP2-33
 入江諒 OS12-4 sP2-15
 入來篤史 Pnl1
 犬童健良 sP1-86

【う】

上島淳史 sO1-5
 上田紋佳 sP1-65
 植田一博 OS02-3 OS05-3 OS05-4
 sO2-2 sP1-29
 上田拓弥 sP1-79
 于成 sP1-9
 宇野良子 sP1-51
 馬田一郎 sP1-42
 梅田聡 Sym1

【え】

榎堀優 OS04-5
 榎本美香 Sym2 OS03-2

JCSS 2018

【お】

汪雪婷	OS04-5		
大石衡聴	Sym2		
大河原一輝	sP1-11		
大海悠太	sP2-18		
大木朱美	sP1-56		
大澤博隆	OS12	OS12-6	
大塩智規	sP1-15	sP1-22	
大瀧友里奈	OS05-2		
太田博三	sP2-16		
大塚建太	sP1-1		
大槻正伸	sP1-15	sP1-22	
大槻美佳	OS10-3	OS10-7	
大貫祐太郎	OS05-3		
大場みち子	sP2-17		
大平英樹	sP2-15		
大村勝久	sP2-27		
大森隆司	sO1-4		
大山潤爾	sP1-11		
大山将来	sP1-19	sP1-8	
岡田猛	sP1-21	sP2-19	sP2-20
	sP2-8		
岡田直人	OS04-5		
岡田浩之	OS01	OS01-2	
岡田真奈	sP1-59		
岡田美智男	sP2-41		
岡夏樹	sO1-4		
岡本球夫	sP2-9		
岡本真砂夫	sP1-33		
岡本雅史	Sym2		
小方孝	sP1-25	sP1-49	sP1-57
	sP2-39		
小川有希子	sP2-34		
奥村優子	sP1-58		
小田切史士	OS02-4		
小野淳平	sP1-49	sP2-39	
小俣貴宣	OS03-3		
織田涼	OS02	OS02-5	

【か】

柏倉健一	sP1-16		
柏端達也	sP2-15		
加藤健太郎	sP1-30		
加藤祥	sP1-68		
加藤樹里	sP2-15		
加藤龍彦	sP1-26		
加藤恒夫	sP1-42		
加藤由香利	sP2-41		
門田圭佑	sP1-55	sP1-80	
鹿子木康弘	sP1-58		
かまいたち	Sym2		
神窪利絵	sP1-47		
上出寛子	OS04-5		
亀田達也	sO1-5		
萱場豊	OS03-3		
川合伸幸	Pnl1	OS01	OS11
	OS01-2	OS11-7	sP1-31
	sP1-46	sP2-6	
河上章太郎	sP1-82	sP2-15	
川崎貴子	sP2-29		
川崎真弘	Sym1	OS11-4	
河崎美保	OS08-3		
川島朋也	OS02-1		
河原美彩子	sP1-28	sP1-84	
川端良子	sP1-32		
神原一帆	sP1-10		
康茗淞	OS09-4		

【き】

邱華琛	sP2-6		
牛司策	sP1-65		
清河幸子	sP2-1		

【く】

工藤和俊	sP2-25		
工藤傑	sP1-62		
工藤卓	sP1-79		
久保（川合）南海子		OS11-6	OS11-7
久保田進一	sP2-15		

JCSS 2018

藏藤健雄	sP1-44			佐治伸郎	OS10	OS10-5	OS10-7
紅林優友	OS04-4			定延利之	sP2-12	sP2-5	
黒嶋智美	OS03-3			佐藤貞之	sP1-62		
黒田航	sP1-41			佐藤信之介	sP1-73		
				佐藤貴宣	sP2-22		
【こ】				佐藤拓磨	sP2-15		
小池星多	sP1-37			佐藤優太郎	OS11-3		
小泉康一	sP1-15	sP1-22		佐藤裕	sO3-3		
小嶋暁	OS04-4			佐藤洋一	sP1-47		
小島一晃	sP2-4			里大輔	sP2-21		
小鷹研理	OS11-2	OS11-3	OS11-7	佐山公一	sP2-40		
	sP1-34			佐良木昌	OS09	OS09-7	
児玉謙太郎	sP1-45	sP1-64	sP2-18	澤田佳子	sP1-84		
古藤陽	sP1-21			澤田玲子	sP1-81		
後藤靖宏	sP2-3						
小林龍生	sP2-17			【し】			
小林哲生	sP1-58	sP2-31		篠崎健一	OS03-5		
米田英嗣	M3	OS11	OS11-4	篠原亜佐美	sP1-58		
	OS11-7			柴田正良	sP2-15		
金野武司	OS12-4	sP1-69	sP1-82	島岡優策	sP2-9		
	sP2-15			嶋田総太郎	Sym1	OS11-5	OS11-7
					sP1-60	sP2-34	
【さ】				清水大地	sP1-21	sP2-18	sP2-20
西郷甲矢人	OS06-3	OS06-5		下條朝也	sP1-43		
斉藤功樹	sP1-50			宿利由希子	sP2-5		
齋藤利樹	OS12-6			正田悠	sP2-33		
齋藤ひとみ	sP1-61			ジョキョウテツ	sP2-23		
齊藤萌木	OS08-4			白石壮大	sP1-60		
齊藤優弥	sP1-69			白砂大	OS02-3	OS05-4	
阪井和男	sP1-23			白土寛和	OS12-1		
坂井田瑠衣	OS07	OS07-2	sP2-22	白水始	OS08	OS08-1	OS08-4
阪口豊	OS03-4				OS08-5		
阪田真己子	Sym2	sP1-59	sP2-33	新垣紀子	sO1-2	sP1-72	sP2-41
坂本孝丈	OS12-5						
佐久間康之	sP1-65			【す】			
桜井良太	sP1-64			杉浦元亮	Sym1		
篠川知夏	sP1-37			鈴木紀子	sP2-33		
佐々木陽	OS09-4			鈴木宏昭	L1	Sym1	OS01
佐々木淳	sP1-25				OS01-2	OS02-4	OS11-7
佐々木基	sP2-7			鈴木渉	sP1-65		

JCSS 2018

須藤智	sO1-1	sP1-56		【て】			
諏訪正樹	OS03	OS03-1	sP1-35	寺井あすか	sP1-30		
				寺井仁	OS02-2	sO2-3	sP1-43
【た】					sP1-71		
田浦秀幸	sO3-4			寺澤孝文	sP1-65		
高梨克也	OS03-6			【と】			
高橋康介	OS06	OS06-1	OS06-5	十一元三	sP1-81		
	OS06-6	sP1-29		土肥拓生	sP1-50		
高橋慈子	sP2-17			遠山紗矢香	sP2-27	sP2-21	
高橋達二	sP1-20	sP1-74		徳永弘子	OS09-5		
高橋秀明	sP1-67			戸田薫子	sP1-72		
高橋英之	OS12	OS12-8		戸田山和久	Pnl1	OS11-1	OS11-7
高橋麻衣子	sP2-1			富田英司	sP1-23		
宝田悠	sP1-20			鳥居拓馬	sO2-4		
竹内雅樹	sP2-29			【な】			
竹内勇剛	OS12-3	OS12-5	sP2-21	中川正宣	sP1-30		
武田啓子	sP1-7			中里周子	sP1-51		
竹中慧	sO1-3			中田龍三郎	sP1-46		
竹村和久	Pnl1			中根愛	sP2-31		
田中章浩	sP1-28	sP1-84		仲真紀子	Inv2		
田中邦佳	sP2-29			中村國則	OS05	OS05-5	sP2-41
田中孝治	sP1-3	sP1-4		中村潤	sP1-1		
田中伸之輔	sO1-1			中村太戯留	sP2-10		
田中大介	sP2-38			中村雅子	sO1-3		
田中優貴	sP1-65			仲村都奈	sP1-71		
田中吉史	sP1-70			中山隆弘	OS08-5		
田邊鉄	sP1-78			長井隆行	OS12-7	sO1-4	
谷口忠大	OS10-4	OS10-7		永井聖剛	Sym1		
田村昌彦	sP1-83			長井志江	OS04-1		
【ち】				長岡千賀	sP1-17		
張昭誼	OS09-4			長島一真	OS12-3		
張寓杰	sP1-30			長滝祥司	sP2-15		
【つ】				長戸操	sP1-62		
辻田亜門	sP1-19	sP1-8		名塩征史	OS07	OS07-2	
都地裕樹	OS11-5			灘本明代	Sym2		
津田真吾	sP1-65			鳴海拓志	OS06-4	OS06-5	OS06-6
都築幸恵	sO1-2						
鶴島彰	sP1-36						

【こ】

新井田統 sP1-56
 新美亮輔 sP2-37
 西尾慶之 OS06-2 OS06-5
 西川純平 sO3-1
 西阪仰 OS07-1 OS07-2
 西澤弘行 sP2-22
 西田勇樹 OS02 OS02-5
 西山めぐみ sP1-65
 西山雄大 sP1-24
 西脇裕作 sP2-41
 二宮由樹 OS02-2

【ぬ】

沼口裕太 sP1-35

【の】

野中哲士 sP1-2 sP2-30
 野村亮太 sP1-48

【は】

橋本敬 OS10-6 OS10-7 sP2-15
 長谷川寿一 sO3-5
 羽多野裕之 OS09-4
 服部雅史 Inv1 Inv2 Pnl1
 OS02-5
 林穂波 sP1-61
 林美都子 sP2-7
 林勇吾 Inv1 Inv2 sP1-83
 林良子 sP2-5
 原田悦子 sO1-1 sP1-77 sP1-88
 原田康也 OS09 OS09-1 OS09-3
 OS09-4 sP1-23

【ひ】

日永田智絵 OS12 OS12-7
 日高昇平 OS06 OS06-1 OS06-5
 OS10-2 OS10-7 sO2-4
 sP1-26 sP1-3 sP1-4
 sP1-52

日根恭子 sP1-85 sP2-32 sP2-35
 sP2-36

ヒューズ由美 sP2-25
 開一夫 Sym1
 平島雅也 sP2-20
 平松裕子 OS09 OS09-1 OS09-2
 OS09-4
 廣田章光 sP1-38

【ふ】

福留奈美 OS09 OS09-1 OS09-6
 福永征夫 sP1-27
 福丸歩実 sP2-26
 傅翔 OS09-4
 藤井慶輔 sO1-4
 藤井晴行 OS03-5
 藤崎樹 sO2-2
 舟岡滋悟 sP1-72
 船曳康子 OS11-4
 布山美慕 sP1-52
 古山宣洋 sP1-55 sP2-14

【ほ】

星田雅弘 sP1-83
 星野徳子 sP1-75
 細馬宏通 OS07-2
 堀公彦 OS08-2
 本庄正弥 sP2-32
 本田秀仁 OS05 OS02-3 OS05-3
 OS05-4 sO2-2
 本多明子 sP1-54

【ま】

前川亮 sP1-66
 前東晃礼 sP2-4
 牧岡省吾 sP1-9
 牧野遼作 OS07 OS07-2 sP1-55
 sP1-80
 正高信男 sP1-81
 益岡都萌 sP1-65

JCSS 2018

益川弘如	OS08	OS08-1	OS08-3
間瀬健二	OS04-5		
松井志保人	sP1-16		
松井孝雄	sP1-5		
松井理直	sP1-44	sP1-63	
松香敏彦	OS02-3	sP2-23	
松澤芳昭	sP2-27		
松田憲	sP1-62		
松林翔太	sO2-3		
松原仁	PnI1		
松室美紀	sO2-1		
松本一樹	sP2-19		
丸野俊一	sP1-48		
【み】			
神浦駿吾	sO3-3		
三浦慎司	sP1-31		
三浦俊彦	sP2-15		
水姓由薫	sP2-38		
水野りか	sP1-5		
光田基郎	sP1-39		
南保輔	sP2-22		
三輪和久	Pres1	OS02-2	sO2-1
	sO2-3	sP1-43	sP1-71
	sP2-4		
【む】			
村上久	sP1-24		
【も】			
本木隼人	sP1-85		
森川幸治	OS12-2		
森下浩平	sP1-76		
森下美和	OS09	OS09-1	OS09-3
	sP1-23		
森田賢治	sP1-48		
森田純哉	OS04-4	OS04-5	OS12-3
	sO3-1		

【や】			
矢野史朗	sP1-51		
山際英男	sP1-45		
山口琢	sP2-17		
山崎治	sP1-73	sP2-26	
山田和範	OS04-5		
山田雅敏	sP2-21		
山田雅之	sP2-18		
山田優志	OS02-4		
山根承子	OS05-1		
山ノ井高洋	OS10-3		
山本敦	sP1-55	sP2-14	
山本誠一	sP1-42		
山本寿子	sP1-28		
山本真秀	sP1-2		
山本倫也	sP2-33		
山森良枝	sP1-87		
【よ】			
羊忻怡	sP1-65		
横地早和子	sP2-8		
横矢真悠	OS04-5		
吉岡源太	OS12-5		
吉沢栄貴	sP1-74		
吉原優華里	sP2-36		
米谷竜	sP1-47		
米持圭太	sP1-16		
【ら】			
羅希	sP2-12		
【わ】			
渡辺謙仁	sP1-78		
渡邊浩志	sP2-31		
渡部宣弥	sO1-3		
渡邊竜司	sP2-9		

日本認知心理学会第16回大会

The 16th Annual Convention
of
the Japanese Society for Cognitive Psychology (JSCP)

2018年9月1日（土）・2日（日）

立命館大学大阪いばらきキャンパス

September 1-2, 2018

at Osaka Ibaraki Campus (OIC), Ritsumeikan University, Japan

目次 Table of Contents

1. 発表者へのご案内 Guideline for Presenters	p. 80
2. 8月31日 August 31（ベーシック&フロンティアセミナー）	p. 82
3. 9月1日 September 1	p. 84
4. 9月2日 September 2	p. 98

1. 発表者へのご案内 Guideline for Presenters

口頭発表 Oral Presentations

- ・発表時間は 18 分（発表 14 分，質疑応答 4 分）です。
- ・発表に使用する PC は各自でご用意，ご持参ください。
- ・各会場に，備え付けの PC（Windows, PowerPoint 2016 インストール済）が設置してあります。
- ・発表では，会場の AV システムに PC を接続して講演していただきます。HDMI 接続ならびに VGA 接続をご利用いただけます。変換アダプター，PC とのコネクターが必要な方は，各自でご準備ください。
- ・セッション開始 10 分前までに，口頭発表会場にお越しください。
- ・セッションが始まる前までに，会場 AV システムとの接続確認ならびに正面スクリーンとモニターへの映写確認を行ってください。
- ・補足資料の配布を希望される方は，各自でご用意いただき，発表前にご自身で配布をお願いいたします。事前の預かり及び大会本部でのコピーは致しかねますのでご了承ください。
- ・ Each presentation must be within **18 minutes**, including **4 minutes** of discussions.
- ・ Please bring your own laptop computer for the oral presentation.
- ・ Projector and loudspeakers are available in all Talk Rooms. Interfaces to the projector are **HDMI and analog VGA (D-sub 15 pin)**. Please bring your own adapter cable, if necessary.
- ・ Please arrive at in the Talk Room **no less than 10 minutes** before the start of your session.
- ・ Please verify your PC's connection with the projector prior to the beginning of the session.
- ・ If you plan to give out handouts, prepare them yourself. We do not accept any request for copying.

ポスター発表 Poster Presentations

- ・ポスターの大きさは，横 90 cm × 縦 170 cm 以内としてください。
- ・ポスターの掲示に必要なピンは，各ポスターボードに備え付けてあります。
- ・ポスターは当日のポスターセッション開始 1 時間前より掲示できます。発表者はポスターセッション開始時間までにポスターを掲示し，ポスターセッション終了 1 時間 30 分後までにポスターを回収してください。
- ・ポスター発表会場内でのデモ用 PC 等の充電はできません。
- ・準備委員会へのポスターの回収，処分依頼は承りません。ポスターは必ずご自身で回収し，お持ち帰りください。
- ・本大会では，ポスターセッション中に休憩時間を設けております。ポスター発表者は下記の在席責任時間以外の時間に，適宜昼食をお取りください。
- ・ポスター発表の在席責任時間は，以下のとおりの 45 分間といたします。

pP1：奇数番号	12:00-12:45	偶数番号	13:45-14:30
pP2：奇数番号	11:30-12:15	偶数番号	13:15-14:00

- Poster size must be **within 170 cm (height) × 90 cm (width)**.
 - Pushpins for affixing your poster are provided at your board.
 - For charging, the power outlets are **not** available in all poster rooms.
 - The poster rooms will open one hour before each poster session starts. Authors must post their posters in prior to the beginning of poster session. Please remove your poster by one and a half hours after the session ends.
 - Each poster session includes lunch break (**60 minutes**).
 - Authors of even-numbered posters must be at their posters during “Even Authors Present” time, and authors of odd-numbered posters must be at their posters during “Odd Authors Present” time.
- Author present time (45 minutes):

pP1-Odd Authors Present: 12:00 ~ 12:45 pP1-Even Authors Present: 13:45 ~ 14:30
pP2-Odd Authors Present: 11:30 ~ 12:15 pP2-Even Authors Present: 13:15 ~ 14:00

英語セッション（口頭・ポスター）発表 Presentations (Oral/Poster) in English

- 口頭（英語）発表では、発表時間内は質疑応答まで含めて英語でお願いいたします。
- ポスター（英語）発表では、在席責任時間内は質疑応答まで含めて英語でお願いいたします。
- 発表者は、日本語で質問を受けた場合にも、英語セッションとしての発表であることを質問者にご理解いただいたうえで、英語での受け答えをお願いいたします。
- 質疑応答も含めて、大会優秀発表賞国際性評価部門の審査対象となります。

大会優秀発表賞 JSCP2018 Presentation Award

- 口頭発表、ポスター発表ともに、大会優秀発表賞の対象になります。
- 優秀発表賞の推薦のお願い

日本認知心理学会会員の方は優秀発表賞の推薦ができます。受付にてお渡しする推薦用紙にご記入のうえ、会場受付もしくは休憩所等に設置している推薦箱にお入れください。優秀発表賞には、新規性部門、技術性評価部門、社会貢献度評価部門、発表力評価部門、国際性評価部門、総合性評価部門の6部門があります。詳しくは推薦用紙をご覧ください。

Any JSCP member may vote for the JSCP2018 Presentation Award. It has six categories: Award for Novelty and Creativity, Award for Methodology and Techniques, Award for Contribution to Society, Award for Good Presentation Skill, Award for Distinguished Internationality, and Award for Integrity. Voting sheet will be provided at the registration desk. For details please see the voting sheet.

2. 8月31日(金) Events at August 31 (Friday)

日本認知心理学会 ベーシック&フロンティアセミナー

日時 : 2018年8月31日(金) 12時50分~17時00分

場所 : A棟2階 AS257教室

プログラム

12:30 受付開始

12:50 開会の辞

箱田 裕司 (京都女子大学発達教育学部)

13:00-14:20 第14回日本認知心理学会優秀発表賞受賞講演

司会 : 箱田 裕司 (京都女子大学発達教育学部)

「偽り表情の認識における空間周波数情報の関与」

木原 健 (鹿児島大学大学院理工学研究科), 武田 裕司 (産業技術総合研究所情報・人間工学領域)

「オンライン認知実験の可能性を探る」

眞嶋 良全 (北星学園大学社会福祉学部)

14:30-15:20 セミナー I

司会 : 朝倉 暢彦 (大阪大学数理データ科学教育研究センター)

「インターネットを利用した心理学実験・調査に関する諸問題: より適切なデータを得るためには」
三浦 麻子 (関西学院大学文学部教授・大阪大学大学院基礎工学研究科特任教授)

オンライン調査・実験は心理学におけるデータ収集の手法の1つとしてすでに定着した。しかし、日本においてその質に関する検討は十分になされているとはいえない。オンライン調査・実験は研究者が直接回答行動を観察できない状況でデータが収集されるため、回答者が十分な注意を払って回答していることを確認できない。特に、回答者が謝礼目的で多くの調査や実験に参加するように動機づけられている場合には、質問文や実験の教示を注意深く読まないまま、できるだけ早く回

答を終わらせるような回答行動を取る可能性がある。こうした問題はオンライン調査・実験の普及以前から *survey satisficing* として知られてきたが、オンラインでのデータ収集においては特に問題になる可能性が高い。本セミナーでは、発表者らがオンライン調査会社のモニタ会員とクラウドソーシングサービスを通して募集された参加者を対象に行ってきた一連の *Satisfice* 研究の結果を紹介し、より適切なデータを得るために研究者がすべきことについて考える。

15:35-16:55 セミナーII

司会：熊田 孝恒（京都大学大学院情報学研究科）

「ベイズ統計学の考え方と方法」

岡田 謙介（東京大学大学院教育学研究科准教授）

ベイズ統計は不確実性を確率によって表現し、データから得られた情報を用いてこの確率を更新していくことを原理とする体系である。平均値差や相関係数といったパラメータについても、帰無仮説や対立仮説として表現されるような仮説についても、ベイズの定理を用いれば基本原理に従って確率を更新していくことができる。このようにして、首尾一貫したデータ分析のための体系ができあがる。近年、心理学や認知科学において改めてベイズ統計が注目を集めているが、この理由としては少なくとも次の2点が指摘できる。第一に、従来の頻度論に基づく有意性検定の誤用や不適切な解釈による弊害が無視できない水準に達してきたこと、第二に、データ生成メカニズムを反映できる統計モデリングを実践する上でベイズ統計学の考え方や方法が役立てやすいことである。本セミナーでは、歴史的な経緯を踏まえつつ、まずベイズ統計の原理となる考え方について、そして上記2点の特長について説明する。その上で、私自身が関わったものを含む、こうした特長を活かした、ベイズ統計を用いた最近の心理学研究の具体例を紹介する。

16:55 閉会の辞

乾 敏郎（追手門学院大学心理学部）

3. 9月1日(土) Events at September 1 (Saturday)

日本認知心理学会 支援隊企画ワークショップ

エピソード記憶の新展開

日時 : 2018年9月1日(土) 8時40分~10時10分

場所 : A棟2階 AC231教室

企画・司会 : 小林 正法 (関西学院大学)・松本 昇 (名古屋大学・日本学術振興会)

話題提供者 :

波多野 文 (高知工科大学・日本学術振興会)

小林 正法 (関西学院大学)

松本 昇 (名古屋大学・日本学術振興会)

指定討論者 :

川口 潤 (名古屋大学)

概要 :

Tulving (1972) によってエピソード記憶が提唱されてから、現在まで約半世紀が経過した。エピソード記憶システムは過去の出来事を思い出すという「これまで」の出来事の想起を担うだけでなく、エピソード的未来思考として知られるように未来の出来事の想像や思考 (Schacter et al., 2008) といった「これから」の出来事の想像も担うことが示されている。このように、約半世紀を経てもなお、エピソード記憶研究は新たに展開し続けている。本ワークショップでは、最新のエピソード記憶研究の紹介を通して、エピソード記憶研究の「これまで」と「これから」を議論したい。波多野は、エピソード記憶の変容という点から、言語陰蔽効果の研究を紹介する。小林は、エピソード記憶の機能という点から、忘却が持つ機能に関する研究を紹介する。松本は、エピソード記憶と精神的健康の関連という点から、自伝的記憶の概括化と精神的健康の関連についての研究を紹介する。最後に、川口がこれらの研究を含めた「これまで」のエピソード記憶研究について討論し、登壇者及びフロアの皆様と「これから」のエピソード記憶研究の展開を考えていきたい。

[pO1] 口頭発表セッション 1 (知覚・感性 1) Oral Presentation Session 1

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 8:40-10:10**場所:** A棟2階 AS251 教室**座長:** 川崎 真弘 (筑波大学)

上田 祥行 (京都大学)

-
- [pO1-001] 空間的視点取得能力を測定するコンピュータ化テスト
ーラインマップテスト (LMT) の開発とその信頼性・妥当性の検証ー
A computerized test for measuring spatial perspective-taking ability: Development, reliability, and validity of the Line Map Test (LMT)
○武藤 拓之^{1,2}, 森川 和則¹ (1. 大阪大学大学院人間科学研究科, 2. 日本学術振興会)
- [pO1-002] 経頭蓋脳電気刺激による脳波リズムの誘発と反応時間の促進
Facilitation of response time with induces of EEG oscillation by transcranial electric stimulation
○川崎 真弘, 邊見 佳輝, 宮内 英里 (筑波大学大学院システム情報工学研究科)
- [pO1-003] マルチメディア・コンテンツ視聴時の音楽が視線に与える影響
ー共感性からの検討ー
Music and audience's empathy affect visual attention while watching videos
○河瀬 諭¹, 正田 悠² (1. 大阪大学大学院人間科学研究科, 2. 立命館大学総合科学技術研究機構)
- [pO1-004] 注意の範囲が表情のアンサンブル知覚の精度に及ぼす影響
The effect of attention scope on perception of facial expression ensembles
○上田 祥行 (京都大学)
- [pO1-005] 能動的運動における心的時間の大域的短縮と局所的伸長
Global compression and local dilation of mental time during voluntary action
○今泉 修^{1,2}, 丹野 義彦¹, 今水 寛¹ (1. 東京大学, 2. 日本学術振興会)
-

[pO2] 口頭発表セッション 2 (感情・動機) Oral Presentation Session 2

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 8:40-10:10

場所: A棟2階 AS252 教室

座長: 北神 慎司 (名古屋大学)

松田 憲 (北九州市立大学)

-
- E [pO2-001] 福島県産の製品に対する潜在的態度と居住地域の関係
Residential areas modulate implicit attitudes on Fukushima agricultural products
○Tsegmed Otgonchimeg¹, 田岡 大樹², 姜 琦¹, 有賀 敦紀¹ (1. 広島大学, 2. 京都大学)
- [pO2-002] 商品評価時のパワー操作が広告効果に及ぼす影響
The influences of power priming at the time of products evaluation on advertisement effect
○松田 憲¹, 小野 史典², 杉森 絵里子³, 楠見 孝⁴ (1. 北九州市立大学, 2. 山口大学, 3. 早稲田大学, 4. 京都大学)
- [pO2-003] 触るな危険! ?
- 円形集合体への接触忌避反応 -
Danger!? Don't touch! : Avoidance reaction to tryphobic objects
○佐々木 恭志郎^{1,2,3}, 山田 祐樹², 渡邊 克巳¹ (1. 早稲田大学, 2. 九州大学, 3. 日本学術振興会)
- [pO2-004] 未知顔の識別における金銭的報酬の影響
Do monetary rewards improve unfamiliar face matching accuracy?
○北神 慎司, 小川 佳純 (名古屋大学)
- [pO2-005] 不確実な状況に対する耐性と不確実な状況下での学習課題の関連
The relationships between Intolerance of Uncertainty and Iowa Gambling Task
○難波 修史¹, 柏原 志保¹, カビール ラッセル¹, 橋本 淳也¹, 平本 亮介¹, 小林 亮太¹, 加藤 美幸², 原口 優輔¹, 野口 由華¹, 藤田 和也³, 中尾 敬¹ (1. 広島大学大学院教育学研究科, 2. 広島大学医歯薬保健学研究科, 3. 東京大学教育学研究科)
-

[pO3] 口頭発表セッション 3 (注意) Oral Presentation Session 3

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 8:40-10:10**場所:** A棟2階 AS257 教室**座長:** 河西 哲子 (北海道大学)

木原 健 (産業技術総合研究所)

-
- [pO3-001] 大域・局所処理課題が場依存・場独立型認知スタイルに及ぼす影響
Effects of Global-Local Processing Task on Field-Dependence/ Independence
○竹林 ひかり¹, 箱田 裕司², 宋 永寧³ (1. 京都大学, 2. 京都女子大学, 3. 華東師範大学)
- [pO3-002] 自己同一化された二次元キャラクターに対する視線シフト
The gaze bias for avatar faces
○今井 史¹, 佐藤 智穂², 互 恵子², 河原 純一郎¹ (1. 北海道大学, 2. 資生堂グローバルイノベーションセンター)
- [pO3-003] バレーボールのサーブにおけるマインドワンダリングの影響
Effects of mind-wandering during serving a volleyball
○高濱 祥子¹, 鈴木 健明² (1. 愛知みずほ大学, 2. 株式会社岩国スイミングセンター)
- [pO3-004] マインドワンダリングと眠気は注意の瞬きに影響しない
Mind-wandering and sleepiness do not attenuate the attentional blink
○木原 健, 甲斐田 幸佐 (産業技術総合研究所)
- [pO3-005] 視覚的統合への時間的予測の効果は健常者の自閉症傾向により変動する
Effects of temporal expectation on visual integration vary with autism tendency in healthy population
○河西 哲子^{1,4}, 蒔苗 詩歌^{2,3}, 北城 圭一⁴, 藤 亮裕⁵ (1. 北海道大学大学院教育学研究院, 2. 北海道大学大学院教育学院, 3. 日本学術振興会, 4. 理化学研究所脳神経科学研究センター, 5. 北海道大学教育学部)
-

大会企画シンポジウム

動的な脳情報処理

日時 : 2018年9月1日(土) 10時20分~11時50分

場所 : A棟2階 AC231教室

企画 : 河原 純一郎 (北海道大学)

司会 : 佐藤 隆夫 (立命館大学)

話題提供者 :

北城 圭一 (理化学研究所)

天野 薫 (脳情報通信融合研究センター)

中尾 敬 (広島大学)

概要 :

認知心理学研究で脳波研究といえば、事象関連電位がまず思い浮かぶことが多いように思われます。これはアルファ波で知られる脳波の振動現象には必ずしも注目しない研究方法です。アルファ波以外にも脳波の周波数解析を行って、さまざまな認知、知覚課題を遂行中の脳波の振動成分と脳機能の関係が調べられてきました。本シンポジウムでは、脳波位相同期解析をはじめとする技術を使っておられる3名の方をお招きし、最新の知見をご紹介いただこうと考えています。北城氏は安静時、課題時の脳波の位相同期をはじめとする非線形神経ダイナミクスと各種行動指標との関連について知見を紹介します。天野氏は、アルファ波の周波数を経頭蓋電流刺激によって変調させる技術を開発し、視知覚におけるアルファ波の機能を明らかにした研究を紹介します。中尾氏は安静時に記録される自発脳波の長期時間相関 (long-range temporal correlation; LRTC) と自己の内的基準による意思決定との関連について報告します。

[pO4] 口頭発表セッション 4 (記憶 1) Oral Presentation Session 4

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 10:20-11:50

場所: A棟2階 AS251 教室

座長: 川口 潤 (名古屋大学)

原田 悦子 (筑波大学)

[pO4-001] 抑うつ傾向者はネガティブ刺激の記憶判断を過大評価するか

Does depressed person overestimate the memory judgment of the negative stimulus?

○高橋 佳史 (法政大学大学院人文科学研究科)

[pO4-002] 生成効果が複数手がかり語の連合に与える影響 II

The effect of self-generation of the related word on the paired-association of two words.

II

○押尾 恵吾 (法政大学大学院人文科学研究科)

[pO4-003] 自伝的記憶語り時の聞き手の態度がなつかしさに及ぼす影響

Relationship between evoked nostalgic feelings and listeners' attitudes while talking about autobiographical memory

○杉森 絵里子¹, 松田 憲², 楠見 孝³ (1. 早稲田大学, 2. 北九州市立大学, 3. 京都大学)

◆ [pO4-004] 加齢に伴う会話の変化

－対象指示課題による検討－

Changes in conversation with healthy ageing: A study with referential communication task

○原田 悦子, 池永 将和 (筑波大学)

[pO4-005] なつかしい記憶を思い出すと待てる？

－なつかしさをともなうエピソード記憶想起が時間割引に及ぼす効果－

Does nostalgia promote waiting? : Remembering an episodic memory with nostalgia influences delay discounting

○川口 潤¹, 中村 紘子², 鈴木 彩華¹ (1. 名古屋大学, 2. 愛知淑徳大学)

[p05] 口頭発表セッション 5 (思考・言語) Oral Presentation Session 5

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 10:20-11:50

場所: A棟2階 AS252 教室

座長: 眞嶋 良全 (北星学園大学)

本田 秀仁 (安田女子大学)

-
- [p05-001] 知覚的記憶の言語化はカテゴリ学習を妨害するか
Does verbalization of perceptual memory have disruptive effect on perceptual category learning?
○波多野 文^{1,2}, 後藤 伸彦³, 繁柁 博昭¹ (1. 高知工科大学, 2. 日本学術振興会, 3. 京都ノートルダム女子大学)
- [p05-002] 実証的根拠を欠く信念に基づいた推論とその文化差
On the reasoning based on empirically suspect beliefs and its cultural difference
○眞嶋 良全 (北星学園大学)
- [p05-003] どこまで「他人の視点」に立てるか?
— 個人内で集合知を生み出す手法の有効性と限界 —
How much can we take other's perspective? : Effectiveness and limit of methods for exploiting 'wisdom of crowds in one mind'
○藤崎 樹¹, 本田 秀仁², 植田 一博¹ (1. 東京大学大学院総合文化研究科, 2. 安田女子大学心理学部)
- [p05-004] 話し手の比喩表現の選択に与える主題-喩辞の共有特徴の量
Number of topic-vehicle shared features affects speaker's choice of metaphor
○岡 隆之介, 楠見 孝 (京都大学大学院教育学研究科)
- [p05-005] ゾロ目の数値配列が判断・意思決定に与える影響
Effect of repdigit on judgments and decisions
○本田 秀仁¹, 松永 聡太², 植田 一博² (1. 安田女子大学, 2. 東京大学)
-

[pO6] 口頭発表セッション 6 (社会的認知) Oral Presentation Session 6

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月1日(土) 10:20-11:50

場所: A棟2階 AS257 教室

座長: 乾 敏郎 (追手門学院大学)

楠見 孝 (京都大学)

-
- [pO6-001] 空間的視点取得と他者の心的経験の推測との関連についての検討
Spatial perspective taking and social perspective taking
○神原 歩¹, 辻川 典文² (1. 京都学園大学, 2. 神戸親和女子大学)
- [pO6-002] 感覚運動皮質における指運動の実行と観察間での共有表象
Shared representation between executed and observed finger movements in human primary sensorimotor cortex
○西田 周平, 小川 健二 (北海道大学大学院文学研究科)
- [pO6-003] 観察者の姿勢による視点取得時の仮想的身体移動方向の制限
Imaginary body movement in spatial perspective-taking is limited by observation posture
○前川 亮, 岡 純輝, 乾 敏郎 (追手門学院大学)
- [pO6-004] 人と AI 協働社会の認知に及ぼすコンピュータ経験と不安の影響
Perception of human-AI collaboration: The impact of computer experience and anxiety
○楠見 孝, 西川 一二 (京都大学大学院教育学研究科)
- [pO6-005] 視点取得機構のシミュレーション仮説の検討
- 乗り物酔い感受性との関係 -
New evidence for a simulation hypothesis for the perspective-taking mechanism:
Relationship to motion sickness
○乾 敏郎, 寺前 ひかり, 杉浦 優衣, 前川 亮 (追手門学院大学)
-

[pP1] ポスター発表セッション 1 Poster Presentation Session 1

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時 : 9月1日(土) 12:00-14:30

場所 : B棟1階 イベントホール

在席責任時間 : 奇数番号 12:00-12:45, 偶数番号 13:45-14:30

Date : September 1, 12:00-14:30 (JST), including lunch break (60 minutes)

Venue : Building B, 1st Floor, Event Hall

Author Present Time (45 minutes):

Odd Authors Present: 12:00-12:45 Even Authors Present: 13:45-14:30

- [pP1-001] 褒め言葉がハンドグリップ課題の動機づけに及ぼす効果
Effects of Praises on Motivation in a Hand-Grip Task
○入野 宏¹, 中井 由希子² (1. 大阪大学大学院人間科学研究科, 2. 大阪大学人間科学部)
- [pP1-002] 自伝的記憶の無意図的想起による気分の改善
The mood repair effect of involuntary autobiographical memories
○橋本 淳也¹, 金山 範明^{2,3}, 宮谷 真人¹, 中尾 敬¹ (1. 広島大学大学院教育学研究科, 2. 産業技術総合研究所人間情報研究部門, 3. 広島大学社会産学連携室)
- [pP1-003] 幾何学図形のもつ感情価が視覚的短期記憶過程に与える影響
Emotional valence included in simple geometric shapes affects the process of visual short-term memory
○竹島 康博 (同志社大学)
- [pP1-004] 自伝的記憶における罪悪感に行為の有無が与える影響
Effects of action or inaction on feeling of guilt in autobiographical memory
○岩田 沙恵子^{1,2}, 古賀 あゆみ³, 月浦 崇¹ (1. 京都大学大学院人間・環境学研究科, 2. 日本学術振興会, 3. 京都大学総合人間学部)
- [pP1-005] 感情を伴ったエピソード的未来思考の潜在的な影響
ー感情プライミング課題を用いた検討ー
The implicit effects of episodic future thinking with emotion: Investigation with affecting priming task
○西岡 大貴 (京都大学)

- [pP1-006] 表情認知における微表情の影響
The influence of micro-expressions on facial expression recognition
○茶谷 研吾 (九州大学大学院人間環境学府, 日本学術振興会)
- [pP1-007] 操作経験が行為と結果の主観的な時間間隔に及ぼす影響
The influences of prior experiences on interval estimation between action and event
○脇浜 幸則, 山本 健太郎 (九州大学)
- ◆ [pP1-008] 異人種顔画像の表情とその割合が対象の選好判断に及ぼす影響
The influence of facial expressions and its ratio of other race faces on preference judgment
○布井 雅人¹, 吉川 左紀子² (1. 聖泉大学, 2. 京都大学)
- [pP1-009] 音声による羞恥感情の伝達
－羞恥の程度と種類が同定成績に及ぼす影響－
The transmission of shame via speech: The influence of the extent and type of shame on identification performance
○オウ ゲツ (法政大学)
- [pP1-010] 接近一回避動機づけを測る潜在連合テスト (IAT) の比較
Comparing two types of implicit association tests to measure the approach-avoidance motivation
○八木 佑都, 富田 瑛智, 入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- [pP1-011] 日本人の触覚による情動知覚
Emotion perception from touch in Japanese
○大屋 里佳, 田中 章浩 (東京女子大学)
- [pP1-012] 聴覚刺激の感情価と覚醒度が再認記憶に与える影響
The Effects of Valence and Arousal on Recognition Memory for Auditory Stimuli
○楊 琬璐, 柏原 志保, 中尾 敬, 宮谷 真人 (広島大学大学院教育学研究科)
- [pP1-013] 音楽聴取による感動のメカニズム
A mechanism of strong experiences in music listening
○安田 晶子¹, 黒澤 駿², 増田 有紀², 小方 博之¹ (1. 成蹊大学理工学部, 2. 元成蹊大学理工学部)
- [pP1-014] 架空エピソードの生成における気分一致記憶の検討
Investigation of Mood Congruency Memory in generation of fictional episode
○野村 拓央¹, 兵藤 宗吉² (1. 名城大学大学院人間学研究科, 2. 中央大学文学部)

- [pP1-015] Navon 図形の見え方
– 刺激の提示時間と観察者の気分の効果 –
Visual appearance of Navon figure: The effects of stimulus exposure duration and observer's mood state
○村上 嵩至 (立命館大学)
- [pP1-016] 記憶の語り直し方略が将来への希望感に与える影響
The effect of strategies of retelling about life experiences on feeling of hope
○池田 和浩¹, 川崎 弥生², 佐藤 拓³ (1. 尚絅学院大学, 2. 日本学術振興会・専修大学, 3. 明星大学)
- [pP1-017] 報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響
Influence of reward on recall error in self-choice learning
○鍋田 智広 (九州女子大学)
- [pP1-018] 懐かしさ感情は購買行動を促進するのか
Can nostalgia stimulate consumer behavior?
○向居 暁 (県立広島大学)
- [pP1-019] 情動喚起語に対する評定による符号化の効果 I
– 喚起された覚醒度と音韻処理との比較 –
Effects of encoding by rating for emotional words I: Comparing evoked arousal to phonological processing
○加藤 みずき¹, 藤田 哲也² (1. 多摩大学経営情報学部, 2. 法政大学文学部)
- [pP1-020] 情動喚起語に対する評定による符号化の効果 II
– 喚起された覚醒度と自己関連処理との比較 –
Effects of encoding by rating for emotional words II: Comparing evoked arousal to self-referent processing
○藤田 哲也¹, 加藤 みずき² (1. 法政大学文学部, 2. 多摩大学経営情報学部)
- [pP1-021] 自由再生における BGM 文脈依存効果におよぼすボーカルの影響
Influences of vocals on the background-music dependent effect in free recall
○漁田 武雄¹, 漁田 俊子¹, 久保田 貴之¹, 日隈 美代子¹, 劉 暁旭², 小堀 翔平³
(1. 静岡産業大学, 2. 三菱電機インフォメーションシステムズ, 3. 日本銀行)
- [pP1-022] ビデオ文脈依存再生における分散効果と学習時間効果
Spacing effect and study-time effect in video context-dependent recall
○久保田 貴之, 漁田 俊子, 日隈 美代子, 漁田 武雄 (静岡産業大学経営学部)

- [pP1-023] 音楽に対する印象は楽曲種別によらず好みを規定するか？
Are there impression items that determine the preference of music independently of the musical genres?
○尾田 政臣¹, 京屋 郁子² (1. 立命館大学文学部, 2. 立命館大学総合心理学部)
- [pP1-024] 観察時の体勢は身体の心的操作に影響するのか？
Does body posture affect mental transformation of bodies?
○景山 望 (海上自衛隊潜水医学実験隊)
- ◆ [pP1-025] 空間操作と長期記憶の双方と関係が強い新しいイメージ課題の提案
A new imagery task strongly related to both spatial manipulation and long-term memory
○森本 琢 (北海道大学)
- [pP1-026] 身体意識は手の身体モデルの学習に影響するのか？
Does bodily self-consciousness affect internal model learning of the human hand?
○中山 友瑛¹, 秋丸 雄祐², 片山 正純² (1. 福井大学工学部, 2. 福井大学大学院工学研究科)
- ◆ [pP1-027] 他者受容性が準自動運転システムにおける切替行動に及ぼす影響
Influence of Acceptance of Others on Switching Behavior in Semi-Autonomous Driving System
○久保 克弘, 西崎 友規子 (京都工芸繊維大学)
- ◆ [pP1-028] 自動車運転中のマルチタスク遂行とワーキングメモリ容量の個人差
Multitask performances during driving and individual differences in working memory
○西崎 友規子¹, 永井 聖剛² (1. 京都工芸繊維大学, 2. 立命館大学)
- [pP1-029] 顔の一致・不一致判断課題における違和感の喚起と認知処理過程
Cognitive processing of a strange feeling in a face-matching task
○山田 悠介, 小川 景子 (広島大学大学院総合科学研究科)
- [pP1-030] 刺激サイズが最大握力発揮の持続に与える影響
The effect of stimulus size on duration for maximum handgrip force
○永井 聖剛¹, 山田 陽平², 金谷 英俊¹, 川上 直秋³, 西崎 友規子⁴ (1. 立命館大学, 2. 愛知学泉大学, 3. 島根大学, 4. 京都工芸繊維大学)

- [pP1-031] 事象関連電位を用いた特徴類似性による群化過程の追跡
Time course of grouping processes due to feature similarity by indexing event-related potentials
○蒔苗 詩歌^{1,2}, 河西 哲子^{3,4}, 北城 圭一⁴ (1. 北海道大学大学院教育学院, 2. 日本学術振興会, 3. 北海道大学大学院教育学研究院, 4. 理化学研究所脳神経科学研究センター)
- [pP1-032] 動作と結果の対応性が intentional binding に与える影響
The influence of action and result correspondence on intentional binding
○修 恵迪, 山本 健太郎 (九州大学)
- [pP1-033] 変化刺激と不変刺激の比率による注意の捕捉
Attentional Capture due to the Ratio of Changing to Static Stimuli
○小野 史典 (山口大学)
- [pP1-034] かわいい画像における境界拡張
Boundary extension for cute images
○猪股 健太郎, 長田 典子 (関西学院大学)
- [pP1-035] 嗅覚の手がかりによる無意図想起の特性に加齢が及ぼす影響
— OEAMQ を用いた検討 —
Influences of aging on involuntary autobiographical memory evoked by odor
○山本 晃輔 (大阪産業大学)
- [pP1-036] 日本語のモーラ数を計数するシェルスクリプトプログラムの提案
A shell script program that counts the Japanese mora
○石黒 翔^{1,2}, 齊藤 智¹ (1. 京都大学教育学研究科, 2. 日本学術振興会)
- [pP1-037] 地図の向きに対する選好性と言語的経路指示
Preference for map orientation and verbal route descriptions
○小島 隆次 (滋賀医科大学)
- ◆ [pP1-038] テキストコミュニケーションにおける感情表現支援システムの開発
— メッセージで表現したい感情によって表情を変えるマンガの利用 —
Development of an emotive manga-style character for emotional expression in electronic text communications
○竹内 俊彦¹, 加藤 由樹², 加藤 尚吾³, 小澤 康幸⁴ (1. 東京福祉大学, 2. 相模女子大学, 3. 東京女子大学, 4. 明星大学)

[pP1-039] テキストベースのコミュニケーションにおける感情伝達

－実際の感情状態と相手に伝えたい感情のずれ－

Gaps between felt emotions and those intended to be conveyed in text-based electronic communication

○小澤 康幸¹, 加藤 由樹^{2,4}, 加藤 尚吾^{3,4} (1. 明星大学, 2. 相模女子大学, 3. 東京女子大学, 4. 教育テスト研究センター)

◆ [pP1-040] LINE グループにおいて返信ができないことで生じるネガティブ感情

－グループの種類及び既読／未読がネガティブ感情の生じるまでの時間に及ぼす影響－

Negative emotions arising with inability to reply quickly in LINE group communication:

Effects of group type and read message status on the time until negative emotions occur

○宇宿 公紀¹, 加藤 尚吾², 小澤 康幸³, 加藤 由樹⁴ (1. 東京都立瑞穂農芸高等学校, 2. 東京女子大学, 3. 明星大学, 4. 相模女子大学)

4. 9月2日(日) Events at September 2 (Sunday)

立命館大学認知科学研究センター企画シンポジウム

本当に認知研究は説明実践に貢献してきたのか？

— 「分かりやすい説明」をめぐるアポリアへの挑戦 —

日時 : 2018年9月2日(日) 8時40分～10時10分

場所 : A棟2階 AC231教室

企画 : 山本 博樹 (立命館大学)・吉田 甫 (立命館大学)・織田 涼 (東亜大学)

司会 : 山本 博樹 (立命館大学)・吉田 甫 (立命館大学)

話題提供者 :

伊藤 貴昭 (明治大学)

島田 英昭 (信州大学)

深谷 達史 (広島大学)

指定討論者 :

楠見 孝 (京都大学)

市川 伸一 (東京大学)

概要 :

説明 (explain) とは「説いて」「明らかにする」という支援行為であり、理解不振の把握と改善を本質的な要素とする (山本, 2017)。この理解不振の把握と改善という問題は、説明研究の源流である科学哲学が認知科学や認知心理学に助けを求めた難題であったはずである (Wilson & Keil, 2000)。ところが、説き手は豊かな既有知識を活用して相手の理解を捏造してしまうという Norman (1988) の憂慮を無視するかのようになり、「分かりやすい説明」がいとも容易く実現できると喧伝する向きがある。彼の言うように、説き手が相手の理解状態を都合よく捏造するのならば、相手の理解不振の把握も改善も望むべくも無く、身勝手に「分かりやすい説明」を押しつけるだけになってしまう (確かに説明と自己主張を混同する風潮はある)。要するに、最初から説明行為は無効に終わることが確約されるという袋小路 (アポリア) に陥るのである。こうしたアポリアを解消するために、説明研究者はどのような挑戦を続けてきたのか。今回のシンポでは、豊富な研究経験を持つ発表者に「説いて明らかにする」という原義に即した研究事例を報告頂き、これを踏まえて「分かりやすい説明」をめぐるアポリアをいかに解消すべきかを議論したい。

[pO7] 口頭発表セッション7 (知覚・感性 2) Oral Presentation Session 7

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月2日(日) 8:40-10:10**場所:** A棟2階 AS251 教室**座長:** 福井 隆雄 (首都大学東京)

中島 亮一 (東京大学)

-
- [pO7-001] 手幅の変化に応じた手の大きさの見積もりについて
Hand width estimation: Examining change in hand width
○多田 美香里 (関西福祉科学大学)
- [pO7-002] 撫でる人の性別・親密度がラバーハンド錯覚に与える影響
Effects of gender difference and familiarity of a stroking person on rubber hand illusion
○福井 隆雄, 坪井 浩一 (首都大学東京大学院)
- [pO7-003] 手動開始行動が自動制御物体の停止操作に対する主体感に与える影響
The effect of the manual start on the sense of agency for stopping the automatic control object
○中島 亮一¹, 熊田 孝恒² (1. 東京大学, 2. 京都大学)
- [pO7-004] 形態的類似性と行為の意味性が身体認識に与える影響
The influence of morphological similarity and semantics of action on body representation
○平本 亮介^{1,4}, 金山 範明^{2,3}, 宮谷 真人¹, 中尾 敬¹ (1. 広島大学大学院教育学研究科, 2. 産業技術総合研究所人間情報研究部門, 3. 広島大学社会産学連携室, 4. 日本学術振興会)
- [pO7-005] 他者の手の運動観察がくすぐったさを引き起こす
Viewing hand motion elicits tickliness
○齋藤 五大¹, 高橋 玲央², 行場 次朗¹ (1. 東北大学大学院文学研究科, 2. 東北大学大学院医学系研究科)
-

[p08] 口頭発表セッション 8 (記憶 2) Oral Presentation Session 8

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時: 9月2日(日) 8:40-10:10**場所:** A棟2階 AS252 教室**座長:** 須藤 昇 (千葉大学)

小林 正法 (関西学院大学, 応用心理科学研究センター)

-
- [p08-001] 検索による記憶痕跡の弱化
ーワーキングメモリにおける検索経験ー
Retrieval collapses memory traces: Retrieval-practice in working memory
○玉木 賢太郎, 内藤 佳津雄 (日本大学)
- [p08-002] 初期テストにおけるソースモニタリングがテスト効果に及ぼす影響
The influence of source monitoring test in the initial test on the testing effect
○長 大介 (法政大学大学院人文科学研究科)
- [p08-003] 視覚的シーンの再認に及ぼすスキーマの効果
An effect of schema on the recognition of visual scenes
○須藤 昇 (千葉大学大学院人文科学研究院)
- [p08-004] DRM パラダイムにおける虚回想の生起に関連する学習リストの性質
Characteristics of study lists related to the occurrence of false recollection in the DRM paradigm
○島根 大輔, 伊東 裕司 (慶應義塾大学)
- [p08-005] 系列記憶の検索誘導性忘却
ー事前登録による実証ー
Retrieval-induced forgetting of serial order memory: A pre-registered investigation
○小林 正法^{1,2}, 上野 泰治³, 川口 潤⁴ (1. 関西学院大学, 2. 応用心理科学研究センター, 3. 高千穂大学, 4. 名古屋大学)
-

[pO9] 口頭発表セッション 9 (英語) Oral Presentation Session 9 (in English)

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時 : 9月2日(日) 8:40-10:10

場所 : A棟2階 AS257教室

座長 : 上田 祥行 (京都大学)

Date : September 2, 8:40-10:10 (JST)

Venue : Building A, 2nd Floor, Room AS257

Session Chair : Yoshiyuki Ueda (Kyoto University)

- E [pO9-001] The Relationship between Situational Appraisal and Emotional Activity: From the Perspective of Appraisal Theory
○Shirong Sun, Takashi Kusumi (Kyoto University)
- E [pO9-002] Modeling Relationship between Older People MRI and Personalities using 3D Convolutional Neural Network
◆
○Jingxin Liu^{1, 2}, Zhenxin Wang^{1, 2}, Kaechang Park^{1, 3}, Kavous Salehzadeh Niksirat^{1, 2}, Xiangshi Ren^{1, 2} (1. Kochi University of Technology, 2. Center of Human-Engaged Computing, 3. Research Organization for Regional Alliances, 4. The Brain Checkup Center)
- E [pO9-003] Influence of Working Memory and Fluid Intelligence on the Scores of the Admission Test to the University of Costa Rica
○Claudia Araya¹, Odir Antonio Rodríguez-Villagra² (1. Graduate School of Education, Kyoto University, 2. University of Costa Rica)
- E [pO9-004] Framing effect in binary choice inference
○Qixiang Chen¹, Hidehito Honda², Kazuhiro Ueda¹ (1. University of Tokyo, 2. Yasuda Women's University)
- E [pO9-005] The influence of time perception by VR space
○Kazuma Shimokawa¹, Eriko Sugimori² (1. Graduate School of Human Sciences, Waseda University, 2. Faculty of Human Sciences, Waseda University)
-

[pP2] ポスター発表セッション 2 Poster Presentation Session 2

◆は社会連携発表, E は英語発表

日時 : 9月2日(日) 11:30-14:00
場所 : B棟1階 イベントホール (**001-080**), B棟2階 B275 & B276 (**081-104**)
在席責任時間 : 奇数番号 11:30-12:15, 偶数番号 13:15-14:00
Date : September 2, 11:30-14:00 (JST), including lunch break (60 minutes)
Venue : Building B, 1st Floor, Event Hall (Poster number: **001-080**)
 Building B, 2nd Floor, Room B275 & B276 (Poster number: **081-104**)
Author Present Time (45 minutes):
 Odd Authors Present: 11:30-12:15 Even Authors Present: 13:15-14:00

- [pP2-001] 自由に中断可能なギャンブルにおいて無謀な賭けは生じるか
 Winning experiences make gamblers reckless even when they are free to stop gambling
 ○田岡 大樹¹, 有賀 敦紀² (1. 京都大学大学院教育学研究科, 2. 広島大学大学院総合科学研究科)
- [pP2-002] 自分の顔の部位の好き嫌いが他者の魅力判断に及ぼす影響
 How face attractiveness judgements for others are changed, when people like/dislike people's own face parts?
 ○佐山 公一 (小樽商科大学商学部)
- [pP2-003] 「かわいい」対象と感情の分類
 Classification of “kawaii” objects and the “kawaii” emotion
 ○Tom Hoi Kit¹, 宮崎 拓弥², 懸田 孝一² (1. 北海道教育大学大学院 (旭川校), 2. 北海道教育大学旭川校)
- [pP2-004] 人物同定は顔と声の感情一致性によって阻害される
 Identity matching is inhibited by emotional congruency between face and voice
 ○川瀬 菜里奈^{1,2}, 田中 章浩² (1. 北海道大学大学院文学研究科, 2. 東京女子大学現代教養学部)
- [pP2-005] 協和音・不協和音による緊張度の変化パターンと感動との関係
 The relationship between temporal patterns of musical tension produced by consonant and dissonant chords and the experience of being moved
 ○佐藤 那由多¹, 具 滋関¹, 荒木 良太², 入戸野 宏³ (1. 大阪大学人間科学部, 2. 大阪大学基礎工学部, 3. 大阪大学大学院人間科学研究科)

- [pP2-006] 怒った人はリスクを好む
 – 状態怒りとフレームがリスク選好に与える影響 –
 Angry people prefer risk: Effects of state anger and frame on risk preference
 ○顧 元琪¹, 本田 秀仁², 植田 一博¹, 丹野 義彦¹ (1. 東京大学, 2. 安田女子大学)
- [pP2-007] 予測不能な機能を持つデバイスが優れている？
 – コントロール欲求が商品に対する所有感の生起や評価に及ぼす影響 –
 The effect of need for control on psychological ownership for objects
 ○井関 紗代^{1,2}, 北神 慎司¹ (1. 名古屋大学大学院情報学研究科, 2. 日本学術振興会)
- [pP2-008] 画像覚醒度が虚偽心拍フィードバックによる感情変化に及ぼす影響
 The effect of arousal level of emotion-eliciting pictures on false physiological feedback
 ○小林 亮太¹, 笹岡 貴史², 水落 亮平¹, 難波 修史¹, 宮谷 真人¹, 中尾 敬¹, 山脇 成人² (1. 広島大学大学院教育学研究科, 2. 広島大学感性イノベーション拠点)
- [pP2-009] 私たちは、どのように折り紙を折っているのか？ (25)
 – 「折り」イメージの形成が「折り」に与える影響 –
 How We Fold Origami? (25) : The effect of "folding" image formation on "folding" performance
 ○丸山 真名美 (至学館大学)
- [pP2-010] 中国人日本語学習者の漢字熟語の同音判断に構音抑制が及ぼす影響
 The effects of articulatory suppression on homophone judgments of Kanji words by Chinese learners of Japanese
 ○馬 達, 森田 愛子 (広島大学大学院教育学研究科)
- [pP2-011] 黙読における眼球運動への朗読予告による影響 その3
 – 各文の重要度に応じて –
 The Effect of Advanced Notice of Reading Aloud with Appropriate Emotions on Eye Movement during Narrative Reading: According to the Importance of a Sentence
 ○福田 由紀 (法政大学)
- [pP2-012] 音声単語認知における文脈の果たす役割に関する研究
 – 中国人日本語学習者を対象とする –
 Spoken Word Recognition Process in Context: A study of Chinese Learners of Japanese
 ○肖 婧, 森島 泰則 (国際基督教大学)
- [pP2-013] 文字列の傾きが引き起こす反応干渉効果
 An interference effect of orientation of letter strings on word recognition
 ○羽生 奈央¹, 寺尾 将彦², 小野 史典² (1. 大阪大学生命機能研究科, 2. 山口大学)

- [pP2-014] 限定ラベルの顕在的・潜在的呈示が商品選好に及ぼす影響
The effects of explicit/implicit presentation of limited sales labels on product preference
○河原 哲雄 (埼玉工業大学)
- [pP2-015] 日本語の読みにおける近中心窩での意味情報抽出の可能性
Parafoveal semantic information extraction in reading Japanese
○Komatsu Yoshitaka (Seoul National University)
- [pP2-016] ハイリスク投資における未来予測の認知特性
－FX 投資経験者のチャートに基づく判断－
Cognitive characteristics of prediction in high-risk investment: Judgments of FX investors based on charts
○篠原 恵, 富田 瑛智, 森川 和則 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- [pP2-017] 漢字表記語処理において周辺情報は常に活性化されるのか (2)
Is peripheral information invariably activated while processing kanji words?: Part 2
○水野 りか, 松井 孝雄 (中部大学人文学部)
- [pP2-018] 単語の心像性が反応時間と事象関連電位に及ぼす効果
The effects of word imageability on reaction times and event-related potentials
○小川 勇也, 入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- [pP2-019] [発表取消]
- ◆ [pP2-020] 確率的逆転学習課題における潜在構造の学習を通じた正答率の上昇
The increase of an accuracy rate through learning a latent structure in a probabilistic reversal learning task
○真隅 暁, 佐藤 尚 (沖縄工業高等専門学校メディア情報工学科)
- [pP2-021] 平均顔を用いた魅力度別顔刺激作成の試み
Attempt to make face stimuli by attractive degree using average faces
○高見沢 美咲 (法政大学)
- [pP2-022] 丸メガネをかけるとポカポカ暖かく感じる
Wearing round eyeglasses makes us feel warmer
○岡村 靖人^{1,2}, 浦 光博^{1,3} (1. 追手門学院大学大学院心理学研究科, 2. 日本学術振興会, 3. 追手門学院大学心理学部)

- [pP2-023] モラルジレンマ判断に過去・未来の自己イメージが及ぼす影響
Effects of thinking about the past or future self on moral dilemma judgments
○中村 紘子 (愛知淑徳大学)
- [pP2-024] 怒りを感じる嫌悪的冗談に対する聞き手の反応と自尊感情, 話し手との親密度, 性差の関連
The relation of listeners' reactions for aversive jokes to self-esteem of listeners, intimacy between speakers and listeners, gender gap
○井上 毅, 大西 はるか (滋賀大学教育学部)
- [pP2-025] 同性他者の感情推定における体現的シミュレーションの選択性
Selective embodied simulation found in emotion estimation only from facial expression of the same sex
○山添 貴志, 前川 亮, 乾 敏郎 (追手門学院大学心理学研究科)
- [pP2-026] 笑顔が一番
－感情表出が心の帰属に与える影響－
Happy makes human: Emotional expression modulate the mind attribution
○齊藤 俊樹^{1,2}, Steven Almaraz³, Kurt Hugenberg³ (1. 東北大学, 2. 日本学術振興会, 3. マイアミ大学)
- [pP2-027] 認知加齢と人工物利用: 縦断研究による検討
A Longitudinal study about cognitive aging and usage of artifacts in daily life
○水浪 田鶴¹, 原田 悦子¹, 須藤 智² (1. 筑波大学, 2. 静岡大学)
- [pP2-028] 系列動作の自動的模倣に対する空間的適合性の影響
The effect of spatial compatibility on automatic imitation in serial arm movements
○井藤 寛志 (愛知大学文学部)
- [pP2-029] 共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的評価
Explicit and implicit attitudes toward standard Japanese and Osaka dialect
○山内 健司¹, 伊藤 資浩^{1,2}, 河原 純一郎¹ (1. 北海道大学, 2. 日本学術振興会)
- [pP2-030] 共同サイモン課題による we-mode が自己主体感に及ぼす影響
Sense of agency mediated by “we-mode” in the joint Simon task
○矢島 由理恵, 梅田 聡 (慶應義塾大学)

- [pP2-031] コンピュータ制御の排斥者が情緒的メッセージ作用へ与える影響
 PERCEPTION OF “COMPUTER-GENERATED SOCIAL EXCLUDERS” AS HUMAN
 MODULATES THE EFFECTS OF EMOTIONAL MESSAGES FOR EXCLUDED
 PEOPLE
 ○山縣 豊樹¹, 片山 順一^{2,3}, 村田 明日香¹ (1. 北海道大学大学院文学研究科, 2. 関西
 学院大学文学部, 3. 関西学院大学応用心理科学研究センター)
- [pP2-032] 高齢者の自己身体知覚
 – ラバーハンド/フット錯覚を用いた検討 –
 Body perception in older adults: A study using rubber hand/foot illusion
 ○秀 美保¹, 寺本 渉² (1. 熊本大学大学院社会文化科学研究科, 2. 熊本大学大学院人文
 社会科学研究部)
- [pP2-033] インタラクティブ・イメージにおける優勢モダリティの検討
 Investigation of the prior modalities in 'Interactive Imagery'
 ○福井 晴那¹, 望月 聡² (1. 筑波大学人間総合科学研究科, 2. 法政大学現代福祉学部)
- [pP2-034] モバイル型簡易脳波計 Emotiv EPOC+による顔に対する N170 成分の計測の信頼
 性
 Reliability of N170 ERP component measured by Emotiv EPOC+
 ○秋元 頼孝 (長岡技術科学大学)
- [pP2-035] ペットボトルパッケージによる味覚プラシーボ効果と対象者の特性
 The Placebo effect of containers on the taste: From the viewpoint of the characteristics of
 the subjects
 ○三雲 真理子, 松井 萌美 (梅花女子大学心理こども学部心理学科)
- ◆ [pP2-036] 瞳のリンバルリングが魅力判断に及ぼす影響
 Asians face with dark limbal ring influences facial attractiveness
 ○蔵富 恵, 吉崎 一人 (愛知淑徳大学心理学部)
- [pP2-037] 親しい人は近く見える？
 Does close friends look closer?
 ○大藤 弘典 (広島国際大学)
- [pP2-038] 自由選択課題における意思決定タイミングの誤認
 Misperception of the timing of decision making in a free choice task
 ○水原 啓太¹, 武藤 拓之^{1,2}, 入戸野 宏¹ (1. 大阪大学大学院人間科学研究科, 2. 日本
 学術振興会)

- [pP2-039] 韓国語の平音に対する韓国語話者と日本語話者の知覚差
Perceptual difference in hearing the Korean lenis stop between Korean and Japanese speakers
○成 儒彬, 光藤 宏行 (九州大学大学院人間環境学府)
- [pP2-040] 色および情動による時間知覚への影響
The influence of color and emotion on temporal perception
○清水 千景, 小川 洋和 (関西学院大学)
- [pP2-041] マスク刺激による時間短縮効果における形態的類似性の調整効果
The modulation effect of topological similarity of the time compression effect induced by visual masking
○朝岡 陸¹, 行場 次朗² (1. 金沢大学人間社会学域, 2. 東北大学大学院文学研究科)
- ◆ [pP2-042] ノスタルジアが時間知覚に与える影響
The effect of nostalgia on time perception
○談 尚, 山本 健太郎 (九州大学)
- [pP2-043] 行為結果のフィードバックは行為主体感を遡及的に変調する
Feedback of action outcome retrospectively influences sense of agency
○大石 博之¹, 田中 観自², 渡邊 克巳¹ (1. 早稲田大学, 2. 早稲田大学高等研究所)
- [pP2-044] 日本人女性における若々しい顔印象の認知構造
Cognitive structure of youthfulness in Japanese female faces
○平 あき津¹, 南 浩治¹, 五十嵐 崇訓¹, 行場 次朗² (1. 花王株式会社スキンケア研究所, 2. 東北大学大学院文学研究科)
- [pP2-045] VR空間における擬似触覚経験とその主観的評価
Pseudo-haptics in virtual reality and its subjective evaluation
○鈴木 健斗, 福井 隆雄 (首都大学東京大学院)
- [pP2-046] 自然環境音のサンプリング周波数が人間の心理・生理状態に及ぼす影響
Effects of the sampling rate of natural environmental sounds on listeners' psychophysiological states
○大湾 麻衣¹, 入戸野 宏² (1. 大阪大学人間科学部, 2. 大阪大学人間科学研究科)

- [pP2-047] 刺激呈示時間が長くなるほどベクションの強度が強くなる
 Vection strength is enhanced by increased exposure to optic flow
 ○金谷 英俊^{1,2}, 妹尾 武治³, 村田 佳代子⁴, 藤井 芳孝^{1,3}, 小川 将樹^{3,5}, 徳永 康祐³, Stephen Palmisano⁶ (1. 立命館大学, 2. 愛知淑徳大学, 3. 九州大学, 4. 慶應義塾大学, 5. 三重大学, 6. University of Wollongong)
- ◆ [pP2-048] VR を用いた疑似的自己移動を伴うゲームが高齢者の認知機能に及ぼす影響
 Effects of a virtual reality game accompanying pseudo self-movement on cognitive functions in older adults
 ○神田 将寿¹, 寺本 渉² (1. 熊本大学大学院社会文化科学研究科, 2. 熊本大学大学院人文社会科学研究部)
- [pP2-049] バーチャルリアリティを用いた有効視野外の視覚探索に関する研究
 A study of visual search outside the functional visual field using virtual reality
 ○原田 佑規, 大山 潤爾 (国立研究開発法人産業技術総合研究所)
- [pP2-050] 後方空間における奥行き注意移動
 – 現実空間と鏡空間の比較 –
 Shift of attention in depth direction in real and mirrored spaces
 ○木村 貴彦¹, 篠原 一光², 北村 昭彦², 紀ノ定 保礼³ (1. 関西福祉科学大学, 2. 大阪大学, 3. 静岡理工科大学)
- [pP2-051] 報酬連合刺激に対する空間的注意の持続性
 Persistence of spatial attention to reward-associated stimuli
 ○峯 知里^{1,2}, 齋木 潤¹ (1. 京都大学, 2. 日本学術振興会)
- [pP2-052] 顔の魅力は視覚探索を妨害する
 Facial attractiveness interferes with visual search
 ○村井 麻里子¹, 黒木 大一朗², 光藤 宏行³ (1. 九州大学大学院人間環境学府, 2. 九州大学文学部, 3. 九州大学大学院人間環境学研究院)
- [pP2-053] 道具を用いた把持行為の観察が視覚的注意に与える影響
 Observation of grasping action toward daily objects with tools influences observer's visual attention
 ○望月 正哉¹, 太田 直斗² (1. 日本大学文理学部, 2. 日本大学大学院文学研究科)

- [pP2-054] 注意欠如多動性障害と行動リズムの変動性の関係
Relationship between Attention-Deficit Hyperactivity Disorder and variability of behavior rhythm
○衣巻 頌子¹, 宮内 英里², 川崎 真弘² (1. 筑波大学システム情報工学研究科, 2. 筑波大学システム情報工学系)
- [pP2-055] かわいい画像や動画を見ることは注意を広げるか
Does viewing cute images and movies extend attention?
○井関 龍太 (大正大学)
- [pP2-056] 聴覚刺激の同時呈示が視覚刺激を用いた記憶課題に及ぼす効果
The effect of simultaneous presentation of auditory stimuli on visual memory task
○江口 愛実, 小川 景子 (広島大学大学院総合科学研究科)
- [pP2-057] 閾上および閾下矢印による注意シフトと物体好意度の増加
Attentional shift and increase of object likeability by supraliminal and subliminal arrow cues
○満田 隆, 大谷 実央 (立命館大学)
- [pP2-058] 学習スタイルとパーソナリティの関係
Relationship between learning styles and personalities
○田中 優貴, 寺澤 孝文 (岡山大学大学院教育学研究科)
- [pP2-059] 字がきたないと、レポートの評価は低くなるか
The effect of bad handwriting on the score of reports
○中嶋 淳美, 前峠 太郎, 宇野 辰悟, 須原 玲奈, 前田 悠一郎, 室井 みや (兵庫医科大学医学部)
- [pP2-060] doc2vec を用いた国語力の定量化の検討
Measuring reading comprehension using doc2vec
○鈴木 千尋, 佐藤 直行 (公立はこだて未来大学)
- [pP2-061] 幼児は文字から色表象を形成できるのか
- 新ストロープ検査を用いた検討 -
Can children in Japanese kindergarten make color images from hiragana? : Using standardized stroop task
○田中 大介, 小松 真由子 (鳥取大学)

- ◆ [pP2-062] システムキッチンの使いやすさ？
 – 年齢群比較と調理経験の効果 –
 Usability testing of built-in kitchen: How ageing and cooking expertise affect?
 ○田中 伸之輔¹, 渡邊 芙樹², 原田 悦子³ (1. 筑波大学大学院人間総合科学研究科,
 2. 筑波大学人間学群, 3. 筑波大学人間系)
- [pP2-063] 回答者の誤答は問題呈示者の学習を阻害するか？
 Do erroneous answers of a respondent hinder learning of a tester?
 ○岩木 信喜¹, 鈴森 玲香¹, 富澤 美月¹, 菊池 章¹, 高橋 功², 田中 紗枝子³, 山本
 奨¹ (1. 岩手大学, 2. 山陽学園大学, 3. 徳島文理大学)
- [pP2-064] モーツァルト効果の再検証
 – モーツァルト曲同士の比較検証 –
 A study of the Mozart Effect, compared with the several works of Mozart
 ○林 美都子, 阿部 貴弘 (北海道教育大学)
- [pP2-065] L T D話し合い学習法が学習に対する自己評価に及ぼす影響
 Effects of LTD (Learning Through Discussion) on self-evaluation
 ○伊藤 美加 (京都光華女子大学こども教育学部)
- [pP2-066] ライフログ収集ツールの使いやすさ
 – その超個人的性質 –
 Long-term usability of life-log tools: Its super personalization
 ○高橋 秀明 (放送大学)
- [pP2-067] 幼児による写真表現の特徴に関する探索的研究
 – デジタルカメラを用いて撮影された画像データに焦点を当てて –
 Exploratory study on features of expression in photos taken by young children: Focusing
 on image data photographed using digital cameras
 ○多田 幸子 (山梨県立大学)
- [pP2-068] 認知科学との関係性を考える認知心理学教育に向けて
 Developing cognitive psychology course to motivate learners to consider the relationship
 with cognitive science
 ○田中 孝治, 日高 昇平 (北陸先端科学技術大学院大学知識科学系)
- E [pP2-069] Effect of negative valence on spatial and non-spatial working memory
 ○Seonkyoung Lee¹, Wonil Choi², Yuna Seo³, Yoonhyoung Lee¹ (1. Yeungnam University,
 2. GIST College, 3. Kyungnam University)

- E [pP2-070] Effect of positive affect on the maintenance and monitoring of working memory
 ○Youngji Hong¹, Yoonhyoung Lee¹, Jinwoo Seok², Taehoon Kim² (1. Yeungnam University, 2. Kyungnam University)
- E [pP2-071] Selective attention in Kanji recognition: An eye movement study
 ○Yoko Okita (Juntendo University)
- E [pP2-072] Reading spaced and unspaced Korean text: Evidence from eye tracking during reading
 ○Eunjin Seong, Hyosun Lee, Jaeboong Ann, Wonil Choi (Gwangju Institute of Science and Technology)
- E [pP2-073] Effects of visual complexity are jointly modulated by word frequency and syllabic structure in Korean visual word recognition
 ○Hyosun Lee¹, Eunjin Seong¹, Hojung Shin¹, Taehoon Kim², Wonil Choi¹ (1. Gwangju Institute of Science and Technology, 2. Kyungnam University)
- E [pP2-074] Differences in metacognitive monitoring by regulatory focus when performing a word-pair learning task
 ○Hyemi Song¹, Ye-eun Nam², Heejeong Woo¹, Yoonhyoung Lee² (1. Kyungnam University, 2. Yeungnam University)
- E [pP2-075] When does hindsight bias occur more often for one's own judgment or for other's?
 ○Nawon Park¹, Eunjin Kwon², Lisa K. Son³, Tae Hoon Kim¹ (1. Kyungnam University, 2. Yeungnam University, 3. Barnard College)
- E [pP2-076] The word-length effect in reading Hangul words
 ○Kwangoh Yi, Sungbong Bae (Yeungnam University)
- E [pP2-077] Preliminary study regarding evaluation of food images in two exposure conditions (free vs. time-controlled exposure)
 ○Johan Lauwereyns, Alexandra Wolf, Kajornvut Ounjai (Graduate School of Systems Life Sciences, Kyushu University)
- E [pP2-078] Inefficient visual search requires observer's nasal respiration
 ○Naoto Yoshimura¹, Fumiya Yonemitsu¹, Fernando Marmolejo-Ramos², Yuki Yamada³
 (1. Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, 2. School of Psychology, The University of Adelaide, 3. Faculty of Arts and Science, Kyushu University)

- E [pP2-079] Lexical prosodic representation and awareness in Japanese children with developmental dyslexia compared to chronological age controls
○Michiru Iwata^{1,2}, Ayumi Seki³ (1. Graduate School of Education, Hokkaido University, 2. JSPS Research Fellow, 3. Faculty of Education, Hokkaido University)
- E [pP2-080] Fovea and Parafovea Information Processing in Reading: Eye Movement Tracking Study
○Hyeree Choo, Sungryong Koh (Seoul National University)
- [pP2-081] 空間性記憶課題としての Corsi Block 課題と Dots 記憶課題の違い
– 画面サイズと刺激系列の交差に注目して –
Differences between the corsi task and the dots task in spatial memory
○須藤 智 (静岡大学)
- [pP2-082] 実行機能ネットワークテストの考案
Measuring executive function network
○阿部 千裕¹, 河地 庸介² (1. 東北大学, 2. 東北福祉大学)
- [pP2-083] 日本人を対象とした自伝的記憶の機能における世代差と性差の検討
Examining Differences of Age and gender on the functions of autobiographical memory with Japanese participants
○横 洋一¹, 川崎 弥生^{2,3} (1. 北海道大学, 2. 日本学術振興会, 3. 専修大学)
- [pP2-084] 刺激提示時間が再生と再認における検索誘導性忘却におよぼす効果
Effects of presentation time during learning on retrieval-induced forgetting in recall and recognition tests
○星野 祐司¹, 堀内 久美子² (1. 立命館大学, 2. 石友リフォームサービス)
- [pP2-085] 語長と頻度が学習直後の順序の再構成課題に及ぼす影響
Effects of word length and word frequency in immediate order reconstruction task
○都賀 美有紀 (立命館大学)
- [pP2-086] 日常生活における記憶行動の自己評価と検査室場面における記憶成績の予測との関係
Relationship between self-assessment of memory behavior in everyday life and prediction of memory performance in test room situations
○清水 寛之 (神戸学院大学)
- [pP2-087] 記憶の検索は競合する記憶の抑制によって促進されるか
Is memory retrieval facilitated by suppressing competitive memories?
○西山 慧^{1,2}, 齊藤 智¹ (1. 京都大学, 2. 日本学術振興会)

- [pP2-088] 繰り返し再認判断が確信度評定に与える効果
The effect of repeated recognition judgement on confidence rating
○高橋 晃 (静岡大学)
- [pP2-089] 英語学習者向け代名詞処理を伴うリーディングスパンテストの開発
Developing a Reading Span Test for English Learners Involving Pronoun Resolution
○浅見 紫織¹, ダグラス ローランド², 森島 泰則³ (1. 国際基督教大学大学院, 2. 早稲田大学, 3. 国際基督教大学)
- [pP2-090] 視空間 Hebb 反復学習における時間的グルーピングの効果
Temporal grouping effects on visuospatial Hebb repetition learning
○助川 桃枝, 上田 祥行, 齊藤 智 (京都大学)
- [pP2-091] 日常場面における現実と想像との混乱に関する自己評価
ーリアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙, 日常記憶質問紙, 及び失敗傾向質問紙を用いてー
Self assessment of everyday reality monitoring error: Using the Reality-Monitoring Error Experience Questionnaire, the Everyday Memory Questionnaire, the Cognitive Failures Questionnaire
○中田 英利子 (神戸女学院大学)
- [pP2-092] エンディングノートにおける自伝的推論
Autobiographical reasoning in a booklet of an informal living will
○下島 裕美 (杏林大学)
- [pP2-093] 日常生活における高齢者の忘却に関する認識
Older adults' metacognition of forgetting in everyday life
○堤 聖月 (神戸学院大学大学院人間文化学研究科)
- [pP2-094] 音読の何が記憶を促進するのか?
ー構音運動と音声情報の役割ー
The role of articulatory movements and speech feedback in the production effect
○丹藤 克也 (愛知淑徳大学)
- [pP2-095] 偶発記憶における内的連想反応による分散効果
Spacing effects by implicit associative response in incidental memory
○豊田 弘司 (奈良教育大学)

- [pP2-096] 眼鏡の有無が顔の再認記憶に与える影響
－眼鏡着脱についての教示効果の検討－
Influence of presence or absence of eyeglasses on facial recognition memory: Effects of instructions regarding the addition or subtraction of eyeglasses
○富田 瑛智¹, 中垣内 遼¹, 松下 戦具², 森川 和則¹ (1. 大阪大学, 2. 大阪樟蔭女子大学)
- [pP2-097] 反復的な学習-再認課題における記憶手がかりの形成過程
Formation process of memory cues on iterative learning - recognition task
○山根 嵩史 (川崎医療福祉大学医療福祉学部)
- [pP2-098] 超高速逐次視覚呈示における順序逆転傾向と加齢の影響
Tendency of temporal order reversal in very rapid serial visual presentation and influence of aging
○高瀬 愛理^{1,2}, 大山 潤爾^{1,2} (1. 産業技術総合研究所, 2. 筑波大学)
- [pP2-099] 個人特性および予期に着目した人違い現象の検討
Examining the person misidentification focusing on individual characteristics and expectation
○三浦 大志¹, 島根 大輔², 伊東 裕司² (1. 杏林大学, 2. 慶應義塾大学)
- [pP2-100] 視覚的情動喚起が耳撃記憶に与える影響
The effect of emotional photographs on earwitness memory
○河本 侑己¹, 越智 啓太² (1. 慶應義塾大学大学院社会学研究科, 2. 法政大学文学部)
- [pP2-101] 顔の再認記憶における未来思考方略
Future thinking manipulation on recognition memory of faces
○堀内 孝 (岡山大学)
- [pP2-102] 壮年期・中年期におけるエフォートフルコントロールと認知的失敗傾向の関連
The relationship between effortful control and cognitive failure tendency in middle and late adults
○佐伯 恵里奈¹, 齊藤 智² (1. 神戸山手大学, 2. 京都大学)
- [pP2-103] 内省志向に関する意識的・無意識的自己認知
Conscious and unconscious self-reflection
○神谷 俊次 (名城大学)

[pP2-104] 不安障害における時間概念と感情価の連合
－潜在連合テストによる検討－

The conceptual associations between temporal and affective orientations in anxiety disorder: A study using the implicit association test

○伊藤 友一^{1,2}, 百田 友紀³, 岸本 泰士郎⁴, 三村 将⁴, 梅田 聡¹ (1. 慶應義塾大学文学部, 2. 日本学術振興会, 3. 慶應義塾大学大学院医学研究科, 4. 慶應義塾大学医学部)

現代心理学シリーズ

「人間らしさ」を生み出すプロセス

認知心理学

知覚、注意、記憶、思考、言語など認知心理学の主要な研究対象をはじめ、社会的認知、動物の認知についても、最新の研究の知見に基づいて学んでいきます。

1 認知心理学 — そのプロフィール —

心理学全体を支える基礎をなす認知心理学とは、どのような学問なのでしょう。記憶や思考などの認知活動をコンピュータがしているような「情報処理」として研究し、目覚ましい成果を収めてきた認知心理学のプロフィールを紹介します。

2 知覚 — 情報の入力 —

外界の物理的刺激は、感覚器官に受容され、脳で様々な処理過程を経て主観的体験として知覚されます。しばしば間違いや錯覚が生じるのは何故でしょう。依存度が大きな視知覚の諸相を中心に紹介し、それを支える神経機構や知覚の適当さと賢さを解説します。

3 注意 — 情報の選択 —

環境に適応して生き延びていくためには、入ってくる膨大な量の情報のなかから、重要な情報を選択しなければなりません。これが注意の役割です。注意にまつわる現象を体験したり、代表的な実験例を学び、注意の機能と働きについて理解を深めます。

4 記憶 I — 情報の貯蔵 —

記憶とは何かについて概観し、認知心理学における代表的な記憶のモデルについて解説します。人間の適応行動を支える様々な記憶のはたらきや研究方法、そして、短期記憶と長期記憶、作動記憶を解説し、記憶の基礎を学んでいきます。

5 記憶 II — 実生活の中で —

意味記憶やエピソード記憶など、最近研究されるようになった様々な記憶について見ていきます。後半では、事件や事故の目撃者の記憶に焦点を当てます。記憶の心理学的研究と人々の日常生活や社会との関わりについて、洞察を深めることができます。

6 思考 I — 問題解決と推論 —

何か問題が発生したとき、どのように解決するのでしょうか。問題解決や推論は、高次認知機能と呼ばれ、人間の認知の核心をなすものです。人間の問題解決の仕方の特徴、推論における知識の影響、そして最後に、私たち自身の合理性について考えます。

7 思考 II — 判断と意思決定 —

意思決定の重要な要因である効用に影響を及ぼす心理的要因と確率判断について考え、意思決定が文脈や感情などにどう左右されるかを見ていきます。よりよい意思決定とは何か、幸福感とは何かについて、考えを深めることができます。

8 言語 — 情報の伝達 —

ことばの入口ともいえる知覚のメカニズムについて、ボトムアップ処理とトップダウン処理に分けて概説し、言語の理解について、単語、文、文章に順次着目し、実例や実験を交えて解説します。また、非言語情報のコミュニケーションについても解説します。

9 社会的認知 — 人を認知する —

他者、社会的集団、社会的事象は私たちを取り巻く環境の中で重要な要素であり、その知覚、認知の判断は、対人行動や人間関係などに影響を及ぼします。社会的認知のメカニズムを検討し、陥りやすい社会的認知のバイアスについて解説します。

10 動物の認知 — 適応の手段としての認知 —

動物たちのこころの研究の進歩により、ヒトに見られる様々な機能が、動物たちにも備わっていることが分かってきました。動物の認知研究の意義、研究法を学び、動物たちの心の世界を知ることで、人間の認知の適応的な役割を理解していきます。

DVD 全10巻

時間：各巻 約30分

価格：各巻 本体 60,000円+税

総監修：高野陽太郎 (東京大学教授)

指導：高野陽太郎・渡邊克巳
伊東裕司・服部雅史
田中章浩・岡隆・藤田和生



刺激呈示装置 TP-03X

コンピュータによる視覚刺激瞬間視を行う汎用刺激呈示装置です。心理学、臨床研究の視覚実験に広くご利用頂けます。



液晶フィルムシャッター

透過式液晶調光フィルムを、単眼独立型(2CH)または両眼型(1CH)無音駆動シャッターとして各種心理実験にご使用頂けます。シャッタードライバーはON/OFF時間を制御するタイマー付き。シャッターCLOSE時の接点出力はプロジェクターなどに接続できます。



顔面固定器

スタンド式：顔の位置調整、あごの位置調整がワンタッチでできます。
固定式：テーブルを挟んで固定するタイプの顎台です。



自律神経系測定 生体情報装置 TYPE-A

面接やカウンセリング中の緊張、リラクセス等、生体情報(心拍、呼吸、皮膚温、G.S.R.、チェックマーカ)を5チャンネル同時測定します。データはテキストファイルに変換できます。

ミラーボックス



ボックスの片側上部からのぞき込むと、自分の実際の手と鏡に映った手が同時に見え、そのため、両方の手を同時に見ているような錯覚を受けます。鏡映像を使って視覚像と運動感覚のずれを作りだし、視覚-触覚や視覚-身体運動感覚などの異なる感覚モダリティ間の葛藤状況を体験することができます。ミラー療法による動き改善のリハビリに。

体温&G.S.R.バイオフィードバック装置



皮膚温とG.S.R.の変化を光点移動と発音音でフィードバックし、リラクセスや集中力の基礎的能力を高めます。

バイオフィードバックオートシステム：メンタルトレーニング指導法に基づき、バイオフィードバック装置を最大8CH接続し、皮膚温とG.S.R.データを解析します。

Win行動科学のBASIC集

統計解析ソフト
著者 篠原弘章

4要因表の検定モデル (9種) **NEW**

5要因表の検定モデル (20種) **NEW**

心理学実験や検査におけるデータの統計解析処理、検定用ソフトウェア。4要因・5要因の χ^2 検定(尤度比検定)のプログラム及び解説が新たに加わりました。



被暗示性テスト

被暗示性テストは、広く心理学基礎コースの実験実習に取り入れる事に適しています。セット内容：色名暗示テスト/重さの暗示テスト/圧縮・弛緩テスト/振りテスト/線分の長さ暗示テスト

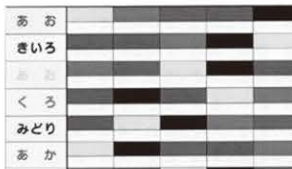
鏡映描写法ソフトウェア 知覚運動学習ソフト

鏡映描写2種のソフトです。従来の鏡映描写ソフト(所要時間、成績、逸脱回数、枠内時間、逸脱時間)に新たに描写遅延時間を設定できるソフトが加わりました。

錯視法ソフトウェア

ミュラー・リヤー錯視、水平垂直錯視ソフトのセットです。

新ストループ検査 II 著者 箱田裕司・渡辺めぐみ



ストループ効果と逆ストループ効果を測定できます。特に逆ストループ効果を測定できるので選択的注意を多面的に測定することができます。注意力の個人差、注意力の生涯発達の変化、手軽にできる心理学実験の教材としてご使用頂けます。※英語版あり

姿勢・歩行動作分析ソフト

歩行・立ち上がり・起き上がり・寝返り動作などの身体運動の分析、評価、訓練にご利用頂けます。【製品構成】簡易姿勢・歩行動作分析ソフトウェア(2次元)/キャリブレーター/動画取込ソフト

心理学実験教材



画面の教示を見て自己のペースで進めていく実験プログラムです。反応時間をcsvファイルで記録できます。【実験教材7種】斜線の食い違い(ホグゲンドルフ錯視)/斜的回転/対比較による尺度化/問題解決(ホビットとオーク)/着色文字の色名判定(ストループ効果)/文字の同異判断/顔表情の分類(概念形成)

心理学研究法教材

【実験教材4種】じゃんけん実験(確率変化視)/線引き実験(正誤フィードバック)/文字列実験(カテゴリー提示)/印象実験(二つの尺度)



表情認知検査 子ども版/成人版

著者 小松佐穂子・箱田裕司

顔に対する表情認知能力を測定します。子どもは子供の表情写真を見て、大人は大人の表情写真を見て「喜び・怒り・驚き・悲しみ・真顔」のどの表情かを回答します。回答は自己採点式。表情認知能力の個人差、表情認知能力の発達の変化を測定できます。

ストレス対処法質問紙 小学3年~中学3年生用 情動的知能質問紙

著者 小松佐穂子・箱田裕司

日本語版UWIST気分チェックリスト JUMACL

著者 JUMACL研究会(代表箱田裕司)

複合数字抹消検査 CDCT 著者 行場次朗・大橋智樹

◎「心」と「行動」のありようをさぐる実験法を総覧 **6月新刊**

基礎心理学実験法ハンドブック

日本基礎心理学会 監修
B5判 608頁 本体 17,000円 (52023-1)

多岐にわたる実験心理学の研究法・実験手続きを1冊で総覧。各項目2～4頁の中項目形式で簡潔に解説。

- 〔構成〕
- 第1部 実験の基礎
 - 第2部 感覚刺激の作成と校正
 - 第3部 感覚・知覚・感性
 - 第4部 認知・記憶・注意・感情
 - 第5部 学習と行動
 - 第6部 生理学的測定法



「かわいい」工学

新刊

大倉典子 編著
A5判 184頁 本体 2,500円 (20163-5)

学生から製品開発の実務者、一般読者に向けた感性工学入門。

〔内容〕 文化的背景／人工物の系統的計測・評価方法／「かわいい」感の生体信号による計測と分類／研究の応用／他



感性工学ハンドブック

—感性をきわめる七つ道具—

椎塚久雄 編
A5判 624頁 本体 14,000円 (20154-3)

感性を「はぐくむ」「ふれる」「たもつ」「つたえる」「はかる」「つくる」「いかす」の7つの視点から捉えて、感性工学と関連する分野を、製品開発などへの応用も含めて具体的に解説。



質感の科学

—知覚・認知メカニズムと分析・表現の技術—

小松英彦 編
A5判 240頁 本体 4,500円 (10274-1)

物の状態を判断する認知機能を科学的に捉える研究を紹介。

〔内容〕 基礎(性質、感覚情報、脳の働き)／知覚(見る、触る等)／メカニズム／生成と表現(光、芸術、言語表現、手触り等)



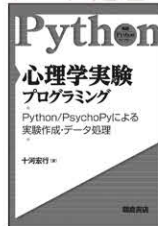
心理学実験プログラミング

—Python/Psychopyによる実験作成・データ処理—

十河宏行 著
A5判 192頁 本体 3,000円 (12891-8)

心理学実験の作成やデータ処理を実践。コツやノウハウも紹介。

〔内容〕 基礎／実験の作成(刺激の作成、計測)／データ処理(整理、音声、画像)／付録(セットアップ、機器制御)



視覚実験研究ガイドブック

6月新刊

市原茂・阿久津洋巳・石口彰 編
A5判 320頁 本体 6,400円 (52022-4)

装置やコンピュータプログラムなど具体的に示しながら解説。

〔内容〕 実験計画法／心理物理学の測定法／測定・計測／モデリングと分析／研究応用事例／成果のまとめ方と研究倫理



視覚情報処理ハンドブック

(新装版)

日本視覚学会 編 **新刊**
B5判 676頁 本体 19,000円 (10289-5)

好評書の待望の再刊。視覚にかかわる幅広い領域を信頼できる基礎的・標準的データに基づいて解説。

〔内容〕 視覚生理／測光システム／表色システム／視覚の時空間特性／形の知覚／他



食と味覚の人間科学 (全2巻)

基礎からビジネスの応用まで幅広い話題を取り上げる

食行動の科学

—「食べる」を読みとく—

今田純雄・和田有史 編
A5判 244頁 本体 4,200円 (10667-1)

食行動科学の基礎から予防医学や消費者行動予測等の応用まで取り上げる。

〔内容〕 食と知覚／社会的認知／高齢者の食／欲求と食行動／生物性と文化性／官能評価／栄養教育／ビッグデータ



味覚の科学

新刊

—一人の受容体遺伝子から製品設計まで—

今田純雄・和田有史 編
A5判 244頁 本体 4,200円 (10667-1)

食行動科学の基礎から予防医学や消費者行動予測等の応用まで取り上げる。

〔内容〕 食と知覚／社会的認知／高齢者の食／欲求と食行動／生物性と文化性／官能評価／栄養教育／ビッグデータ



心理学総合事典 (新装版)

海保博之・楠見孝 監修
B5判 792頁 本体 19,000円 (52020-0)

〔構成〕 I. 心の研究史と方法論／II. 心の脳生理学的基礎と生物学的基礎／III. 心の知的機能／IV. 心の情意機能／V. 心の社会的機能／VI. 心の病態と臨床／VII. 心理学の拡大／VIII. 心の哲学



朝倉書店

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29
電話 営業部 (03) 3260-7631 FAX (03) 3260-0180
http://www.asakura.co.jp

(ISBN) は 978-4-254- を省略
価格は税抜本体

写真のなかの距離の知覚

竹澤 智美著

八〇〇〇円

嗅覚と自伝的記憶に関する心理学的研究

山本 晃輔著

四五〇〇円

坂道の傾斜知覚の研究

對梨 成一著

七〇〇〇円

顔認識過程の特性に関する心理学的研究

遠藤 光男著

九〇〇〇円

展望的記憶の自発的想起と無意図的想起

森田 泰介著

五五〇〇円

意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズム

小野田亮介著

八五〇〇円

非空間的な注意捕捉と意図的制御に関する研究

犬飼 朋恵著

五〇〇〇円

演劇俳優の熟達化に関する認知心理学的研究

安藤 花恵著

六五〇〇円

抑制に基づく記憶検索理論の構成

月元 敬著

八〇〇〇円

再帰的事象の認識とその発達心理学的研究

林 創著

七五〇〇円

デジタルメディア時代における教育方法と遊び

小孫 康平著

六五〇〇円

自伝的記憶の構造と機能

佐藤 浩一著

七五〇〇円

離散量表象の認知過程

時田みどり著

五五〇〇円

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

風間書房

http://www.kazamashobo.co.jp
E-mail pub@kazamashobo.co.jp (価格税別)



有斐閣

出版案内 東京・神田・神保町2 TEL: 03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。

◎図書目録送呈◎

認知心理学

箱田裕司・都築實史・川畑秀明・萩原 滋著
基本的な考え方や用語、概念の理解を目指し、豊富な図表と厚みのある解説を施した本格テキスト。

三四〇〇円

New Liberal Arts Selection

心理学 新版

無藤 隆・森 敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治著
好評の決定版テキスト、14年ぶりの待望の新版化。

四二〇〇円



認知心理学 新版

道又 爾・北崎充晃・大久保街亜・今井久登・山川恵子・黒沢 学著
演習問題や事例紹介で初学者の学びをサポート。

二二〇〇円



心理学研究法 補訂版

高野陽太郎・岡 隆編
心理学研究における、科学的な実証的研究の重要性や基本のロジックを解説。「効果量」や「信頼区間の活用」に関する節を補訂。

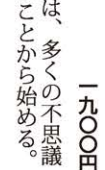
二二〇〇円



心理学・入門

サトウタツヤ・渡邊芳之著
日常の心の動きや対人関係には、多くの不思議が詰まっている。自分が身近に感じたこと、興味をもったことから始める。

一九〇〇円



基礎から学ぶ認知心理学

服部雅史・小島治幸・北神慎司著
人間の認識の不思議

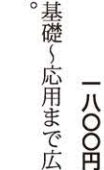
一八〇〇円



ゼロからはじめる心理学・入門

金沢 創・市川寛子・作田由衣子著
基礎から応用まで広い心理学の世界を概観できる、コンパクトな入門テキスト。

一八〇〇円



公認心理師エッセンシャルズ

子安増生・丹野義彦編
新しい国家資格公認心理師養成カリキュラムの全体像とキーワードがつかめる。新科目「公認心理師の職責」「関係行政論」のテキストに最適。

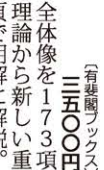
一六〇〇円



認知心理学ハンドブック

日本認知心理学会編
学会の総力を結集し、認知心理学の全体像を173項目でカバーした手引書・事典。各項目を、基本的な概念や理論から新しい重要な概念や理論まで、最も適切な執筆者が見開き2頁・4頁で明解に解説。

三五〇〇円



第14回 児童教育実践についての 研究助成

応募受付中

2018年7月2日(月)～10月31日(水)

Webにて応募受付、詳しくは博報財団ホームページをご覧ください

<http://www.hakuhofoundation.or.jp>

対象となる研究

- 「ことばの教育」に関する研究
- 児童教育実践の質を向上させる研究

応募資格

- 日本の大学・研究機関に所属する研究者
(教授職は除く)
 - 日本の学校・教育委員会に所属する
教育実践に携わる方
- ※応募に際しては、所属長あるいは指導教官からの推薦が必要です

助成金額

- 1件につき300万円を限度に助成します

助成期間

- 2019年4月1日～2020年3月31日
期間終了後、希望する場合は、継続助成の申請をすることができます

【審査委員】(五十音順)

楠見 孝	京都大学大学院	教授
針生 悦子	東京大学大学院	教授
藤森 裕治	信州大学	教授
本郷 一夫	東北大学大学院	教授(審査委員長)
横山 詔一	国立国語研究所	教授



北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8
☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com

生理心理学と精神生理学 第Ⅲ巻 展開

堀 忠雄・尾崎久記監修 室橋春光・学阪満里子編集
B5・380頁・本体4600円＋税 第1部ではワーキングメモリやデフォルトモードネットワークを中心に、脳のはたらきに関する最新の成果を紹介。第2部以降では発達・教育・臨床各領域への展開として、乳幼児の前頭葉の発達、読み書き処理、統合失調症の脳波、ADHDの注意機能と実行機能などを扱う。

認知心理学の動機づけと認知コントロール

報酬・感情・生涯発達の視点から T. S. プレイバー編著 清水寛之・金城 光・松田崇志訳 A5・448頁・本体4800円＋税 動機づけが認知を、また、認知が動機づけを支えるメカニズムについて、神経科学との融合分野から解説。注意、学習、記憶という認知プロセスと感情を含む動機づけのプロセスとの関係について最新の研究状況を俯瞰する。

古典で読み解く現代の認知心理学

M. W. アイゼンク・D. グルム編 箱田裕司・行場次朗監訳 A5・308頁・本体3600円＋税 注意・知覚・記憶といった認知心理学の基礎から、思考や言語などの高次の認知機能まで、バランスよく14の古典的研究を精選。その意義と限界を、第一線の研究者たちがスリリングに解説する。あたかも偉大な巨人の肩に乗りながら学べる絶好のテキスト。

ベイズ統計で実践モデリング

認知モデルのトレーニング M. D. リー・E.-J. ワーゲンメイカーズ著 井関龍太訳 岡田謙介解説 B5・264頁・本体3600円＋税 幅広い科学領域で標準的な分析方法となったベイズ統計。認知研究を主な題材とし、数多くのモデリングの具体例を示す。MatlabまたはRを使ってWinBUGSによる推定を実践し、とことんエクササイズできる。

シリーズ 感覚・知覚心理学 [仮題]

心理学と仕事 ー2018年刊行予定！ー 太田信夫監修 行場次朗編集 A5・約200頁・予価2200円＋税 基礎的な知見のまとめから、五感（視・聴・嗅・味・触）に纏わる研究とその応用領域を紹介。デザインや商品開発、パーソナルリアリティといった最新の話題で、身近な応用領域に迫る。心理学を活かした仕事に役立つ知見と働く人々の今を伝えるシリーズ。

学習科学ハンドブック 第二版 第1巻

ー基礎/方法論ー R. K. ソーヤー編 森 敏昭・秋田喜代美・大島 純・白水 始監訳 望月俊男・益川弘如編訳 B5・260頁・本体3700円＋税 メタ認知、足場かけ等の基本的概念を取り上げ、デザイン研究、協調的分析、教育データマイニングといった方法論により主体的・対話的で深い学びの成立条件を明確にする。科学的最新知見を提供する全3巻。

犯罪行動の心理学 [第6版] [仮題]

ー2018年秋刊行予定！ー J. ボンタ・D. A. アンドリウ著 原田隆之他訳 A5・約704頁・予価7000円＋税 膨大なデータに基づいて犯罪行動を科学的かつ綿密に分析し、犯罪のリスク因子、リスク・アセスメント、治療原則などについて解説。犯罪心理学の実践を転換し、世界中の犯罪・司法臨床現場に影響を与えた知見をまとめる。

たのしいベイズモデリング [仮題]

ー事例で拓く研究のフロンティアー 豊田秀樹編著 A5・約240頁・予価2700円＋税 国内の研究者が、身近で親しみやすい話題でベイズモデリングの魅力を伝える。有意性検定による統計分析から、より自由なモデリングを可能とするベイズ統計へと誘う。これまで諦めざるを得なかったような統計モデルが、次々と実装され、読者垂涎の事例集。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事 (全20巻)

シリーズ 監修 太田信夫

●A5判・約160～220頁・予価2000～2600円＋税

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

乾 敏郎著

感情とはそもそも何なのか

●現代科学で読み解く感情のしくみと障害 最新科学の視点から、十分に明らかにされてこなかった感情のしくみを解説。また、うつ病をはじめとする感情障害や自閉症、瞑想などにも言及。 2200円

よくわかる認知科学

乾敏郎／吉川左紀子／川口潤編 脳科学の発達やロボット工学の発達により変貌を遂げる認知科学を平易に解説する。 2500円

ロボットを通して探る子どもの心

板倉昭二／北崎充晃編著 ●ディベロップメンタル・サイバネティクスの挑戦 子どもはいかにして心・身体・コミュニケーションについての理解を深めていくのか? 3200円

脳科学からみる子どもの心の育ち

乾敏郎著 ●認知発達のルーツをさぐる 脳科学の基礎から最新の研究成果まで、すべてがわかる一冊。「叢書・知を究める①」 2800円

発達

155

特集 脳・身体からみる子どもの心

【特集執筆】乾敏郎／明和政子／根ヶ山光一／細田直哉／森口佑介／多賀殿太郎／杉村伸一郎／木村美奈子／熊合晋一郎／加藤寿宏／榊原洋一

脳と身体、両方の視点から子どもの心の育ちをめぐる最前線を紹介。「親子関係」「保育環境」「遊び」「発達障害」など複数の切り口から乳幼児の発達に迫る。

心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るのか

樋口 進監修 ネット依存の実態を平易に解説する。 1800円

めざすは認知症ゼロ社会！スマート・エイジング

川島隆太著 ●華麗なる加齢を遂げるには? 2600円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 *表示価格税別 目録呈
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589 www.minervashobo.co.jp/

TalkEye Lite / TalkEye Free (非接触タイプ)

【TalkEye Lite】

- 視野映像がハイビジョン化され高精細な画像で記録可能です。
- 頭部装着式の眼球運動測定システムで、眼球検出と視野にUSBカメラを使用し、処理用パソコンに直接接続するシンプルな構成です。



【TalkEye Free】

- 視対象をディスプレイに限定した眼球運動装置です。(静止画&動画)
- 対象物の評価など、グラスをかけないので、より自然な状態で測定測定可能です。
- 検出部は小型・軽量。三脚だけでなく、ディスプレイに直接貼り付け可能です。



人間の可能性を科学する
竹井機器工業株式会社

本社/〒956-0113 新潟市秋葉区矢代田619 TEL. 0250(38)4132 FAX. 0250(61)1211 http://www.takei-si.co.jp

《 視覚研究関連機器 》

Psykinematix Bits# Edition



サイキネマティクスは、Mac OS X 用の視覚刺激作成ソフトウェアです。
複雑な実験を計画・実行するための特別なプログラミングを必要としません。

LiveTrack Lightning

手ごろな価格の 500Hz アイトラッキング



視線、瞳孔径を正確に読み取ることができる、理想的なアイトラッキング装置

LEDCube 照明環境シミュレート光源



- ・高品質デライトシミュレーター
- ・黒体軌跡シミュレーター
- ・スペクトルパワー分布一致
- ・高速、正確なフィードバック
- ・ワイヤレス制御
- ・UV LED 追加オプション

- CCT: 2000 - 20000K
- D65: 1700lm, 1m: 850lx D50: 2400lm, 1m 1250lux
- Spectral range: 400-700nm

ViSaGe MKII 視覚刺激作成装置



刺激提示を正確なタイミングで行ない、Windows とは無関係にハードウェアにアクセスします。14bit-Video DACS と精度の高いキャリブレーション装置を備え、刺激の輝度と色彩の特性は拡張したダイナミックレンジ内で高精度に定義されます。

PLATO

視界遮へいシャッターゴーグル



PLATO は約 4ms で透明状態へ、約 3ms で遮へい状態へ、左右同時あるいは別々に切り替えることができます。
透明状態では、最大 80% の入射光が透過します。

Metropsis 視覚機能評価装置



- ・視力 ・空間コントラスト感度
- ・時空間コントラスト感度
- ・色弁別 ・ステレオの視力

BOLDscreen (fMRI 対応液晶モニター)

fMRI 対応 HD 液晶モニター



BOLDscreen は、fMRI の実験における高コントラストの視覚刺激を提示するために設計された、高解像度 LED バックライト液晶モニターです。
モニターはスキャナールーム内のどこにでも設置することができ、ポアの直近に設置することもできます。

- BOLDscreen 24 24" 1920 x 1200, 60Hz (1.5, 3T)
- BOLDscreen 32 32" 1920 x 1080, 120Hz (1.5, 3, 7T)

Display++

視覚科学のためのディスプレイ！



《ViSaGe 対応！》

通常のコンピュータモニターと同じくらい容易に使用でき、Psychtoolbox や PsychPy、Presentation、Psykinematix などのソフトと互換性があります。

正確なタイミング、校正された視覚刺激の提示



ナモト貿易株式会社

〒272-0804 千葉県市川市南大野 1-44-1
TEL: 047-338-3224, FAX: 047-338-3236
E-mail: mid@namoto.com
http://www.namoto.com

Eye Tracking Core+

人の眼球運動を追跡・可視化する
次世代ウェアラブル・アイトラッカー



EyeTracking Core+

アイトラッキングとは？

人の眼球の動きを追跡・記録・可視化し、分析する調査手法です。その先進的なテクノロジーは、ニューロマーケティング（神経科学の応用）、ユーザビリティ調査、ヒューマンコンピュータインタラクション（hci）、心理学や言語学、精神医学、眼科学、スポーツ、技能伝承や教育、市場調査、等幅広い分野において活用されています。

SiB とは？

2017年までドイツ SMI 社製のアイトラッキンググラスの販売を日本国内で展開しており、大学・研究所・大手自動車メーカー・食品メーカー等々沢山の販売・運用実績がございます。

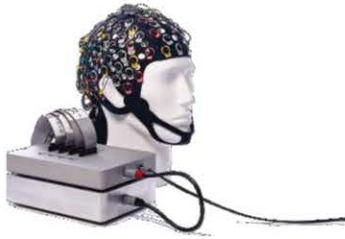
この度、SMI 社のアイトラッカーの製造販売が全世界で終了したことから、今までのノウハウをつぎ込んだ独自のアイトラッキンググラスである

EyeTracking Core+

をリリースするに至りました。

グラス型は全世界でも選択肢が少ない中新たな新製品として一度お試しください。





デジタル多用途DCアンプ

NVX

【基礎医学研究用機器】

脳波、筋電図、心電図、眼球運動、誘発電位等の信号計測を目的とする低ノイズDCデジタル生体信号増幅器

- 各チャンネル毎にフィルター設置が可能
- 外部入力刺激8bit、外部出力1bit
- 外部アナログ信号4ch
- EEGダイナミックレンジ±400mV AD 24bit サンプリング全ch2KHz
- USBでPCと接続(電源はUSB)
- MATLABやOpenViBE等での解析・処理により、BMI/BCI研究開発での利用に適用可能

【ラインナップ】 NVX52 (52ch) / NVX36 (36ch) / Neurovisor136 (136ch) MRI対応

測定パラメータ

EEG / EMG / ECG / EOG / GSR / RESP / Pulse



非観血式連続血圧計

CNAP Monitor

【基礎医学研究用機器】

指先のカフでの測定からリアルタイム連続血圧波形を表示

- 遅滞なく血流の変化を検知
- 動脈内測定に相当する精度と連続性
- 非侵襲的測定法で被験者のリスク負担軽減に貢献
- アナログ出力及びUSB CSVファイル出力が可能

測定パラメータ

Sys / Dia / Mean / PR / SV / SVI / CO / CI / SVR / SVRI / PPV / SVV



8ch ワイヤレス脳波キャップ

NB1-EEG8

【基礎医学研究用機器】

脳波キャップを2分以内で装着可能な容易脳波計

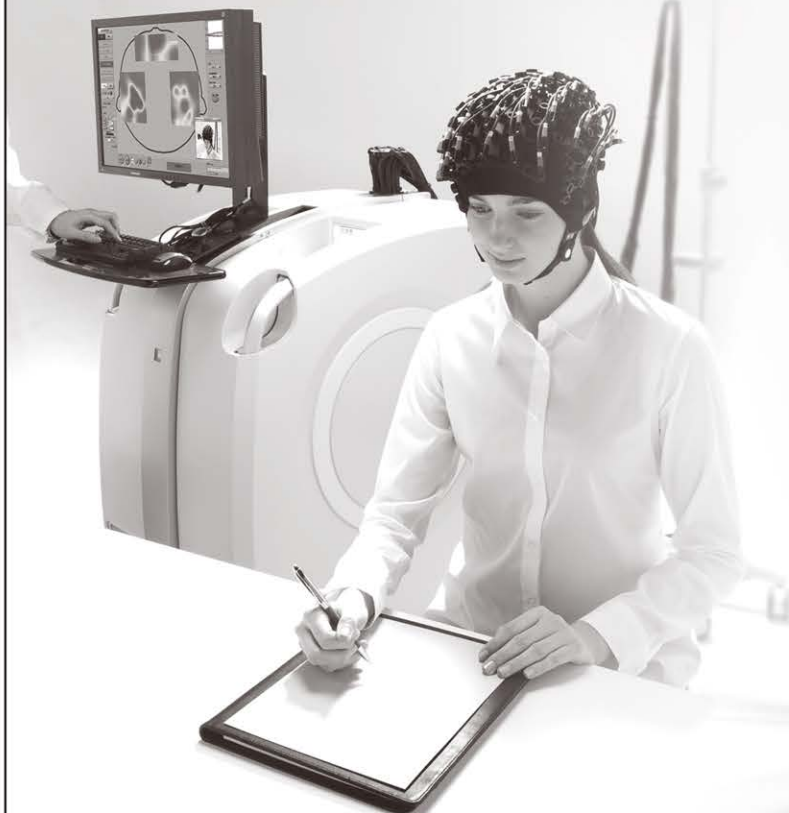
- Ag/AgCl電極により安定した計測が可能
- バッテリーは連続40時間以上使用可能
- 記録したデータはEDF、BDF、GDFファイルに出力
- Bluetooth 4.0 low energyにてパソコンと通信
- フリーソフト OpenViBEなどを使用したストリーミング解析のための LSLによるデータ転送が可能
- P300も測定可能(別途トリガー装置が必要)

EMC
East Medic Corporation

イーストメディック株式会社

〒920-0062 石川県金沢市割出町702番2

TEL: 076-239-4761 FAX: 076-239-1771 URL: <http://www.east-medic.jp>



次世代の 光脳機能イメージングへ

光脳機能イメージング装置は、生体透過性の高い近赤外光を頭部に照射し、生体内で散乱・吸収されながら反射される光の一部を検出することで、脳表の活動状態をリアルタイムに計測する装置です。医療分野をはじめ、発達心理学や教育学、認知科学や工学分野などの幅広い研究分野で用いられています。



研究用光脳機能イメージング装置

LABNIRS

functional Near-Infrared Spectroscopy System
多チャンネル、高速サンプリング等の機能により多用途に対応。



研究用ポータブル光脳機能イメージング装置

LIGHTNIRS

functional Near-Infrared Spectroscopy System
ポータブル化により、フィールドで計測が可能。

本製品は、医薬品医療機器等法に基づく医療機器として承認・認証等を受けた機器ではありません。治療診断目的にはご使用になれません。研究用途にのみ使用可能です。

株式会社 島津製作所

日本認知科学会第35回大会・日本認知心理学会第16回大会 プログラム・抄録集

2018年8月30日 発行

お問い合わせ先：

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 総合心理学部

日本認知心理学会第16回大会準備委員会委員長 仲真紀子

日本認知科学会第35回大会委員長 服部雅史

日本認知科学会第35回大会実行委員会：

jcss2018@jcss.gr.jp

日本認知科学会第35回大会プログラム委員会：

jcss2018-pc@jcss.gr.jp

日本認知心理学会第16回大会準備委員会事務局：

cogpsy16@gmail.com

大会関連情報：

両大会共通ページ：

<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/cogcog2018/>

日本認知科学会第35回大会：

<http://www.jcss.gr.jp/meetings/jcss2018/>

日本認知心理学会第16回大会：

<http://www.cogpsy16.jp/>

賛助団体ご芳名

日本認知科学会第 35 回大会および日本認知心理学会第 16 回大会は、下記の団体の賛助をいただいています。

〈広告・展示〉

イーストメディック 株式会社

SiB 株式会社

株式会社 北大路書房

ナモト貿易 株式会社

〈展示〉

株式会社 近代科学社

株式会社 クロス・マーケティング

トビー・テクノロジー 株式会社

株式会社 ひつじ書房

株式会社 ブックマン京都

〈広告〉

株式会社 朝倉書店

株式会社 風間書房

株式会社 サン・エデュケーショナル

株式会社 島津製作所

竹井機器工業 株式会社

株式会社 テキスト

株式会社 トーヨーフィジカル

公益財団法人 博報児童教育振興会

株式会社 ミネルヴァ書房

株式会社 有斐閣

(五十音順, 敬称略)



RITSUMEIKAN